
呉藍の薔薇

散花 実桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呉藍の薔薇

【Nコード】

N5382S

【作者名】

散花 実桜

【あらすじ】

10歳の誕生日を迎えたある日、少女の前に現れた即位したての青年王。

”王の女”となる素質を持つ少女は、侯爵の娘と共に成婚の儀を行った。

数日後、侯爵の手により下町娘になり、6年後運命の分かれ道がやってくる。

力と愛によって育つ筈の、王家の石は見事な蕾を付け、方や後宮に残った令嬢は、儚く散った。

「天上の呉藍」も同じ話です。

1章 プロローグ 「王の女」

プロローグ

「王の女だ！！！」
店の客から恐れるような声が上がった。

幼くして働き始めたミルティューは、この6年間遠巻きに見られることはあっても、侮蔑や恐れのみで見られる事は無かった。浮いた存在も今では馴染んでいたとばかり思っていたので、突然のことに差し出した皿を引っ込め、驚きから床に落としてしまう。石造りの床にガシャーンと言う大きな音が響き、続いてパリーンと高い音が響いた。

意味の分からないミルティューは、ただただ首を傾げ、男に脅えるばかりだが、店の女将や常連客は顔面蒼白で固まっている。

「まだ、幼いのにこんなに育って……冷酷王はロリコンなのか？」
目の前の客は今度は、哀れみの目でミルティューを見上げる。
そして、異質なピアスを震えながら指さし、盛大に溜息をつくとき、料理を食べることなく「お勘定」と言っつて、ミルティューの横をすり抜けていく。

何が起きたのか分からないまま、冷酷王という言葉だけが脳裏に刻まれる。

久方ぶりに聞いた噂が『冷酷王』。

中つ大陸の大国スターニス王国。現王。

一度もあの蒼穹の瞳の奥を覗くことが出来なかった存在。

其れもその筈だろう。王宮にいたのは僅かに一週間にも満たない。あれよあれよという間に、ココ領の所謂下町で暮らしていたのだから。

数分過ぎたか、先程の客はドアをカラカラン と陽気な音を立てて出て行く。

フリーズしたままだったミルティューに歩み寄った女将は、手に残ったままだった御盆を取り上げると空いた手で抱きしめた。ミルティューはホツとした為か、癖のように耳を触る。紅い石が存在感たつぷりに昔からの癖を阻んだ。

冷酷王は一部始終を執務室から見ていた。

1章 プロローグ 「王の女」(後書き)

呉藍と書いて”くれない”と読みます。

サイトでちまちまと書き出した話の過去世界の話をメモ代わりに書いてます。

もともとへたなのに、一発書きな上、色々とお見苦しいですが、気が向いたときに更新予定です。

なので、更新速度は亀並みです。

男がロリコン発言してますが、ミルティールは現在16歳です。

読んで下さり、有り難う御座いました。

実桜

下町娘の帰城

下町娘の帰城

先程の客が去ってから、まだ数分も経っていない、走って逃げなければ、まだ目の前の大通りの先には、伝説を民衆よりは知り得たその人物が見えただろう。

「今日はもう良いからお帰り」

女将が言うやいなや、けたたましくドアが開き、砂塵舞うような突風と共に、闇色のローブに身を包んだ青年がツカツカと一直線に歩いてくる。闇色の髪にローブの中から漂ってくる威圧感。

誰もが固まっている。時計の音がカチカチと刻む以外は、厨房からの忙しない音が響くのみで、数回瞬きして、目に入った埃を追いやると、いつの間にか店の中程に立ち尽くす看板娘の眼前に立つ。客らは何をする訳でもないのに、恐怖を抱いていた。

それ位、美麗な青年の顔は険しく、態度も横柄だった。

青年は女将を払いのけると、ミルティューユの顎をグイッと持ち上げる。

冷たいかと思つた手は、非情に温かい。故に静電気も発生せず。

そこに嫌悪感が発生しなかったのは、意外だった。

「まさかこれほどまでに育つとはな……」

桜桃のような唇、新雪のような肌、絹糸のような金髪。芯の強そうな瞳。

美しく育つた外見か。それとも……ぶつくりと膨れあがったピアスカ。

「もう、開花前の蕾だな」

ミルティエーユが蒼穹の瞳に魅入られていると、手は顎を離れピアスへと伸びた。

ああ、何だピアスカ……。感情が顕わになって一筋涙が零れた。妙に悟りを開いた所もあるが、自由を求めても住む世界は狭く、其れが幼く見せた。

強情だけど脆い。これが、看板娘ミルティエーユの最大の欠点。

だから、淡い期待は潰えたのは当然と言えた。見目麗しい男性をこんなに関近で直視したのは初めてだったから、ちよつと、期待したただけだと言い聞かす。

言い聞かせなければ、へ夕に温度が上がって、真っ赤な頬になってしまい恥を搔くだろう事は目に見えている。大きく深呼吸して、吐き出す。今なら恐怖に涙しただけだと言いつ張れる。

ミルティエーユが言いつくろう言葉を探していると、薄い唇ながら形の良い其処から漏れた言葉に、瞬きを繰り返すしかなかった。

「まさか、夫の顔も忘れたのか？」

「……………」

静寂の中でその声は、響いた。

一人で生きて行くには、そうならざる得なかつたきつい目がまん丸に見開かれる。

男は呆れたように溜息を漏らすと、三角巾から零れる長い金糸の髪を長い指で梳いた。

「ミルティエーユ・エクリップス・ドウ・リュヌ・モント・フィン・スターニス」

6年前成婚の儀式で1回口にしただけの、忘れた名前を紡がれる。発音の良いその声。バリトンの重厚で艶のある聞き覚えのある声。

間違いない。ミルティエーユが忘れたくても忘れることの出来ない人。このピアスの枷をその手自ら埋め込んだ人物。

「……………ラニー」

観念したように、青年の愛称を呼んだ。

多分今、この名を口にすることを許された者は少ない筈だから。

「久しぶりに聞いたな。どうせ、私の名前は覚えていないのだろう？」

「……」

青年は一瞬だけ寂しそうに笑った。

ミルティューは申し訳なさを隠すように、俯く。

「まあ良い。ラヴァニーク・エクリップス・ドウ・ソレイユ・ゾネン・フィン・スターニスだ。ミュ王城に戻るぞ」

ラヴァニークはそう宣言すると、自身のローブの中へとミルティューを引き摺り込む。

拒もうにも、少しざらつとしたその手は、剣だこが一杯で鍛え上げられているのが分かる。

何の抵抗もしないまま、途端に目映い光に包まれ、瞬きを繰り返したら、其処はかつて一度訪れたことがある王城の執務室だった。

一瞬にしてのその行為は、6年前のあれと同じ。

「魔術は時として残酷だわ」

ラヴァニークに聞こえない様小さく愚痴る。

お世話になった女将や大将。馴染みの客や行き付けの店の親切な人たちに御礼も言えないままなのが心苦しかった。

疎外感を感じる中で、余所者であるミルティューに親切にしてくれた人達だ。

たとえ、ココ侯爵と言うバックがあつたにしろ、厚意には感謝しても仕切れない。

必至に忘れた過去を燻らせる。

静寂に包まれた執務室は、春の光を窓から招き入れ、そよそよと温かくなつた風が時折カーテンを揺らす。

風に乗ってインクの匂いが鼻につく。冷酷な魔王等と呼ばれる王の治世になつてから早6年。

一度も戦争は起きていないし、下町の暮らしも活気が出てきた。これで兵が真面目に警備目的で巡回してくれば、文句はないと言つぐらゐに気に入つていた。

ミルティユーが辺りを物珍しそうに見回している間に、ラヴァニユーはローブを脱ぎ、きちんと所定の位置に掛ける。その足でデスクの上に置かれた書類の山にすぐ向かう王を見て、噂は当てにならないのかもと思う。

王都から馬車でも2日かかる野心家なココ侯爵領の下町であるあの場所は、その領地とは思えないほど長閑だった。税も高くはないし、物流も幼い頃ミルティユーが暮らしていた領地よりも良かった。

冷酷王は手中にある花を見下ろすと、満足げにフツと鼻を鳴らした。「本当に久しぶりだな」

「王様とお逢いするのは、成婚の儀以来ですから」

「ラニーと呼べ。ミュ」

余所余所しい言葉を口にすれば、フレンドリーに返される。

上から目線だけど、穏やかに笑う口元。老いを知らないその顔は始まりに似ていた。

真つ白い花が一面に咲く、屋敷の庭。其処に湖よりも輝く太陽を頂く真つ青な空の様な蒼が降り立った。

『お前の名は？』

『ミュ。貴方は？』

『私の名はラニーだ。ミュお前を迎えに来た』

ラヴァニユーがそう言つと、真つ白い花は花びらを舞わせ、気がつけば蒼に染まつていた。

7色の庭。魔方陣が幾重にも組み合わされた荘厳な屋敷はそのまま

に、色だけが変わった。

季節の変わり目でもなく、花が変わったわけでもなく、場所が変わったわけでもなく。

……魔法を振るった訳でもなく色だけを染め変えた。

出逢ったのは、ここから、遠い田舎。山と湖に囲まれ、街道が一本しかないようなひっそりとした閉ざされた地。

出逢い、初めて交わした言葉が名前で、両親しか呼ばない名を久方ぶりに聞いた所為か、故郷を思い出し、感傷に浸っていると、もう一度繰り返し「聞いてるのか、ラニーだ」と耳元で強く言われ、ミルティーユは我に返る。

此処にはあの不思議な花園はない。

当たり前だと思っていた青白い光に満ちた屋敷もない。

在るのは、そのどれもが国にとって重要な案件の書類と冷酷な魔王と呼ばれるラヴァニーユだけだ。

下町娘の帰城（後書き）

メモなので短く。一応書き進めるにつれて、何度も修正を掛けてます。

どンドン文章力がやばくなる今日この頃です。

次話の次辺りに、登場人物紹介入れるかした方が良いかな？

ミルティューユが自分の現在の名前も忘れてしまうぐらい長い名前にしたくて、でも、考えるの面倒なので、これの遙か未来編と同じ手法を使いました。

月食を2回繰り返した名前です。

ラニーは忘れてたというか、後宮にいるより下町娘の方が安全だから放置してたのだと思います。何故迎えに来たかは、あらずじで触れている通りです。

こんなでも、付き合って下さったら幸いです。

実桜

王の心は秋の空

王の心は秋の空

此処は、質素で無機質。人の訪れを拒むような、威圧感を放っている。

その後者は、主から発せられている者なのだが、慣れない部屋に其処まで思考が回らない。

ただ、何で今更という言葉が横切る。

だから、6年も放つて置かれたのだから、大丈夫とばかりに切り出した。

「帰して下さい」

ラヴァニーユが指定席に座った途端、ミルティューは懇願した。離れた今しかないと踐んだのだ。帰ると言っても帰る場所はない。「何処へ？」と聞かれたら答えられない。騒ぎを起こしたあの街へは帰れないだろうし、故郷は……。

しかし、此処ではない何処かで平凡な暮らしに未練がある。

帰城したことがココ侯爵にばれれば、契約違反になる。ミルティューは顔面蒼白で、対するラヴァニーユは憤慨している。

歳の割に若作りな顔に不快な色を浮かべて、太く重厚な声が執務室に響いた。

「無理だな。いい加減戻つても貰わねば困る」

「何故ですか？」

左手の人差し指をコツコツとデスクに連打し、イライラした仕草を隠しもせずラヴァニーユは大きく息だけを吐き出す。

「ノワ・ド・ココが死んだからだ」

「!?!」

「……私の妃はミユだけだ」

再度、驚きで目を見開く。最後の言葉は乙女なら喜びそうな言葉だが今のミルティークの耳には届かない。引けていた腰が身を乗り出す格好になった。

面白くなさそうに、其れで居て清々したとばかりに、ラヴァニーユは深い息を吐く。

そんな、話は初耳だった。其れもその筈。喩えココ領に住まう民で在っても、後宮に召された者の安否や近況は一切外部に漏れることはない。

スターニス王国の王家の男子は、外交に式典にと顔を晒すが、妃や姫に関しては秘されている。現王が婚姻しているのか否かすら知らされず、世継ぎを設けて公開されて、やっと、あの王は妃が居たのかと知るのだ。

現王ラヴァニーユには6年前の時点で、2人の妃が居た。

1人はミルティーク。もう1人は、ノワ。ココ侯爵の愛娘である。

ラヴァニーユはノワ・ド・ココと呼んだ。その事に不審に思いながらも、別の大きな事柄が気になる。

ミルティークが最後に見たのは6年も前になるが、6才年上の彼女は健康そのもので、病気とは無縁そうだった。

緩いウェーブのかかったブロンドの髪。歳に不釣り合いな派手目の化粧を施した侯爵令嬢。

気位が高くて、成婚の儀で顔を合わせた時向けられた侮蔑の表情がミルティークは忘れられない。社交界が大好きで、毎夜踊り狂っていた割に、身が固かったのが幸いし、ラヴァニーユが拒めなかった人物。公爵の孫娘。忌々しいとばかりに吐き捨てられる言葉。

「種を必至に守って六年。遂に果てたのだ。最初から侯爵ごときの娘には無理だと言っていたのに愚かな。私がお前を見出して来たのが不満だったから、よく知りもせずにごり押しなどするからこうな

る……」

その言葉に恐ろしくなって、ミルティューは魔法具と密かに呼んでいたピアスに触れた。

カタカタと震える手でやっと捕らえると、体温程度の温もりを感じる。

「お前は平気だ」

再度、ミルティューの手に微かにラヴァニーユの手が触れる。そのまま、頭上へと伸ばしたかと思うと、わしゃわしゃと髪を乱すぐらゐに撫でた。

屋敷にあつた埃を被つた書物にも、開かずの間と呼ばれる閉ざされた部屋にも其れはなかつた。あの日初めて目にした紅石。

王家の石と呼ばれるそれは、以前の王の女が死した時、花は子の元へ飛び立ち、子が死すと花は砕けて種となったものだ。スターニス王家は第一子の子が成した国。その時の種か、幾代か後か。混ぜられたそれにタグはない。

成婚の儀式は、前王の様に煌びやかでもなく、採寸して何ヶ月も掛けて準備したかのような純白の衣装を纏い、礼拝堂で誓いの言葉を言うだけ。キスすらすることなく、直後激痛が両耳に走る行為だけだった。

『痛みは時期に消える。もう、これで終わりだから我慢してくれ』
膝まで伸びた髪を掻き分けて最後に右耳に電流が走る直前耳元で囁かれた言葉。

掠れた優しい声音と宥める行為のあやすように頭を撫でる手。想い出すだけで安堵感を与える。

今でも数少ない王城の記憶の中にそれは残っていた。

ミルティューが先だった。

痛みに蹲っていたが、突如上がった悲鳴に恐る恐る見上げると、ノワが右耳に紅い証を埋め込まれている所だった。

自らに濡れる感触はなかったが、血でも流したような錯覚は目の前の行為で払拭される。

緩やかなウェーブがかかった髪をアップにし複雑な編み込みによって巻かれ、わざと垂らした後れ毛が、実年齢より色っぽく見せている。其処に誇示するように紅く輝く石は、豆粒ほどにも満たないのに、存在感は十分だった。

『遠き父母よ……子たる我に扉を開き給え。女神に慈悲を。永久に繁栄を。……』

ラヴァニーユは誓いの言葉を唱える。

先程は、『遠き父母よ……子たる我に扉を開き給え。女神に加護を。永久に繁栄を。……』と唱えたが微妙に変えた抑揚は機械的。不満を詠唱に込めていたが、立会人は2人しか居らず、緊張と悲鳴が交錯する中では、誰も気には留めないだろう。

先が見えているのにしなくてはならなかった行為。ラヴァニーユは腹を汚されて憤慨していたが、その哀れな末路に憤りを感じていた。激痛に耐え、毒が抜けたみたいにあどけなく微笑んだノワ・ド・ココ。

伏せられた睫に、キラキラしていた蒼穹の瞳が陰る。

「今度はノーチェと言う娘をだと……懲りない男だ」

まるで、泣くのを堪えているかのように、目を閉じたままぐっと顔を顰めて、宙を仰いだ。

再び、見開かれた瞳は薙いだ海のように、ミルティーユは押し黙ることしかできなかった。

不遇に文句を言うことさえ出来ない。安心と安らぎを瞬時に与えてくれるような優しい視線に、肩の力が抜けた。

ミルティーユはノーチェと言う名前には憶えがある。ココ侯爵の屋敷預かりの公爵の息子が愛人に産ませた庶子で、ミルティーユより

2歳上の娘だ。認知されている以上、公爵家の娘なのだから、ノワ亡き後輿入れの話が上がっても、不思議ではない。

しかし、侯爵の娘であるノワ同様、資格がないのに仕方がないという現状に、冷酷な魔王もしくは冷酷王と呼ばれるラヴァニークとて胸を痛めない事は無いのだ。

「私の母の身分が低い為、現状では断れないのだ。ノーチエが駄目ならアリエーフとか言う名の一回り以上離れたひ孫を寄越すかもしれん……」

「ちなみにアリエーフ嬢はお幾つなのですか？」

「お前が輿入れした時と同じ年だ。童がお好きなようですから等と嫌み付きで言われたぞ！」

正確な歳を尋ねてはぐらかそうと試みたミルティークだったが、逆に同情を禁じ得ない。

ラヴァニークの母とて、けっして出自が低い訳ではない。男爵の娘だが祖父は王家の者だ。

祖母と一緒にいる為に、出奔している為、後ろ盾にはならないが。

「私はその歳には自分の力を理解していたから、コントロールする事だけではなく、鍛えることすらもしていて、意識だけを飛ばした時、遠くの地から祝福の鐘が聞こえたのだ」

王はデスクの上に両手を組んで、顎を載せて頬杖を付くと、にこやかに笑って見せる。

「ミュ、お前は平気だ。ハイデルベールの末裔だからな」

「貴方の様に力もない古の王族なだけの私が保証されるのですか？」
魔王と呼ばれる魔物の血を引く人に言われると、自分の方が異端な気がして、納得がいかない。

「まあ、最後の姫だから、何百年か前にこの大陸を統べていた……位にしか聞いてないのだろう？」

「ハイデルベールは失われた魔法を引き継ぐ唯一の家系です」

古の王族で在ることすら、攫われた当日に聞かされたとは口が裂けても言いたくない。

其れを察してか、王は「可愛げのない……」とぼそりと呟く。

「今日は、もう良い。ミユの部屋は用意してある。部屋を出た右側に控えているオルジユの妹に案内して貰え」

先程とは打って変わって、低い声が鼓膜の奥にまで響いた。風が唸るような身震いするほどの寒々しさを憶えた。

速く逃げ出したくて、踵を返すと一度も振り向くことなくドアを指す。

重厚な其れを力一杯押し開けると、身一つ抜け出せる隙間を作り、滑り込ませると廊下に出た。紅い絨毯が敷かれた石造りの床にくぐもった音を響かせると、場違いだと叫び出したくなる。かといって、もう1度中に戻りたくはない。

どうしたものかと考えあぐねていると、ドアの右側に控えていた兵の後方からニヨキツと出でた女性はスツとミルティーユの前まで来ると、行き成り跪く。

「私の名前はルリ・イア・エスピガと申します。王妃様、これより私が命に代えましてもお守り致します」

手入れの行き届いた何処かのご令嬢らしき女性の第一声は、まるで騎士のような言葉だった。

ラヴァニークはその光景を見届けると、安堵からか肩の力を下ろす。ミルティーユと入れ違いに、左手から一礼して入室してきたオルジユは横目で見やりながら、妹に合図を送る。片手を上げると、控えていた兵が重厚な扉を閉じた。

王の心は秋の空（後書き）

メモなのに長すぎた……。

サイトの方の話が、どっちも相手に遭遇しないものだから、こっちは初っぱなからGOにしてみました。出逢ってしまえば、話はサクサク……行くかな？

打ってるとうっかり、ミル視点に。何でだろう？

早くもストック尽きました。

読んで下さり、有り難う御座います。

実桜

王の事情

王の事情

「祝福の鐘の御姫さんが、薔薇姫とは熟々運のいい人ですね」

群青のジュストコールの上着が、僅かな縦揺れを起こす。オフホワイトのキュロットの裾に届きそうな長い上着は王の側近の証である。からかう声に、先程より一層低くなった声が不機嫌さを増した。

「オルジュ、その事を他に告げたら分かってるな」

「心得てますよ。冷酷王の慈悲など期待しません」

すっかり慣れた様子のオルジュは、顔を強張らせることもなく、一礼して、サイドに設けられた自分のデスクへ腰を下ろす。

ドスツと何時もより乱暴に崩れ落ちたオルジュに、ラヴァニークは一笑した。

「すまん。短時間に」

「本当ですよ。定期報告すら最近おざなりだったくせに、行き成り水晶球を観られて消えてしまつんですから」

オルジュとラヴァニークの付き合いは長い。所謂ご学友の仲だったのだが、切磋琢磨しあつたが故に、互いの感情も読み取れるし、信頼関係も築けている。能力重視を掲げるラヴァニークにとって、重要な存在だった。

2人きりになると形式張った敬語は廃止し、砕けた会話となる。

「すぐに行動してくれるのは頼もしい。あれの侍女にはお前の妹を付けるのだろう？」

「務まるか分かりませんが、今はあれ以上に適任な者は居ないですよ。もう1人か2人付けますか？」

「いやいい。今夜にでもあれの部屋は王宮の東に移す」

「陛下の隣ですか。ドーロス公爵がなんて言うか」

「気にすることはない。ドーロスも先が長くないからな。そもそも、孫娘があんな形で果てなければ、静観側だったはずだ。面目の為に脅しているに過ぎん」

ノワ・ド・ココの輿入れは、王宮内の一部には知れていた。度重なる戦で疲弊した王宮内にあつて、有力な貴族は外戚を狙いやすい。妃の父、祖父である事は、勝者の証である。

人の口に戸は立てられない。事あるごとに、お目にかかることは叶わない娘の自慢で優越感に浸るのがココ侯爵の話題の源だった。

建国からの歴史を知る数少ない公爵は、ラヴァニーユに妃を差し出すより、王兄を望んだことだろう。

代々王の花嫁を輩出してきた公爵家は、王に娘を差し出す代わりに、定期的に王弟や王子を婿に貰う。そうして、近親婚を繰り返すのは訳があつた。

「何事も紙一重つて事ですよね」

「ああ、力を保持のために近親婚を繰り返せば、それだけ負荷がかかる。更にスターニスは男しか生まれん。これは呪いと言っても過言ではない。公爵どもの娘は愚兄に全て嫁ぎ済み。まあ、あの中に器は居ないがな」

「陛下が近年に置いては杞憂な存在なんですよ」

「自覚してるから、早々に花嫁捜ししただろうが」

「見つけたのが、生まれたての赤ん坊とは思いませんでしたけどね」
ラヴァニーユは年甲斐もなく、唇を尖らせて不快感をあらわにした。ただか10歳差ではないか。出逢いが生まれたての赤子でも、婚姻したのは10の歳になつてからだし、手も付けず（すっかり忘れていたが）、今や庶民でも嫁ぐような歳の16だ。

「あの日は驚きの連続でした／＼／＼／＼」

オルジユは子供だった自らを想い出し、失笑した。まだ互いに10

の歳の出来事である。

あの日はラヴァニーユの意識が大気に乗り、1周が叶った日でもあった。

12の歳まで王子は父の後宮にいられる。

その中に置いて殺生はタブーで、王位継承争いの渦中にいても、幼い内は守られる。

末王子が後2年したら、17歳年上の第一王子から7人入り乱れての骨肉の争いが勃発する。しかし、その前に、スターニス王は没するだろうと、ラヴァニーユは践んでいたので、自分の身を守る事を重視していた。

力が並外れていたラヴァニーユが、古の王族がひっそりと住む結界の中の田舎街にもたどり着いたと聞くやいなや、開いた口がふさがらなかったが、「花嫁見つけたぞ」としれっと付け加えられ、オルジユは驚きのあまり腰を抜かしたほどだった。

「そもそも、呪いの王子を婿に据えているのだ。公爵家に女兒が誕生する確率は低い」

「婿に行っても、嫡男並みに扱われるから、妾一杯抱えた方も居ましたけど……」

「王の女……先人の知恵だな。そもそも、誰が考え出したのだから」

「お陰で手当たり次第手を出したり、後宮に大量の女を召し上げたりしなくてすみましたよね。先王には年頃の公爵令嬢を宛がいましたし……」

「面倒な。他国は良く出来るよな。財政はどうなってるんだか……」

「まあ、だから、先王でも戦に勝利できたのでしよう。うちには必要ありませんが。王妃様は陛下の若紫ですからね」

「あれの育成に手出しはしとらんぞ」

「やってたら引いてますよ。身近で観てますからね」

思っても見なかった発言に、少々面食らった様子のラヴァニーユは話をそらそうと、デスクに片肘ついて顎を載せると、ニヤツと笑う。オルジユは、気がついて椅子をデスクの中へ更に仕舞うと、積み上

げられた書類に手を伸ばした。

「それにしても似合わんぞ」

「分かつてますよ……」

鍛え上げられた身体に、エスピガ家の家紋にも使われる麦の穂柄の刺繍の施された上着と、同一柄のベストも似合う。兄妹そろって鳶色の瞳で、オルジュは栗毛だったが、群青とのコントラストも抜群である。

ただ、体型的に微妙なキュロットとクリームがかった色合いのタイツの似合わなさに、ラヴァニーユは顔をしかめた。

「妹は腕は良いんですけどね……趣味はちよつと」

「その組み合わせも、カバジート兄なら似合うと思うが」

「マール公爵は（陛下と似て）、童顔ですからね」

カバジート・デ・マール。王兄であるが臣下に下った人物である。

前マール公爵は、愛妻家で病弱な妻を気遣って、娘1人しか設けなかった。

頭も切れる為、長兄のポーネより王に相応しかった人物であるが、朗らかな性格が災いしてか、表舞台を拒んだ。一回り年上なのに、未だに半ズボンが似合うぐらいに若々しい。

前マール公爵の異母妹の息子であるカバジートは、ラヴァニーユが生を受けると悟ったように、「公爵家を継ぐ」宣言をしたのである。

「兄上の前で言ってみろ。あれは喜ぶ」

「貴方は喜ばないって事は理解してますよ。力あるから恐れられる冷酷王。冷酷な魔王なんていう呼称を利用して御出だから」

「分かつているなら、働け。後5時間で終わらせる」

「……はあ？」

「外周かベッドかどちらかには方陣を張りたくないからな」

行き成り発言に素頓狂な声を上げるが、ギロツと睨まれて仕方ないと溜息を吐く。

冷酷な魔王と言う呼称も強ち間違えではない。的確なあだ名だと吐く息に込めたい気分だった。

いつの間にか手を出した書類をもの凄く速さでより分け、文字を拾いながら決算していくラヴァニーユを前にオルジエは、妹の件もあり協力を願い出すには居られない。

何日も後宮に置いておいたら、未だ居るノワの侍女らが動きを見せないとも考えられない。

あの日のように、甘言を囁くかも知れないし、最悪の事態も考えられる。

ルリは伯爵家の娘だが一風変わっている。後宮の物が破損しない内にと、兄であるオルジエは願う。

「じゃあ、本日中に決済しなければならぬ書類と事案だけ回しますよ……」

「流石はオルジユ」
常にその笑顔ならば、隣国を凌ぐ後宮を築けそうな満面の笑みでオルジエを煽てる。

ラヴァニーユは鼻歌交じりに、本日分の書類を当初目標の半分で片付けると、あつという間に執務室から姿を消した。

その後ろ姿を、埋もれた書類の山の上に突き出すように片手を振って見送ると、オルジユは嘆く。

「本当、有能な王様だよ……」と。

鼻歌は呪文の詠唱で、見ていた書類は汚職関連。

誰からきるか思案しながら、高度な呪文の詠唱を続けていたのだ。

王の事情（後書き）

ラヴァニーユとオルジユの話です。

現在の事情と過去を語るには、この方が手っ取り早いので。

オルジユの母を乳母にするか、ラヴァニーユの母と親交があった事にするか悩みます。

ややネタバレ

文中で触れていますが、ラヴァニーユが後宮を出る歳に達してから、先々代の王が崩御していたら、王になるか殺されていたって言う事です。では何故愚兄である先王は他の弟達を殺さなかったか。その答えも文中に出てますけど。

次話は、ミルティューとルリのサイドを頑張りたいと思います。

2パターン考えていて、無難に突き進むか。遊ぶか。

無難は予約投稿済みなので、遊ぶバージョンは書いている途中です。どっちが最終的になるかは未定。

没版は、サイトのブログにひっそりと書き留めておきます。勿体ないから。

何時までこの日狙いで更新できるか分かりませんが……。

サロンとロサ……変な拘り。

せめてロサ更新だけは維持したいです。

此処まで、読んで下さり有り難う御座います。
拙い話ですが、楽しんで頂けたら、幸いです。

実桜

伯爵令嬢の悪戯

伯爵令嬢の悪戯

案内役のルリは悪戯っぽく笑った。

「ミルティール様の事を暫くミルとお呼びしますけどお許し下さいね」

様付けは性分ではないのでコクリと頷くと、ルリは良かったとばかりに口角を緩めた。

今では下町娘で、ちゃん付けで呼ばれているのに、“様”と呼ばれるとこそばゆい。

七色の庭園のある故郷では生まれながらに様付けされていたが、限られた人と空間に置いてのことで、家族の中で女の子は誰でも姫様になれるように、名前の代わりに姫様と呼ばれていたようなものだった。

箱庭で守られてた子供の頃、時を止めたかのように時代遅れの街で、ミルティールは一人だった。親だと思っていたのは親ではなく、でも自分は時忘れの古の王族の正当な末裔で、田舎領主の娘だった。国を変える力さえないのに……。一介の下町娘にはもう戻れない。6年間で夢の出来事ではなかったかと一瞬思う。

故郷に戻れていれば、また違っただろうが、ミルティールが去ると同時に役割を終えた街は火を掛けられ消失した。

最初から、ラヴァニールの花嫁になることは、本当の両親は知っていたのだろうか。

ルリは丁寧な挨拶をした後、固まっていた。

王の女を見るのは初めてだった。そして、見事な細工を施したかのような瑞々しい紅色の薔薇の蕾が両耳に輝く。ミルティューコの格好とアンバランスな其れは、数年後には見事に開花するであろう容姿と比例したかのように、しっかりと閉じている。

「ルリ様？」

まじまじと覗き込むルリに、背をやや反らせて疑問を投げかける。後宮勤めと言うこともあり、顔の手入れは行き届いている。メイクもナチュラルな感じで好感が持てる。

「すみません、無礼を。私は貴女様の臣下で御座いますから、様は必要ありません。」

ただ、少しの間だけそう呼んで頂けると助かります」

ミルティューコより背の高いルリは、立ち止まったままのミルティューコに屈んで恐縮したように話しかけると、顔を歪めた。

ミルティューコとルリは、人通りのない3階の廊下を連れだつて歩く。重厚な扉が幾重にも連なり、細かな細工が施された彫刻や有名な画家が描いた絵画が等間隔で鎮座する。磨き上げられた柱にさえ場違いな姿が映り込みそうで、早足で通り過ぎた。

紅い絨毯にくぐもった音を響かせながら、場違い感丸出しで突き当たりの階段を降りる。

2階に差し掛かると活気に満ちた声が響き、国の中枢であると言うことを改めて感じさせた。ただ、黙して歩きながら1階が見えてくると、傍らに立つルリが耳元に囁いた。

「ここから先は巧みなさつて下さい。私が何を言っても驚く事をなさいませぬように」

「……」

先程のやや砕けた感のある微笑みに反比例して、至極真面目に言うので、生唾をゴクツと飲み干す。

階段を降りた西側の突き当たりには重厚な扉が両脇に兵を抱えて建っていた。

見事な細工の扉の前で、ルリは胸元から4つ折りにした紙を取り出すと、読み上げる。宣言と言っても過言ではないほど大きな声は、この一体の異様な空気を薙ぎ払った。

「私はルリ・イア・エスピガです。兄オルジユの命により、後宮の新たな使用人として彼女を雇い入れるとの事です」

ルリはそう言うと、ラヴァニーユの黄金文書を無礼にも再度折りたたむとミルティューの背を押した。ミルティューは驚きをかみ殺しながら、常で身についたお辞儀をすると、重厚な扉はゆっくりと開かれる。夜が長くなり始めた若葉の頃の昼間。外からの強い光は、陰気な空間に強烈に差し込み、壁に掛けられた幻想的な天使ステンドグラスの七色を彼方此方に飛ばした。

重厚な扉を騎士2人の力で割り開かれた先。

まるで、王が伽のために渉るような。それ以上の緊張感を持って夕方ぶりに開かれた扉の向こうは、甘酸っぱいような花の香りが漂う煌びやかな渡り廊下が長く続いていた。

「眩しい……」

あまりの目映さに桜桃の様な艶やかな唇から漏れた。

「良い天気ねミル」

と、ルリは返す。絨毯を失った石造りの床に、ルリのピンヒールの音が響いた。

反響して幾重にも重なる音は、教会のベルの様に静けさを薙ぎ払う。

幼馴染みの騎士が通り過ぎようとするルリの腕を掴み引き寄せると耳打ちした。

「この扉からとは珍しいな」

「ルークにも伝達が言っているでしょう？王妃様が帰城なされるので、兄付きとして召し抱えた彼女を急遽後宮へ送り込むんですって。」

で、私はその付き添い。でも、行く行くは王妃様の侍女になる予定だから、そのまま後宮勤めかしら／＼／＼／＼」

陽気なルリに呆気にとられるルーク。幼馴染みとは言え、相変わらぬの突飛つぷりに驚きと呆れが半々だった。「おまえなあ」と「白い手袋を嵌めた大きな右手で顔を覆う。

赴任してきたからの“初仕事”が、侍女のために王宮から開くなんて……と、反対側の騎士は意気消沈顔である。花形であって花形ではない。僻地の門番の気分だった。

ルークは、凶太い神経のルリを良く見知っているので、気を取り直すと言論を言う。

「まあ、急ぐならここからの方が近い。それに王が渡られるなら、安全チャックもした方が良くからな」

「それは、あなた方のお仕事でしょう？」

「お前もだろ」

「あら、私は今日付で解任されたわ」

「……王妃様が帰城なされるので、兄付きとして召し抱えた彼女を急遽後宮へ送り込むですって。で、私はその付き添い？って言うか、同じなんだろう。でも、行く行くは王妃様の侍女になる予定だから、そのまま後宮勤めかしら／＼／＼／＼ってお前もか？」

ルークは先程のルリの台詞を声まねしながら、時折突っ込みつつ反芻する。そして、驚きに目を見開いた。「鳩が豆鉄砲を喰らったって言う顔ね」としてやったりのルリを睨め付けた。女だてらに第5騎士団副隊長を務める4歳違いの幼馴染みを女としてみているのは自分と親達とルリの兄ぐらいだろうと思っていたが、今は何処からどう見ても淑女である。何時もの濃紺の騎士服を脱ぎ去り、常にストロベリーブロンドの珍しい長髪を、きっちり編み込んで巻いている。其処に飾り一つないが、華やかだった。

「悪い？こう見えても伯爵令嬢なのよ私！」

「知ってるよ。侍女って柄でもねえのにな……気をつけるよ」

「有り難う」

にっこり微笑んで返す。その姿は、艶やかな後宮の住人、または主の様だった。

ルリの貴族としての顔なのだろう。喩え、身分高い公爵子息を前にしても、媚びへつらうことなどしない。

一方、身分差はあれど都の屋敷がお隣さんという間柄であり、兄貴分のルークとしては心配するなという方が無理であるし、其処に、他の感情があるかは本人にも理解し得ない。ただ、ルークを調査し報告書を認めるなら、ルリの幼馴染みルーク・ロイ・ギウルレークは公爵家の次男で、まだ独身。仕事命で近衛第4騎士団に配属されていると言ふ事だけである。

「……副隊長お辞めになるんですか勿体ない／＼／＼／＼」
静観していた傍らの兵士が、唐突にルリに話しかけてきた。

女性騎士は少ない。その中でも、さっぱりした性格で容姿も美しく伯爵令嬢なのに鼻に掛けないルリの信奉者は騎士団の中かなり居た。

その内の隠れファンの一人だったのだろう。放心した状態で謔言の様に「辞めた……」と繰り返している。

その間に、ルークがミルティエユを見下ろす。怪訝そうに眉根を寄せる姿は、疑心たつぷりと言わんばかりだ。女性にしては背の高いルリの背に隠れていたミルティエユとルークとではオトナと子供位の差がある。

「そんな報酬貰って無理強いされたんじゃないだろうな？」

子供を哀れむように、ルークは盛大に溜息をつく。

ミルティエユは慌てて、両耳を覆い隠した。ルリがああ言った手前王の女に妃だとバレルのは困るのだろう。ミルティエユ自身も後宮に長居はしたくないので、その方が好都合だった。例えば、街へ買い物に行かされたすきに、見事トンスラとか考えるとワクワクしてくる。

「ルーク人聞きの悪いこと言わないでちょうだい。これは彼女の母親の唯一の形見なの！城に入るのには荷物検査やら何やら時間がか

かるから、身一つで着て貰うのに付けさせたのよ!!!」

「……こんな上等な宝飾具を持っているならそれなりの家って事か」
「ご名答」

ルリはルークがミルティユーに話しかけているのに気付くと慌ててミルティユーに抱きつき、「女性をじろじろ見るなんて失礼ね」と付け加えてルークを威嚇した。

巻き込まれた感はないが、話の論点はずれそうだ。

「噂通り本当に副隊長と仲がよいのですね」

更に話に加わろうと、青年騎士が口を挟んだので、ルリの思惑通りに進む。仲がよい発言は少し照れくさいが。

「ただのお隣さんよ」

「はあ？何ややらかすか分からないから、オルジユ同様見守ってやってるお隣のお兄さまに対してその言いぐさはないだろう？」

素っ気なく返したルリに、ルークは態とらしくジェスチャーを加えて落胆とその中に沸く怒りを表現した。

「お隣さん……幼馴染みですよ。羨ましい……」

「何処が羨ましいんだか。オレの疲れも知らずに」

ルークの愚痴等耳に入らずに、目をハートマークにして、職務そっちのけでルリを見つめる青年騎士。

「こんなところに長居は無用よ。行きましようかミル」

「……はい」

頬をひくつかせながら、ルリは歩みを再開した。ミルティユーは大股でツカツカと歩き出したルリに追いつこうと小走りで追いかける。追いついてホッと一呼吸した後、口から零れた言葉は先程の光景への贅辞だった。

「ルリ様は人気者なのですね」

先程の約束通り様付けで、間の抜けた台詞を吐き微笑むミルティユーは、後方を振り返った。その気配に気がついたルークは真顔で気にするなと告げると、騎士の目の前に手を翳したり「オーイ」と声を掛けたりしている。その光景が面白くてつい足を止めてしまう。

「ああ、こいつのことは気にしないでくれ」

「仕事にならないんじゃないわね。一発気付けでもかましてやりなさい」

聞こえてないのかと、ルークは通る声を張り上げる。

すると、ミルティューとは対照的に、過激な発言が飛び出した。

流石、副隊長を務めた人物である。

厳粛な筈の渡りの場所に声が響く。

「あっちではあんなどこから出すなよ」

「ルーク用のジョークだからしないわよ／＼／＼／＼」

ルークは振り返ることなく手を振りながら、ケラケラと笑った。

ルークの向かいでは真っ赤な顔した年下の兵士が直立不動で固まっていた。たまだった。

伯爵令嬢の悪戯（後書き）

全然、話が進まない。

しかも、予定外にルリとルークの話になりました。

内容的には「伯爵令嬢の企み」が正解ですが、何か悪役っぽい感じがしてしまうので、悪戯にしました。

ルリは賢い！……のか？

当初予定していた話は、サイトのブログに同じ時間にUPしております。

勿体ない精神です。

あっちなら、すぐに本題に入れそうな内容なのですが、遊びたいのでこっちを書き直しました。

どうでもいい話ですが、最後に数行空白を入れた所為ではないと思います。予定していた話だと此処までトータル12167文字だったのですが、こっちだと13940文字……。あつ後数文字増える……。長くなってないか？

話は変わりますが、

予約投稿してる訳なのですが、その分まで含まれて文字数とか分数でるんですね。

書き手になって初めて知りました。

ちょっと、詐欺っぽい気がして心苦しいです。

此処までお付き合い下さり有り難う御座いました。

実桜

登場人物メモ ネタバレ注意報発令！（前書き）

そろそろ、増えだしたのでメモします。

分からなくなったら、ご利用下さい。

2章書く際に、初期設定でうっかり書いてしまったので、ルリの年齢が変わっております。御免なさい！！！！

登場人物メモ ネットバレ注意報発令！

§登場人物メモ§

ミルティーク

スターニス王国の王妃。

正式名は、ミルティーク・エクリップス・ドウ・リュヌ・モーン
ント・フィン・スターニス。

あまりに長いので、ミユ事態憶えていなかった。

下町にいた頃は、ミルティーク・ルウーナと名乗る。

元の名前は、ミルティーク・ハイデルベール。通常”ミル”と呼ばれます。

ラニー専用の愛称はミユ。

随分昔に滅んだ古の王族の末裔。元は田舎に住んでいた。一応領主の娘。

10歳の誕生日にラヴァニーユが迎えに来て婚姻。

ココ侯爵家との利害が一致し、下町娘に。

堅実家。新雪のような肌。絹糸のような金髪（蜂蜜色）。

感情によって色の変わる瞳を持つ。但し、コントロールして
て通常は緑色。

“王の女”の証は、紅の薔薇。現在16歳。

ラヴァニーユ

正式名は、ラヴァニーユ・エクリップス・ドウ・ソレイユ・ゾ
ネン・フィン・スターニス。

愛称はラニー。スターニス王国の国王。

6年前、第7王子の身でありながら王位が転がり込んできた。
母は男爵家の娘。

先祖返りをしており、かなりの力を有する。

故に古の血を得たくて探していたミルティークと政略結婚。

ミルティークを泳がせる内に、すっかり存在を忘れた。

闇色の髪（黒髪）。蒼穹の瞳（青）。但し、力を使うときは瞳の色が変わる。

年齢差10歳。冷酷な魔王と呼ばれるが、堅王。

現在26歳。

ノワ・ド・ココ

ココ侯爵家のご令嬢。妃になりたくて強引にラヴァニークと結婚。

ミルティークと同時に成婚の儀式を行った。

小さな種すら枯らさないように維持するので精一杯で、身体をこわす。

最期の中で紅の椿を咲かせ、椿落下で死亡した。

花とあったのは数分にも満たない。

緩いウェーブのかかったブロンドの髪。鳶色の瞳。

享年22歳。コリィダ・デ・ドールス公爵の孫娘。

ルリ・イア・エスピガ

ミルティーク付きの侍女。逃げ出さないようお目付役。

オルジユの妹。伯爵家の令嬢。変わり者。

二卵性の男女の双子に生まれたが故に力を有し、

”魔弾のトリガー”と言う異名を持つ。

騎士団の嫌われ者第5騎士団隊長、カロート・ウォル・テウルを唯一御せる者で、

彼の部隊の副隊長を務めていた。

ストロベリーブロンド。鳶色の瞳。

現在18歳。

オルジユ・イア・エスピガ

ラヴァニーユの右腕。側近。父は公爵家の3男だったが入り婿。伯爵家の長男で、オルジユの兄だが、血は繋がっていない。

本来の弟と妹の居場所を知っているようだが、ルリを溺愛する。栗毛で鳶色の瞳。

現在26歳。

ノーチエ・デ・ドローロス

ノーチエ・ド・ココと名乗る。

コリーダ・デ・ドローロスがメイドに生ませた子。

認知はされているが、公には出せないため、ココ侯爵の娘として育つ。

6年前、何も知らなかったミルティーユに知識を与えた人物。

物語好きで、巷ではやる物語をメイドを通じてGETしている。

栗毛で茶褐色の瞳。

現在、18歳。

アリエーフ・デ・ドローロス

コリーダ・デ・ドローロスの孫娘。一説によると齡一桁らしい。

ラニー曰く10歳とか。

ポーネ・ダテイル

先王ダテイル3世。

野心家の浪費家。母の母国で戦時中、従兄弟に射られて戦死。

死した後、名をポーネ・ダテイルと書き換えられた。

つまり、王籍から抹消された。一応、先王として登場する。

側室に公爵令嬢が数人居たが、子を成す者は居なかった。

大陸一の美姫と謳われる従妹を正室に迎えようとして隣国を襲った。

漆黒の髪に濃褐色の瞳を持つ。

享年40歳。

カバジート・デ・マール

第三王子だったが、ラヴァニーユが誕生すると

「私はアネーモナと婚約したい」とオレッツハ・デ・マール公爵に宣言。

成人の議（17歳）を終えると、臣下に下った。ラヴァニーユと一番仲が良い。

王族の中では、ラヴァニーユに次いで力を有する。

童顔で、その歳でも半ズボンが似合うとされる。

王族特有の漆黒の髪に青い瞳を有する。

現在、38歳。

ルーク・ロイ・ギウルレーク

公爵の次男。長男は4つ上。

何代か前の王弟ロイ王子が臣下に下り、公爵家になったため口イが付く。

ルリのお隣さんで、両家がラヴァニーユ派だったため、幼い頃より共に育つ。

ルリが男女の双子で誕生したことも、実兄が誰なのかも知っている。

仕事命で浮いた噂一つ無い。近衛第4騎士団所属。ルリ達と剣の師匠は同じ。

栗毛で青い瞳を持つ。

現在24歳。

ヌエース・デ・ヒンコ

先代の巫女。成婚の儀の際、巫女として王家の石を祭壇まで運ぶ。

現在は後宮の女官長を務める。

第七王子だったラヴァニーユの母は、現ヒンコ男爵の妹。詰まり従姉にあたる。

カバジートが送り込んだ。寄りつかないラヴァニーユはこのことを知らない。

アグウリ・エーツとは巫女仲間だった。

ブロンドの髪。灰色の瞳。

現在32歳。

これを書きながら年齢を調節しました。

本来の歳じゃあまりに、ルリに無理が……。今でも無理があります。が。戻しました。

暫く出てこないのです、カロート・ウォル・テウルは省きます。

まあ、バレバレですが。

登場人物メモ ネタバレ注意報発令！（後書き）

今日生まれの人は誕生花が白薔薇です。羨ましいですね。
と言うわけで、登場人物紹介を作成しました。

文中で触れてますが、スターニス王国のギウルレーク家みたいなのは、王弟や王子が婿に行くことで取り立てられたので、その王子の名前が入る形になっています。男爵家から公爵家になりましたみたいな時とか。

名前って言うのが、ミドルネームみたいですね。

カバジート・デ・マールやノワ・ド・ココ見たいな貴族印が一字なのは当初からの上位貴族な訳です。故にカバジートが婿養子に入っても、奥さんの名前が、アネーモナ・カバジート・マールにはなりません。公爵・侯爵・伯爵までが高位貴族。下級貴族が、子爵・男爵と位置づけてます。大抵は子供から名乗り、愛称が貴族印代わりに組み込まれるケースが多い設定です。例えば、アネーモナ・バジ・マールみたいに。

ってな感じです。

読んで頂ける際、お役に立てれば幸いです。

次の更新でお逢いできれば嬉しいです。

ちなみに、前話の差し替え前の話は、サイトのblogの5/13の記事にあります。良かったら覗いて見て下さい。

実桜

下町娘から後宮侍女へ（前書き）

直前で一部書き直したため、2回に分けました。
会話少な……。だったので、過去部分を足しました。

下町娘から後宮侍女へ

下町娘から後宮侍女へ

王が渉られるときと同じ様に割開いた扉を閉める前、ルークが備え付けのベルを鳴らす。

ベルは大小様々に幾つか下がっていた。それらは用途によって違う。音が鳴るのは此処だけだが、糸電話のようにピンと伸びた線を振動となつて伝つていく。

耳には聞こえない音を察知して遙か向こうから明かりが漏れた。

「ミル行くわよ」

自分に言い聞かせるように、気合いの入った声だった。

ルリは一度ゴクリと唾を飲み込むと、カツカツと規則正しい音を刻みながら、その一点を指して注意深く進む。

規則正しいその音は、騎士だったと聞かされれば、それ故の独特のリズムだと思えるから不思議だ。

白亜の後宮に繋がる渡り廊下の柱一つにしても細工が細やかで、高らかな日差しに影を落とす屋根の下、続くミルティールは、物珍しそうに辺りを見回していた。

「ルリ様は、初めてではないのですか？」

「……………」

聞こえないのか、返答がない。足音だけが反響していた。

ミルティールが此処を通るのは、後宮入りした際と成婚の儀を執り行った際だけ。

後宮入りの時は、幼かったミルティールをラヴァニールが抱きかか

えて渡っており、ドキドキが勝って景色どころではなかったし、成婚の儀に至っては城内の敷地にある礼拝堂まで、人垣が出来て居た。「あの時のワンピース、部屋に置いたままね……」

景色の一部が記憶の引き金を引くかのように、想い出す。

6年前、春夏秋冬の庭を後にしたのち、同じ様に執務室に空間を渡って来た。

手を引かれ暫く歩くと、何処か店の女将と似たふくよかな女性が待っていて、ワンピースに着替えさせてくれた。

「まあ、可愛いお嬢さんね」

「／／／／／」

お世辞にはにかむことしかできなかった。

「淡い金髪にははつきりした色が似合うけど、こんなに可愛いものだもの。このドレスがいいわね……」って、陛下まだ居らしたんですか。殿方は禁制ですよ。お嬢様、あちらに行きましょつか」

女性はそう言って続きの間に、ミルティューを導いた。

幾度か開かれたが、中の様子は窺い知ることは出来ない。

ラヴァニーユは、衣装部屋に取り残されたまま、待ちぼうけをくっていた。

後宮を11歳で去り、その後、マール家に一時匿われ、男だらけの近衛に入隊させられた。

そんなラヴァニーユは、女性の扱いが上手くない。

性格に問題ありなのだが、20歳の頃のラヴァニーユは、いまいち疎かった。

暫くして出てきたミルティューは、愛らしいお姫様だった。

「歳は幾つだ」

「10歳になりました」

「陛下、何ですか！女性にはまず贅辞を贈って下さい。それに、年

齡を問うのはタブーですよ！！！」

仏頂面の大男を凄い剣幕で叱りつける女性の言葉に、苦笑しているラヴァニーユは子供に見えた。

今までの緊張が嘘のようにフツと抜けて、笑うミルティールをラヴァニーユは抱き上げる。

耳元で、照れくさそうに賛辞を述べた顔は紅かった。

「ピンクも似合うな……」

けっして、甘い言葉ではなかったが、褒め言葉だった。

がちりとした腕の中はふわふわとしていた。

羽の様に軽くて、肌触りは柔らかい淡いピンクのワンピース。逃げ出した時、ミルティールが着ていたその服は、今は下町の自分の部屋に仕舞われている。

あの服を見ていると嬉しくなってくる。それは、初めて目にしたときの気持ちを反映していたのか定かではないが、宝物だった。

あの服を着て、ミルティールは後宮に囚われたのに、不思議な物だ。

微かに憶える深紅の絨毯が引かれていない其処は、今は静寂に包まれている。

初めて見る光景のように、ミルティールはキョロキョロしていた。

サイドには池があり、川のように流れている。大きな蓮の葉がまばらに点在し、

縁はザラザラとしたガラス玉で彩られていた。

花は何処にもないが、春の匂いがする。

その匂いは扉を前にして濃くなり、其れが花などではなく人工的な香りだと悟った。

燦々と輝く太陽光ではなく、人工的な明かりが差しから零れる、固く閉ざされた扉の前でルリは立ち止まった。この通路の終点である。中には気配を感じる。

威圧感と緊張が相まって、ミルティューは唾をゴクリと飲み込んだ。久しく味わっていなかった緊張感は時として人を弱くする。

ミルティューは今更、自分を胸の位置から足先まで見る。続いて前方のルリを見た。

ルリは伯爵令嬢らしく、モスリンの透ける生地で出来たエンパイア・スタイルのドレスを身に纏い、最も身分が高いミルティューは、安物の生地で出来た質素なワンピース姿で頭には三角巾を被っている。それも、華やかな柄物ではなく、清潔感漂う白だ。もの凄く場違いな気がした。

しかし、時は待つてはくれない。

ルリは肺に一杯空気を吸い込むと、ハイトーンの凜とした声で解錠を求めた。

「此方から申し訳御座いません。私はルリ・イア・エスピガと申します。兄オルジュの命により、王妃様の侍女となるべく参りました。どうか扉をお開け下さい」

「貴族紋を」

中からそう問われて、ルリは首から提げていた指輪と先程の書状を、横に設置された小さな扉の中へ差し入れた。

この扉は本来なら王のお渡しをお知らせする際に使用されるためのものに違いない。

使者は同じ様に通路を通り先触れを渡す。女は時間がかかる物だ。

そして、欲深く、嫉妬深い。

後方で控えていたミルティューは、久方ぶりの後宮の外観を眺めながら、人ごとみたいに観察し、妄想を膨らませた。あれから幾たびもラヴァニーユはノワに逢いに渡り、仏頂面で愛を囁いたのだろうか？周りには、綺麗どころのお姉様方を侍らせ、寵を競って犇めくような女の園が広がっていたのでは無いだろうか。

ミルティューの空想の間に、物事は淡々と遂行されていく。

「確認致しました。王妃様の件は聞いております。侍女を二三人配置することも。良いでしょう扉を開きます」

「有り難う御座います」

差し入れた扉は窓口のように上へと上がり、女官の口元が見える。気配を察してか将又窓口の扉に仕掛けがあつたのか、態々数センチから3倍ほどに開き開く。

長い指がスツと伸び、返された指輪を再び首に提げる。

「此方のお嬢さんは？」

その問いは、そんな事を考えるのは不謹慎だと窘められたみたいに、ミルティューの背筋をゾクゾクとした電流となって、走り抜けた。そして、聞き流していた言葉を拾う。

ルリはミルティューの腰を引き寄せて、隣に並ぶとにこやかに微笑んだ。

「侍女の方？」

「はい、兄付きのメイドのミルです。急遽配置するのに王妃様に年が近い方が良かったと選びました」

「ミルと申します」

「身元は確かでしょうか？」

「ええ。ミルは代々我が家に仕える家の出ですから。それに母親はギウルレーク公爵家ゆかりの者で、近々正式に兄と婚約しますのよ」ルリはしれっと嘯く。ミルティューはあまりにするする嘘を吐くルリを真っ正面から観察してみたい衝動に駆られるが、現実は一ひくつ

く口元を如何に微笑ませるか。其ればかり頭の中を巡り、焦りの色が濃く出ている。……結婚。突飛なルリの考えについて行けない。「まあ、ギウルレーク公爵縁筋なら……庇護も……お有りでしょう」途切れがちの言葉に躊躇いと思案が入り交じる。低く吐き出された言葉は忘れ去った過去を呼び覚まし、夢から強制送還された。絵本のような世界はない。

一週間だったが女の園を垣間見ていたミルティューは一抹の不安に駆られた。

出自不明として後宮入りしたミルティューは、幼さも相まって、相手にされなかったのだ。

「今、開きます」

対応していた女官が短く告げると、禁断の園は解錠された。まるで、劇の幕が上がるかのようだ。

下町娘から後宮侍女へ（後書き）

読んで頂き、有り難う御座います。

度重なる部分修正や私の勉強不足により、言葉遣いや文章がおかしな点が多々あると思います。指摘して頂けると助かります。

もともと下手なので、今後進化するかは分かりませんが、お暇な時にでも読んで頂けたら嬉しいです。

次話で予定していた話の続きに気道修正予定。貼り付けしてちょっと修正。

ルリに流されてるので、全然しゃべらないミルティエユですがヒロインです。

基本、ラヴァニーユと再びな展開にならないと、影が薄いです。

内容的には、修正前の方が好きなのですが……。だから、無理矢理服の話は次話に挿入しました。タイトルは「陛下の　ですか？」です。ええ、タイトルでネタバレしてます。その代わり、間が開くので、城に来た当時のミュとラニーを挿入しました。余計、読み辛くなったと思いますが。

修正前の前話は「下町娘の後宮帰還」と言うタイトルで、王妃として後宮に乗り込みます。なので、ルークは出てこないんですよ。

「ミルは代々我が家に仕える家の出ですから。それに母親はギウルレーク公爵家ゆかりの者で、近々正式に兄と婚約しますのよ」が要らないから。

で、今話が「後宮の秘密」でルリが暴露しまくる展開でした。

こっちはネタバレするので、ブログには載せません。
語るなら、ルリじゃなくてラヴアニーユがいいなあとか思わなければ良かった。

ぐだぐだしてて申し訳ありません。お付き合い頂けたら幸いです。

実桜

陛下の趣味ですか？（前書き）

前回の話の後半部分です。

陛下の趣味ですか？

陛下の趣味ですか？

段々と開かれる内部に郷愁はない。

第一に見えたのは漆黒の布地に薄紫のレースが縁取るドレスだった。高いヒールを履いた人物は、ルリより数センチ高い。

身長150？程度の小柄なミルティエユがまともに視線を向けると、大ぶりの胸になってしまう。

慌てて、ミルティエユは傍らのルリに視線を移した。

ルリはミルティエユに無言のまま頷いてみせる。ルリは一連の出来事を何処まで知っているのか其れは分からないが、きっと、茶番はまだ続くと悟った。

「私は後宮の女官長を務める又エース・デ・ヒンコです。何か分からない事がありましたら、私かアグウリ・エーツにでも聞いて下さい」

「宜しくお願いします」

目の前の落ち着いた又エース女官長のアルトの声が出迎え、何処までも響き渡るような、鍛えられたハイトーンなルリの声と日頃の接客で身についたミルティエユの声にざわざわと蠢く女達は足を止めた。

ダンスパーティーが出来そうなくらい広い石造りの建物の玄関ホールは、3種の声を高らかに反響させる。

扉は大きく開かれ、目映いシャンデリアの明かりに一瞬目がくらむ。キンキラキンの内装は前王の好みなのだろう。良く言えば豪華絢爛、

悪く言えば悪趣味な目に痛い空間の中央の大階段の踊り場には、世界の母と呼ばれる聖霊の石膏像が嬌笑し、大理石の床は煌びやかなシャンデリアを反射するぐらいに磨き上げられている。とても、現王であるラヴァニーユとは結びつかない世界だった。

「紹介は後でします。仕事を続けなさい」

女官長は手を叩きながら、足を止めた女官達に鋭い視線を向ける。止まった時が再開したみたいに、硬直は慌てて解かれる。

中央の大扉から現れたミルティュー達は、注目の的だった。

階段の前で立ち止まった女官長が咳払いをすると、女官や侍女達は蜘蛛の子を散らした。

知的な美女と言った感じの女官長は、その印象通りフレームが小さい眼鏡を掛けている。ぱつと見30代半ば位のイメージだが、近づいて見ると肌が瑞々しく其れよりも若い感じで、年齢不詳だった。きつと、しつかり者の長女に違いない。

栗毛の髪を巻き、きつちりと固めて後れ毛など一本もない。後ろから与える印象は生真面目・神経質その物だった。

「では、さつそくお部屋へ参りましょう」

キリツとした瞳に巧咲を浮かべ、ルリは周りの女官に聞こえるように大きな声を張り上げると踵を返し、口元を緩めて「大丈夫」と囁く。ミルティューユを労るとルリ自らが盾になることによって階上へと導いた。

痛いぐらいの視線が横目で送られている。それを誤魔化すようにルリは態と情報をばらまいた。

「急で吃驚よねミル？」

「……ええ」

「王妃様ってどんな人なのかしら？もの凄く吃驚だわ。あの冷酷な魔王陛下にお妃様が居たなんて」

「……」

喩え、上位貴族でも、歴代の王の妃はおろか、現王の妃さえ知らないのが普通だった。

知っているのは妃を輩出した家と王。それと、側近。後宮に仕える者だけである。

記述的には先王、実際語る上では先々王にあたるラヴァニーユの父は、7人の妃が居て各自1名子を成していたが、発表される上で母の名は伏せられている。

「即位1年以内に妃を娶るのは即位の条件です。此処でのことは守秘義務です。口外なされば、もろとも死刑ですよ」

ルリの芝居の終止符を打ったのは、女官長だった。その言葉に2人とも青ざめる。

それは、問う目に視線を送り注目する女官達にも効果覿面だった。

中央階段を上り詰めると、後宮の中で一番重厚な扉が聳えており、階段の終わりに控えていた女性兵が女官長と目配せをする。

「ここが王妃様の部屋です。掃除はしておりますし、諸々の把握には小一時間程度で済むと思いますので、皆に紹介します。その頃に迎えに来ますから」

案内役の女官長がそう告げると、女性兵は扉を開き、後ろ髪を引かれるようにちらちらと伺う視線を遮るようにすぐに閉じられた。パリッと懐かしい音が耳をかすめた気がして振り返ると、其処は重厚な扉だけだった。隔離空間にホツとして息が漏れる。

ルリとミルティークの2人だけになった。

「懐かしいでしょう?」

「……」

そう言われても、ただか1週間では何の感慨も浮かばない。

懐かしいと言えば、窓際に置いたままだった故郷の薔薇の花片を樹脂で固めて貰った文鎮のような水晶が煌めいているのと、あの日結

わいていたリボンを、与えられた熊のぬいぐるみに結んだのが、そのまま其処にあることだけだろうか。

本当に散り一つ無い。

手持ちぶさたである。

何かに触れると、封じていた過去が蘇りそう怖い。

ミルティエーユは窓でも開けようと歩き始める。新鮮な空気でも吸えば落ち着くだろう。

「えっ……」

すると、ツカツカと大股で先を越したルリが、一瞬の警戒の後、窓を僅かに開いた。

ヒューと音がして、春の強い風を吹き込む。

ミルティエーユは音を消そうとしてもう少しと手を伸ばす。ピリリとした刺激が其れを拒んだ。この感触には憶えがある。幼い頃居たフランプエサでは当たり前のこの感覚は結界だった。

「閉めましょうか？」

そう問われ頷くと、埃をまき散らすような風は遮断され、名残を惜しむようにストロベリーブロンドの前髪を揺らした。

ルリは何事も無かったとばかりに、くるつとターンをして振り返ると、ミルティエーユを安心させるような穏やかな微笑みを讃えていた。妃の部屋だから当然だろうと、ミルティエーユは平然としている。慣れているのだ。

鳥籠生活は物心ついた頃から6年前まで知らずに味わってきた。

「今度は逃げられないのかしら……」

「その為に、私が派遣されたのですけど……ね。それにしても、これは陛下かしら？」

まるで、風によってもたらされた、砂埃のように微かに呟いた言葉を、聞き逃すことはなかった。

後宮は鉄壁のガードに包まれている。ルリはあの陛下が其処まで固執する理由が分からなかった。

少しの間、沈黙が訪れる。

「騎士様でしかも副隊長さんを務められていたなんて尊敬です」

「有り難う」

話すこともないので、先程の扉の前で言い忘れた言葉を口にする、呆気にとられた顔で礼を述べられた。

「ミルティール様は魔術になれて御出なのですね」

「私の結婚前の名前はミルティール・ハイデルベールという名だったそうですよ」

「……」

ルリは、まるで他人のことのように言うミルティールに、怪訝そうに眉根を寄せた。

自ら結婚前と言っているが、自覚があるわけではない。ただ情報として捉えているような物だった。

古の王族がハイデルベールだと知っているのは僅かで、ルリの反応から見て知らないのだろう事が推測される。

ルリは訝しんでミルティールに問いかけた。

「ミルティール様がご成婚の儀を成された時は10歳でしたよね」

「私は、其れまでミルティール様やお姫様と呼ばれ、その他を知り得ない愚かな子供でした。ラーニーに教えられるまで知らなかったんです」

気まづくなり互いに視線は宙を彷徨う。ミルティールがこの手のことになれていることも知らない位、逢ったばかりの2人は互いを知らなかつた。

「とりあえず着替えとか見てみましようか？」

ルリが手を打ち鳴らすと、衣装部屋へ繋がるドアを開け放つ。

「6年の間に入れ替えて居りますが、採寸している訳では無いのですよね？」

「……あれ以来お逢いしたことありませんでしたから」
ミルティューは、自分の身体を足の先から胸元まで順に目で追う。
あの頃は、女性らしい膨らみに乏しく、よく言えばスレンダーで胸
の膨らみも僅かだった。

今では、そこそこの胸があり、日々の労働で鍛えられた肉付きの良
い腕もある。

外を出歩く際、日傘を差しだしてくれるお付きの者も居らず、あの
頃よりは健康的な色をしていた。

「女性らしい体つきになってますから大丈夫かしら？」

「標準体型基準でしたらちよつと……」

あの頃のまま誂えたなら、全て袖を通すことは無理だろう。

これを理由にしてはどうかなどと馬鹿な発想をしていると、一足先
に中を覗いたルリが入ろうとせずつるつる肩を揺らしていた。

ルリの向こう側から仄かに花の香りが漂う。ハッと我に返りミルテ
ューはルリの背後に迫った。

その中は見慣れぬ衣装が山のように掛けられていたが、どれもあの
日着て居たデザインと似ていた。

ペチコートにクランとランを貼ったドーム型の粋クリノリンがどー
んと置かれている。

王宮も下町もスタイル重視のワンピースが主流で誰もこんな物は用
いないが、故郷のあそこに置いて柵を嵌める為には必要だった物。

「……あの方は人形だとも？この御衣装では邪魔になりますから、
此方にしましょう」

初めて見る衣装を前にして、ルリはボタンと扉を閉じたくなった。
悪態をついてから苦笑いを浮かべ、ざつと目を通すと一角に置かれ
た衣装を引っ張り出す。はつきり嫌悪と言う文字が書かれた顔。何
か勘違いしたようだ。

ミルティューは、懐かしいと言おうか悩んで控えた。

それは、ルリが手にしていた布の色の一部分が、台風が過ぎ去った

後の澄み切った色に似ていたからだ。

ルリは眉間の皺を根性で散らすと、姉が妹の服を見立てるみたいな気分で、一着差し出す。

空色のワンピースは袖口が長く、腰元の白いリボンと同じく床まで垂れていた。

「折角ですから」

その理由で着せられたドレスを纏うミルティューは、一国の王妃其の者だった。

丈も何もかも採寸したようにぴったりだった。

身長はあの頃とさほど変わらない。それがコンプレックスで『まだ、幼いのにこんなに育って……冷酷王はロリコンなのか？』等と店で男性に言われる原因でもあった。

「悔しいぐらい似合って御出です」

「有り難う御座いますノノノノノ」

何時かと同じくミルティューははにかんで答えた。

ルリは目を細めて見つめている。靴を何足か用意して椅子に座らせると試し履きをしながら、ルリは面白いことに気付いたとばかりにニヤついた。

「此処に揃っているのは二通り何ですね」

「？」

ルリの言葉に首を傾げると、得意そうに一指し指を振って説明し出す。

「まずはミルティュー様が今着ていらっしやるような、ペチコートで膨らませたタイプのドレスと陛下の趣味……基、時代遅れのクリノリンスタイル向けのドレスですよ」

「陛下の趣味って言うか……」

「それにしても巷では冷酷な王と呼ばれる方が、仏頂面でこんな趣味がお有りになるなんて本当、ロリコンかも……!」

「どちらも多分……」

「ご安心下さい。私が付いていますから。少なくとも成人を迎えら

れるまでの1年、陛下の魔の手からお守り致しますわ！！！」
ミルティューユが訂正しようと話し出しても、ルリが興奮して被せてしまいチャンスがない。
ルリは不敬罪に問われそうな言葉を吐き続けた。其処に悪気はない。すでにミルティューユとラヴァニーユは結婚しているのだ。
伽を命じられれば断ることは不可能だというのに、ルリは姉として騎士としてミルティューユをロリコンから守る事を誓ったのだった。

陛下の趣味ですか？（後書き）

ルリに勘違いされたラニー……。本当は此処まで前回の更新で入れたかったのですが、長すぎるので、分けました。

次回から数話、「ミュ語り」私”にするか悩んでいます。

一度紙媒体にして、仕事の休憩時間にもこっそりと……。検討します。

引き摺られて、ミュ（ミル）視点だったんですけどね。完璧にミュで言っただけ見ようかなと冒険中。苦手な方もいらっしゃると思います。これが過去を語らずに行く、最善の処置かと思えます。

予定は「開花宣言」まで。でも、その前の「宣言」から変えるかもです。一応「開花宣言」までが再会編です。

其処まで頑張れば、ルリとルークの馬鹿な話を書けるし、気分が復活するかなと。

なので、次回が番外編予定だった「女官長プロデューサー」の場合は、「私」は回避されたと言っただけになります。

逆に「第四の」だった場合は、ミュ語りです。

では。またお逢いできたら幸いです。

女官長プロデュース（前書き）

この話は「陛下の趣味ですか？」と「第四の名前」の間の話です。blogで触れましたが、ノワ・ド・ココの「落下の椿姫」を一人称にする為、ミユの一人称版を、元の文体にする事にしました。時系列に入れ替えます。ご迷惑をお掛けします。

女官長プロデューズ

女官長プロデューズ

着せ替えで疲弊していたミルティューは、甘い飲み物を欲する口を大きく開けて、椅子に頂垂れていた。

ルリはタフで物足りなさそうな顔をしている。

「冷たい飲み物が欲しいです」

「あら、そろそろ時間ね。まだ、私の屋敷から荷物も届かないし、この中から着替えは無理だから前の服を少し弄って……」

ミルティューが弱音を吐くと、ルリは時計を確認し小一時間で知り尽くしたであろうクローゼット内を忙しなく動き回る。

その間に、大きく息を吐き出し重くなった身体を奮い立たせ、横に掛けられた元の簡素な服に袖を通すと、丁度良いタイミングでノック音が響いた。

「懐かしいでしょう？」

その言葉にミルティューとルリは固まる。了解を取ることなく1人滑り込んだ女官長は、迷うことなくミルティュー達が居る衣装部屋へとやってきたのだ。

「ばれているのか……カマを掛けられたのか。」

「……」

「そう、警戒しなくても大丈夫です。私はミルティュー様に1度お逢いしているから憶えているだけです。もう、あの頃の事を知る

人物は此処には私とアグウリ位しか居りません」

そう言われても、ミルティューユの記憶の中には思い当たらなかった。

「そう言えば兄様が…陛下は何年か前、人を入れ替えたって……ヒンコ……もしや、先代の巫女様ですか？」

「ええ。成婚の儀の際、巫女として王家の石を祭壇まで運ぶ大役を頂いた者に御座います」

「ヒンコ男爵家は陛下の母君のご実家で在らせますから、巫女の中から選ばれるのは当然ですわ」

「公爵令嬢や伯爵令嬢を差し置いて選ばれ、先代巫女と陛下の従姉言う理由だけで、今は後宮の番人ですから、顰蹙を買いますけどね」

「仕方在りませんね。成婚の儀の巫女を務められるのは、陛下の血筋に最も近い巫女とお兄さまに聞きました」

第七王子だったラヴァニーユの母は、現ヒンコ男爵の妹に当たる。

大仰に驚いたルリは、元巫女に興味津々だった。スターニス王家もスターニス王国も知り尽くした2人の話を聞きながら、田舎街の領主の娘だったミルティューユは何も知らないのだと痛感した。

知っているのは、この6年間下町娘として聞きかじった情報とココ侯爵家にお世話になった数日間だけ。

ミルティューユそっちのけで、ルリ達は話し込んでいた。

子供だった所為か思い出せないミルティューユは一人蚊帳の外で、手持ちぶさたに室内を見回す。

女官長に「懐かしいでしょう？」と言われても、たかだか1週間では何の感慨も浮かばない。

懐かしいと言えば、結局訂正できなかったあの枷の様なクリノリンだろうか？

6年前まで当たり前だった物。今では何かをするのには邪魔だと言うことを知ったけれど……。

「ルリさん。ノワ様のことはお話に？」

「いいえ。ちょっと、遊んでしまってます……」

「ああ。御衣装ですか……それならば、此方を」

急に声が潜めたかと思えば、後ろ手に手にしていた包みをルリに手渡した。

「あら、宜しいのですか？」

「ええ。姪用に用意したので大した物ではありませんが、今のよりは良いでしょう」

視線を彷徨わせて捕らえたミルティューに投げかけ、全身を目で追われた。

ルリは丁寧にもリボンを解き、包みから取り出した。

プラム色のワンピースは少し大人っぽかった。

「まあ、素敵」

「蜂蜜色の髪に似合いますよ。髪の毛は左右を流して……」

ルリはワンピースをミルティューに宛がうと、髪型をどうしようかと楽しんでいた。

「時間がありません。髪は私が編みますから、ルリさんはお手伝いを」

ルリは楽しみをとられてがっくりと方を落としたが、次の瞬間には手早くハンガーに掛け、着直したばかりの服を脱ぐように促した。

あつという間に、女官長プロデュースで侍女が一人誕生した。

厚塗りではないが、化粧も施されている。最後に唇にティッシュを宛が色移りを防ぐ処置をルリがした。

鏡を見て、凄腕に感心していると、「早くなさって下さい」と促される。

扉を出たら、王妃様の侍女。

その手前で、女官長はキリッとした顔で振り返る。

「それと、ミルと言う名では、稚拙すぎます。此処で侍女として振舞うならミエル・ホーニングとでも名乗って下さい。後宮では家名まで名乗るのが当たり前です」

呆れ顔で見ると、ミルティューユの着替えを手伝っていたルリの視線が止まる。

女官長には全てお見通しだったようだ。ルリ発案の俄仕立ては……。

ワンピースに袖を通していたミルティューユは、この決定事項を聞き逃していた。

程なくして、下町娘は完璧な侍女へ姿を変えた。

「長居していれば、怪しまれます。すぐに出ますよ。新入りの侍女として紹介致します」

後宮勤めらしく、ピンとした背筋でミルティューユの部屋を出る。

そして、俄仕立ての茶番を再開した。

女官長プロデューサー（後書き）

入れ替えました。

元々書いていた話に加筆して挿入話とする予定だった話です。ワンピースはミユが着ても問題無いとも思ってた下さい。姪よりは丈が長くなると思いますが……。

今回は、差し替え前「第四の名前」だった話の三分の二です。加筆になってしまったので、前後編に分けました。あとがきに、期間限定で小話「バジがラニーを慈しむ訳 1」を載せますので、良かったらお付き合い下さい。

実桜

ガールズトークは何歳まで有効でしょうか？（前書き）

この話は「陛下の趣味ですか？」続きとして「第四の名前」というタイトルで1度公開した話の加筆修正版です。

blogで触れましたが、ノワ・ド・ココの「落下の椿姫」を一人称にする為、ミユの一人称版を、元の文体にする事にしました。

ガールズトークは何歳まで有効でしょうか？

ガールズトークは何歳まで有効でしょうか？

後宮の西側は酷く簡素だった。

それは、使用人部屋へ繋がるのも西側で在るからかも知れない。

「紹介しますから、後は上手くやって下さい」

女官長はある扉の前で立ち止まると、一呼吸後、青ざめた顔で告げる。

ミルティューは初めてのことに心臓バクバクで、ルリは面倒そうに欠伸をかみ殺していた。

こそっと、「どうかされました？」とルリが耳打ちする。

「こういうノリ苦手で……」と女官長はボソツと返した。

少女特有の甲高い声や話に花を咲かせ、寄せては返す波のようにドツと笑い声が上がったりしていた。誰かの噂話や下卑た話題が大きな声で漏れている。

長く巫女をしていた女官長は世俗に疎く、騒がしいのも苦手なようだ。

本当に後宮なのかしら？とルリが溜息を零した。

女官長は意を決したように、ノブに手を掛けると、そろりと扉を開け放つ。

ギーツと音をさせることもなく扉は開き、中から甘ったるい菓子の匂いが鼻をくすぐった。

ざわざわとしていた室内は、縫い止めたように静止する。

パンパンと女官長が手を叩くと、蜘蛛の子を散らしたかのように皆

席に着いた。

「王妃様が来られることはお話ししたと思いますが、一足早く侍女の方々が来られました。

ルリ・イア・エスピガさんとミエル・ホーニングさんです」

入り口にルリとミルティールを並ばせ、女官長は厳しい顔つきで紹介した。

ミルティールは驚きを呑み込みながら、傍らのルリに合わせてお辞儀する。

沈黙が怖くて、恐る恐る顔を上げ眼前の女官とおぼしき女性の顔を視界に捉えると、強張った表情を浮かべていた。

不安に駆られているミルティールを余所に、「色々と教えてくださいいな」とフレンドリーに話しかけるルリが居た。

ミルティールは弱々しい声で「宜しく……お願い致します……」と再度挨拶をする。

静かだった室内はさざ波のようにざわめいた。

「ルリさんとミエルさんだったかしら？此方へいらっしやい」

ラヴァニールと同じ黒髪に蒼ではなく濃褐色の瞳をした中堅の女官らしき人物が手招きをする。女官長は大丈夫だと言わんばかりに頷いた。

「有り難う御座います。行くわよミエル！」

ルリは愛想笑いを浮かべてミルティールの肩を抱くとポンと叩いて押し出した。

手招きをした女官のグループへ行き、「お願いします」と挨拶すると、壁側の真ん中2席を開けてくれた。

さっそく、物珍しそうに見られ話題の中心人物へと祭り上げられた。

「ミエルさんはギウルレーク公爵縁筋であるオルジュ様の婚約者なんですって？」

何処で聞きつけたのか、羨ましそうな視線を向けられ、詰め寄られ

正直こんな設定にしたルリを睨む。

ラヴァニーユの妃だと知られるよりは遥かに良いが、あのちらつとしかすれ違っていないルリの兄を婚約者だとされたミルティールは、何か尋ねられても答えようがない。

オルジュが婚約者だと仕立てられたのは1時間程前。“兄のオルジュ”が、ルリとは違った栗毛の、一瞬の邂逅を果たした人物だと知ったのは、つい先程だった。

「信じられないわ。オルジュ様」

「冷酷王に虐げられても尽くすオルジュ様！素敵な方ですのに！！」
「近づく機会もありませんでしたわ」

悲鳴にも似た嘆きが溜息混じりに幾重にも上がった。ズズズズズズ……地を這うような音までブーイングのように響き渡る。不作法にも紅茶を音を立てて飲んでしまっくらい不満なのだろう。

ルリの兄であるのだから素敵な方だとは思うが、女官達から漏れる言葉を拾い集めれば、まるで、ラヴァニーユが引き立て役……悪役に思えて、ミルティールの顔は強張った。

如何に寛容な人物であろうともしも聞いたならば不快だろう……なんて、考えていると質問はミルティールに集中していた。

「オルジュ様とは何時何処で出会われたのですか？」

「ミエルさんはお幾つかしら？」

「何時お式を挙げるのですか？」

「オルジュ様の好みは、可愛らしい方ですね。私には無理だわ」
この話の流れで、こんな台詞を吐ける女官も凄いなと思いき付かないように視線を向けると、グラマラスなノワの様な豪華な女官だった。

「17歳です」

ミルティールは矢継ぎ早の質問の中から、差し障りのないものを選択し答える。

実年齢は16だが、1歳サバを読んでみた様だ。女官長はあらあらといった様子で、溜息混じりに角で見守っている。

ミルティューは急かされて良く鏡を見ていなかったが、化粧を施された顔は化粧映えして、巷の成人の歳である20歳よりは上に見えていた。

「虫が付かない内につて事かしら／＼／＼／＼珠玉の花なのね」
先程の栗毛の女官は、ニタニタと笑った。

ミルティューはオルジュ様御免なさい！心の中で謝る。

「ルーク様とも親しいのでしょうか？オルジュ様は陛下の側近だし本当羨ましいわ」

先程の女官と共にブリュネットの髪をした同じ年頃の女官が更に加わった。

控えの間には、女官や侍女の殆どが集っていた。

ルリは苦笑いを浮かべながら、傍らで蜜柑を剥いている。

ヘタを取り、時計草の模様のような線を数えている姿は、この状態を楽しんでいるようにしか思えなかった。

「ミエルさん達は王妃様の侍女なのですよね？」

聞き慣れない名前と呼ばれ、視線を彷徨わせっていると、グイツと肩を掴まれる。

物心ついた時には、領主の娘ミルティューだった。ミルティュー・ハイデルベールそれが正式な名前だと知った瞬間、ミルティュー・エクリップス・ドウ・リュヌ・モント・フィン・スターニスなんて長つたらしい名前になり、一週間後にはミルティュー・ルウーナと名乗ることを余儀なくされた。其処に不満はない。そして、女官長が紹介する際、ミエル・ホーニングとなった。

名前に関しては、常に驚きの連発だった。
「ええ。突然のことで驚いています。私のような物では務まらないかと……」

そう言つて、視線を床へ落とした。その様子を金髪碧眼、年の頃20過ぎの女官がじーっと見つめている。値踏みするような厭らしい視線に、背筋がぞつとした。

「何時までいらっしやるの？」

「王妃様が落ち着かれるまでです。その後も私はお仕えする気ですけどね」

ルリは蜜柑を一房頬張った後、やっと口を開いた。「流石後宮ね。この時期にも美味しい蜜柑が頂けるなんて」と陽気な発言を連発している。

ミルティューの頭上を通り越して、悲鳴とも嘆きとも喜びともとれる声は何人かから上がった。

「ルリ様は騎士団お辞めになりますの？」

「ええ。もう辞表を書きました。今日中に処理されると思いますわ。兄もお前はがさつだから行儀見習いして来いって送り出してくれましたし」

「そのようなこと……十分魅力的な方ですわ」

「伯爵令嬢ですのに……」

先程の声の主が、口々にルリをフォローする。大抵後宮の女官は下級貴族か成金の商家の娘である。逆に侍女は上級貴族の娘が務めることもあり、あわよくば狙いなのは見え見えだった。

ルリの周りに集まった女性達は、皆ミッドナイトブルーでパブスリーブはふっくら膨らんだロングワンピースの上に、レースで縁取られたホワイトのエプロンをし、ブラックオーバーニーソックスにローヒールの革靴。パニエを履いているのだろう。スカートは大きく膨れあがっている。機能性よりは見た目重視な如何にも後宮らしい服装だった。

方や侍女は私服なのか、カラフルなドレスを身に纏い、エプロンなど不要な出で立ちだった。

ルリはさながら花畑に迷い込んだ蜜蜂のようで、花粉や蜜を我先にと強請る花々に囲まれていた。騎士様はみんなの憧れ。模範となる者。

一座の花形のように囲んでいた中で一人、手を打ち鳴らす者が居た。「ああ、だから、婚約者のミエルさんも一緒になのですわ」

「……」

「兄は今のところ陛下の側近ですから」

「王妃様と妻同士親交があった方が何かと良いですものね／＼／＼／＼同じ年の差婚。良き話し相手になられるのでは？」

「都合が良いかは別にして、ミエルは純粋な貴族ではありませんから、学ぶ機会をと今回白羽の矢が立ったのです。元騎士の私なりの仕事もあるかと私も首を縦に振りましたし」

妙に勘ぐる女官をさらっと見事に交わす。

ミルティューが何も口に出さなくても良いように、ルリは天性の力リスマで世界を作り上げていた。

一通り、情報を提供し終わると静かになった。

敢えてミルティューに話の矛先が向かないようにと、するっと簡単に嘘をつく唇は、黙している。

嘘をつくならミルティューに有利にと願いながら、ミルティューは聞き耳を立てていた。

ルリの蜂蜜ティーを飲んだ唇は麗しいぐらいにテカって見える。落ちることのない紅にグロスが合わさって、真昼にもかかわらず明かりで輝く室内を統べる魔性の女のようにだ。

欲しい質問を手ぐすね引いて待っている策士が正解なのだが。

「王妃様って離宮で静養されて御出でしたのよね？」

「静養って言うより、ご婚礼の時一桁だったから、年頃になられるのをお待ちになったのでは？」

一桁……強ち間違えでもない……。実際は、二桁になった日に攫われるようにして連れてこられたのだけだ。

「王妃様が居られたなんて。本当、謎ですよね後宮って……」

聞こえるか聞こえないような声で零す女官も居た。
一介の妃にしか過ぎないミルティューを先程から皆王妃と呼び、その不在について対外的な理由を模索しているようだった。ここでは、

唯一の妃を王妃と呼ぶのだろうか？

それとも長く主を務めてきたノワの意向なのだろうか。それにしてはルリも自然に呼んでいた。

「成人の歳に近くなられてお呼びになったとか？」

「王兄殿下の母君のお一人は14でお産みになりましたものね」

「／／／／／／」

黄色い声上がる中、ミルティューは他人事のように聞いていた。それすら、第5王子が口が滑って広がった話に過ぎないのだ。

王族に関してはかなりの所秘されている。

実際その王妃様は、ココ侯爵に唆され、下町娘やってますなんて誰も言えなかつただろう。

何時から知っていたのか。黙って見過ごしたのかも謎だ。

「ルリ様、本当のところは如何ですか？」

やっと、リストアップしてあった話題に触れたのか、ルリ様はほくそ笑んだ。

「理由は陛下しかお分かりになりませんわ」

「残念。オルジユ様は側近ですもの。ルリ様はご存じだと思いましたが」

「まだ、兄も私も独身ですから、夫婦のことなど理解しえませんが」ルリ様は孔雀の羽で作られた扇を取り出すと、優雅に口元を覆い女官に返答しながら、ちらちらとミルティューの顔色を伺い楽しんでいる。

落胆ぶりを顕わにする女官に気付かれないように、苦笑した。

「流石に陛下はロリコンではなかつたて事かしら？」

「では、10歳も離れているって言うことは政略結婚？」

公爵以下の身分の者達は知り得ないのだから、当然答えなど出ない。近親婚をする事で子を成す。希少な公爵の娘はダティルに皆嫁ぎ済み等と要った情報も後宮に務めているからと言って得られる物ではなかつた。

唯一知っているだろう女官長は壁に凭れながら、鋭い眼光を放って

いる。

話は堂々巡りして「何故かしら？」で皆小首を傾げた。

ラヴァニーユが呼び戻した理由などミルティーユ自身が知りたい。
6年も放置してたのだ。

まかり間違つて恋をし、危うく重婚しかかつて……なんて、ミルテ
イーユのような制約もないから、其れは除外される。ノワの死と大
きく関係することは理解した。

丁度「王の女だ！」と店で騒がれ、やばい状態だったので、無抵
抗で付いてきてしまったが、早く解決して普通の幸せを噛みしめた
い心は変わらない。

後宮は何回もの人員の入れ替えて、若い女ばかりだった。

女官長は様子を暫く見守つた後、輪に加わらなかつた数人の年配の
女官に一言二言話しかけると、静かに退席した。

お腹の底から息を吐き出し、もう一度気合いを入れ直そうとした時
だった。

うつかり、気が緩んでいる時こそ危うい。蚊帳の外だった筈が渦中
の人になる。

そもそも、新人を困んで親睦会中なのだから、上手く逃れたとばか
り思っていたミルティーユが悪い。

此処は後宮。ラヴァニーユ以外にも何代か前には行っているだろう
し、ココ侯爵領の下町よりは王の女の証に精通している場所だと言
うことを失念していた。

ミルティーユは、無意識に時折耳に触れてしまっている事に気付か
なかつた。

ガールズトークは何歳まで有効でしょうか？（後書き）

あとがきで連載していた小話撤去しました。再掲載は10月予定
です。

一人称版を修正した物を再会編完の後に載せる予定で、「ガールズ
トークは何歳まで有効でしょうか？」というタイトルを付けたので、
あらまな感じですか。面倒なのでそのままにしましたけど。タイトル
は女官長目線で考えたので……。

今回は薔薇のピアスからです。良かったらお付き合い下さい。

実桜

嘘が育てた花（前書き）

「第四の名前」の後半部分です。「ガールズトーク」の続きです」
第15部までラヴアニーユ陛下は正式に出てきません。ご期待に添えない展開で御免なさい。

嘘が育てた花

嘘が育てた花

「ミエルさんの耳飾り素敵ね」

話に加わっていないかった向かい側の女官が唐突に発した言葉にミルティューは、吃驚して両手で覆い隠した。本日2度目の出来事だった。

絶対外せない枷。真つ赤な蕾は開花前で粗末な衣装には似合わなかったあの薔薇。

食堂へ向かう前に、女官長が用意した上質なワンピースに袖を通している所為か、違和感はない。

あの空色のワンピースよりはシックで、落ち着いたデザインだが、三角巾を外し結わいていた髪を解き、一部結い上げた状態では目立たない筈だった。

冷や汗を掻きながら、記憶の糸を辿る。

「母の形見です」

「だから、先程の服装とは不似合いですかね」

「ああ。ミエルったらね、お兄さまに王城へ呼び出される口実が、お部屋の掃除だったの／＼／＼／＼馬鹿正直にこんな格好していざ屋敷の掃除をと思ったら、攫われて王城でしたのよ。可哀想に」

ルリはすると嘘を紡ぐ。強ち間違いでもない。何処までルリは把握しているのだろうか。ミルティューは、驚きに見開く目を伏せて隠し、笑いが零れそうになる口に無理矢理紅茶を流し込んだ。

つんつんと突つつかれ、ルリが顔を横に向けると、隣の女官がこそこそと耳打ちしてきた。

「オルジユ様って……そういう趣味がお有りなんですの？」

「そういう趣味って？」

「だ・か・ら……メイドさんが好きとか、コスプレが好きとかですわ？」

「クツクツクツノノノノノあら、失礼ノノノノノ」

ルリは愉快そうに笑った。ミルティエユを守る為に付いた嘘が、面白いくらいに意図しない方向に向かって花を咲かせていく。

女官は顔を真っ赤に染めて、イヤ〜！と年甲斐もなく乙女モードだ。ルリはオルジユがそういう趣味があったと想像すると、楽しくてしようがない。

ルリに可愛いドレスを着せようと散々画策したオルジユのことだ。あり得ないことでもないから、リアルに感じられて笑いが止まらなかった。

ひとしきり笑い終えた頃、話題はぶり返したようで、ルリは正反対の顔つきになった。

「紅い薔薇の薔かしら？あの方より本当見事ね。まあ、本物ならだけど……」

「ツイトローネ！」

叱る声はやけに響いて、雑談は止んだ。皆の表情が一瞬にして強張る。

窘めた女官は集まった集団の向こうへ視線を向けると、人差し指を動かして集まるように促した。

皆でこそ話をするために顔を寄せ合う。

「あそこにいるのは、ノワ様の言いなりだった女官達とお付きだった侍女達なの」

「……」

食堂には、後宮で働く女官達が集っている。

ミルティエユが妃として、何日か使用した豪華な造りとはかけ離れた質素な一室は、街の食堂よりは数段に華やかで、温かい紅茶やバターの匂いがきつく薫る御菓子山積みになっていた。

集団はいつの間にか数人を残して、端と端に別れていた。

入ってきたときは、小グループで仲良く話している感じだったのだが。

入り口付近に居る我々と、窓側で時折此方を伺う身なりの良い一団。

「ここでその話はタブーだわ」

「でも、知らない则可哀想よ」

ブリュネットの髪の女官と先程、ツイトロローネと呼ばれたワイン色の髪をした女官は小さな声で囁きあう。

ミルティューはガレットを1つ手に取り嚙って、一口紅茶を飲み干した。

ラヴァニークが拒んだノワの死。

喉に刺さった小骨のように、気になる事項ではあった。

誰で在れ人が亡くなるのは良い気持ちがない。ミルティューは想い出すと不思議とイライラしてきて、気持ちを落ち着かせようとティーカップにレモンのスライスを大量に投入して、ポットの紅茶を注ぐと、蜂蜜をスプーンで3杯加えて飲み干す。

今度はスコーンにクロテッドクリームと苺ジャムをたっぷり塗って食べる。

クリームティなんて贅沢は久しぶりだったし、お昼抜きだったのでがつつり食べてしまった。

「幸せそうね／＼／＼／＼今日の御菓子は後宮の料理人の手によるものだから、残したら勿体ないのよ」

口元に手を当ててクスクスと笑う女官は、何処か親近感があり、ミルティューは手を休めずに微笑で返した。

「紅茶も良い物ですよね」

「／＼／＼／＼私はメリザナ・オベルジー又って言うの。宜しくね」
「……ミエルです。ミルと呼んで下さい」

良く笑う人だ。でも、不快感を与えない。ミルティューは慣れない名前を口にした。

メリザナは、「王妃様用に食材を一新するって言うてたから」と言

い残すと、フルーツをとり中央のテーブルへ行ってしまった。
カットフルーツが、宝石みたいに目映くガラス皿の箱の中で輝いて
いた。

ミルティエーユは、近くにあつた給仕用のティーポットに手を伸ばすと、スライスしたレモンをそのまま紅茶を注ぎ、行儀悪くも少しティー Spoon で突っついて実を潰す。

その紅茶すら飲み干し、3杯目には実がぐちゃぐちゃでほろ苦い紅茶を飲み干した。
凄く幸せだった。

お腹いっぱいだし、少したぶつと水腹気味だが、甘い御菓子は大好きで満腹に満たされることは心にゆとりを与える。

一連の行動を眺めていた三〇半ば位の女官が首を傾げる。

「その飲み方……」

「御免なさい、つい！」

女官が口を開いて止めた。

下品だったよねと反省してとっさに謝った。ホツと一息つて時に！
うっかり、癖が！！見られてるとは……。ミルティエーユは恥ずかしさと焦りで冷や汗を流した。

何時からだつたか、気がついたらこの飲み方をしていた。

食堂での給金で買った苺柄のマグカップに贅沢にもレモン一個分のスライスを淹れて、紅茶を注ぐ。砂糖だったり蜂蜜だったり……甘く味付けして月にの1回の楽しみを味わっていた。偶に、お客さんがクレマーだったり嫌なことがあると、奮発して回数を増やしていたが。

女官は苦く微笑むと、視線をそらす。

こんな下町娘にはルリ様の兄は相応しくないと考えただろうか？
こんな事なら、サバを読むのを年下にすれば良かったと、反省したところで無駄なことである。今の容姿で、年下とした方が不審に思われることをミルティエーユは気付いていなかった。

その間に何か閃いたのか、ルリの隣の女官がモスグリーンのドレスの袖をつまんだ。

先程染めた頬は、薄桃色になっている。

「私達、今日はこの後非番ですの。勿論王妃様が後宮入りなさったり、陛下がお渡りになる場合は別ですけど。何処かでルリ様の武勇伝をお聞かせ願えませんか？」

「私たちは大部屋ですけど、シフト的に4人とも揃ってって事はありませんから、いらっしやいませんか？」

「ええ、勿論。私の武勇伝など詰まらない話ですが……そうね、王妃様がいらっしやる前に少しお部屋の方を弄りたいと思っておりますの。何方かお手伝い願えますか？」

「……喜んで」「」「」

「……羨ましい」「」「」

反応は悲喜こもももと、言ったところだろうか。

ルリはニヤツと微笑んで、「3人くらいお願いできますか？」と再度尋ねると、ガタツと席を立った。

嘘が育てた花（後書き）

本編は、1回公開した「第四の名前」の後半部分です。加筆は災難なオルジユ部分でしょうか？
ルリらしいーコマかな。

目下の目標は、再会編完結です。

拙い話ですが、お付き合い頂けると嬉しいです。

次話に今後の更新予定を載せます。

実桜

女官選定（前書き）

過去はくを二話に分けました。面白くも無い話ですが、後宮部分は今後の付箋だらけの話でもあります。

女官選定

女官選定

「そろそろ時間ですね。紹介も済んだことですし、各自持ち場へ。シフト通りです」

紹介の後少しして、席を外していた女官長が食堂を覗き込み、スカートの中から懐中時計を取り出すと、時間を確認して解散を告げた。いつの間にか時間が経っていたようで、照明など無く太陽光で明るかった部屋は、少し陰って仄暗い印象を与えていた。

そんな中で、一連の動作を見守れば、静々と歩く姿や機械的な表情はある種無機質で、存在の感覚が無いようなものにも拘わらず、まるでお化けみたいに一時その存在感は絶大になる。巫女は聖霊に使える尊き身で謎のベールに包まれているから、その存在が不思議と言われれば何となく納得いつてしまう。

注視している間に、取り残されるように周りは慌ただしく席を立ち、食堂から離れて行った。

「ミル早く！」

「……あつ、すみません」

戸口で急かすルリに慌てて早足で追いつく。
ミッドナイトブルーの女官服の裾が半分ほどはみだしたまま動きを見せない。

「メリザナとペスカ羨まし過ぎる〜！それに、アグウリ様なんてノワ様からでしょ。あゝあ」

「貴女は今日夜勤でしょうが……」

「だって残念なんだもの！思う存分思いの丈を言いたい気持ち分かってでしょう？別に禁じられていないのに、タブーなんて！！ただでさえ、制約が厳しいのに！！！」

「それが後宮なのよ。早く行きなさい。機会が在れば聴いてあげるから」

扉の外で盛大に地団駄を踏んだのは、ツイトローネだ。

自分が振った話題がきっかけなのに選ばれなかったのが不服とばかりに嘆くのを又窘められた。おおびらには言えないノワの話がしたくてうずうずしているようだった。まるでその様は姉と妹の様である。

“機会が在れば”何て言って永久に来ないことを知っている、ツイトローネは頬をこれでもかって言うほど膨らませて、捌け口を自分とさほど歳が変わらないミルティューユに定めたかのように、ギンと睨み付けた。

ミルティューユはどうしたらいいか分からず、ルリに助けを求める。

「……………うん」

「ツイトローネ！」

ルリが左人差し指を頬に当てて、あらどうしましょう？と小首を傾げていると、事態は急速に変わる。

遠くで誰かが呼ぶ声がする。すると、コロツと態度を変えて走り出していった。

それを追いかけるように、西の廊下に明かりが灯される。ランプのオレンジ色の光は落ち着いた印象を与えた。

「まったく、落ち着きがないわねあの子は」

「まだ若いから仕方がないわ……………」

「侯爵令嬢だし、あれでも我が儘な面は行儀見習いの結果で改善されてきたって思うしかないわね」

「……………」

メリザナとペスカはクスクスと笑いあう。悪意がないお嬢様の成長を見守るといった風である。貴族のお嬢様には色々なタイプ居るら

しい。

取り残されるように、扉の前には5人だけだった。

何人も拳手した中で、メリザナと先程ツイトローネを叱った女官ベスカ、そしてすっかり紛れていた三〇代半ばの女官アグウリが選ばれた。

アグウリは女官長が6年前を知る人物として名を挙げていた筈だが……。

どうやら、ノワサイドの人間らしい。

ルリとアグウリはこそそと話し込んでいた。其処にミルティークの名も王妃についてもない。残り二人の簡単な略歴を述べているようで、この人選は、アグウリによるものだった。

「非番なんてある種幸運だわ」

「私は本来は休日だったし、ペスカは朝番だったのよね。で、ツイトローネは夜勤」

「ついてないわねあの子も。今日から夜勤復活でしょう?」

「基本主が居なければ、朝番と遅番の2交代勤務で、主が居れば4交代制で休日は月に1度。あの日々にあつという間に逆戻りよ」

「だから心配だわ」

「もう、大丈夫よ。指導係だったからって気にしすぎ」

「メリザナは端的にしかあの子見てないから言えるのよ」

「でも、あの子は我が儘だけど爵位を鼻に掛けたりはしない子だから……」

ペスカとメリザナはツイトローネの消えた先を見ながら話し込んでいたので、ルリ達には気付いていなかった。どうやら、ペスカはツイトローネの指導係だったらしい。

ミルティークが聞き耳を立て半ば盗み聞きしていると、ポンとルリの手が肩を叩き、驚きのあまり吸った息が吐き出せなくなり、身体

は跳ねるように素早く反応したのに、未だに呼吸できず。金魚みたいにパクパクとも出来ないまま大きな口を開けて固まっていた。

「あらあら、この子ったら緊張してるのね／＼／＼／＼」と陽気に笑う。

ミルティューは、呼吸を整えることに神経を集中させていると、涙目になったルリが、「行くわよ」と告げた。どうやら、先程の大仰な反応はルリのツボだったらしく、時々思い出し笑いをして居るようで、肩が不自然に揺れていた。

それは、階段を上っている最中でさえ分かる程だった。

先頭はアグウリで、続いてルリ、ミルティュー。少し遅れた後方に並んでペスカとメリザナだった。この時漸く、アグウリの制服のスカートだけ違うことに気付いた。パニエで膨らませていない踝までのロングのスカートだった。

真っ白い階段を登り詰めると、重厚な扉が眼前に聳えている。

その扉を先程と違う女性騎士が両脇を固めていた。この間に、騎士も交代したようだ。

「部屋の模様替えをしたいから、こちらの方達にお願いしたの」

「ルリ、許可がないと他の女官の入室は許可できないわ」

「まだ、王妃様は来ないし、其れまでに終わらせたいわ。何せ6年前のままなのよ。掃除や定期的な衣装の入れ替えは成されているようだけど、時代遅れだわ。大丈夫よ、なんて言っただって後宮勤めの女官なのよ身分は確かじゃない」

騎士は視線を泳がせて縋るようにアグウリを視界の端に入れると、大丈夫だとばかりに頷くのが見えた。それでも、職務に忠実な騎士は突っぱねたが、ルリのごり押しのみ、顔見知りの騎士は渋々頭を縦に振る。鳥籠の準備は十分なようだ。

その間、一分ぐらいだろうか。小鳥が囀るような会話はあつという間に終わった。

一言二言の押し問答の結果だった。

本来のルリは、逢ったときの印象通り碎けた人のようで、何だか安心した。

一呼吸終えた頃、部屋の細やかな細工が行き届いた扉が開かれた。

「アグウリ殿の人選ですか？」

「又エの意向よ。不服？」

騎士と女官、侍女が交差する。

その一瞬でアグウリと先程の騎士が言葉のを交わした。此方も親しい様だが、探り合っている風でもある。

ミルティーユの部屋は、入ると真っ青な絨毯が広がる居間。左手に侍女の控え室と衣装部屋。右手には書斎へ繋がるドアがある。

控えの部屋と衣装部屋の奥に更に部屋があり、其処が侍女の寝室で、6年前この大きな空間でミルティーユは見知らぬ侍女2人と過ごしていた事を想い出した。

後宮一良い部屋を初めての覗くペスカとメリザナは、広さには驚く程度だった。

アグウリはこの部屋に入ったことがあるのか、侍女部屋から台を持つてくると中心に置く。

その間にペスカが小さな箱を持ち出し、メリザナが台の上に乗し、頭上の大きなシャンデリアに蝋燭を備え付けた。

メリザナとアグウリは場所を交代し、「魔除けの加護を」と呟きながら火を灯す。

その様子を見守っていたルリは「流石後宮女官ね。では此方も早速お願いできるかしら？」と書斎へ繋がるドアを開けた。

白い家具で統一された床は、薄桃色の絨毯が広がり、ふと見た本棚の中にはおとぎ話の本が一杯納められている。縫いぐるみや置物が

この部屋に彩りを与え、主の不在を埋めているようだった。

「可愛らしいお部屋ですね」

「これをどうにかするには時間がかかるわ」

緑色の瞳を輝かせてペスカが言えば、まるで散らかした子供の部屋を片付けるかのように、腰に手を当てて、溜息を零すメリザナ。

「適当にガチャガチャやって」

ルリが言うと、女官達は現状維持の方針で、もの凄いスピードで埃を払ったり、入れ替えたりし始める。

確か6年前、此処は寂しい印象だった記憶なのだが、いつの間にか子供部屋になっていたようだ。ついて行けないまま、ミルティューは当たり障りのないデスクの片付けを始めた。

後ろで窓の外をうかがっていたルリは、ひとしきり女官の動きを見ると、右手側の部屋のドアノブに手を掛けた。

衣装の着せ替えで時間が過ぎてしまい、先程は近寄らなかった部屋だ。

はて、其処は何だっただろうか？と小首を傾げていると、隙間から豪華な寝台が覗居て見えた。ベッドの天涯は開けられており、ミルティューの代わりにフリル一杯のドレスを身に纏った白いウサギが置かれていた。

「私はベッドメイキングを済ませますね」

ルリはミルティューにだけ聞こえる声で告げると中へ入っていった。

女官選定（後書き）

本編の再会編は今月いっぱいまで終わります。其処までは全力疾走します。

その後は、短編で後宮編です。間に過去編が入るかどうかは不明。

王宮編は節電期間中に悩みます。ルークとルリの話とか多分短編形式かな？

何かがない限り実行される今後の更新予定は下記の通りです。もしも、お付き合い頂けるのでしたら参考にしてください。

再会編のみタイトルは一部伏せ字です。

6月16日「過去」

6月17日「小話：伯爵令嬢3分レッスン」

6月23日「宣言」 ラヴァニーユ再登場

6月26日「宣言」 再会編終了

7月04日「王妃の部屋の秘密」

8月03日「陛下の恋愛事情」

9月26日「恋は複雑方程式」 予定です。

夏季期間は、更新はゆっくりのんびり節電モードでしょうか？

小話の「バジがラニーを慈しむ訳」は完結したので撤去済みです。

Blogで触れた「落花の椿姫」は、何時か載せたいと思います。

R18にすると、別名に出来るらしいので、本サイトの誕生記念のコナン2次とかその間にやらかしたりしてます。

全然ご期待に添えなくて御免なさい。

実桜

過去は甘く切なく薫る (前書き)

前話と二話に分けたあげく、後半を少し削ったので短めです。

過去は甘く切なく薫る

過去は甘く切なく薫る

ルリが居なくなつた途端に、女官達は一齐にミルティューに質問を振る。

最初に口火を切つたのは、メリザナだった。

「オルジュ様とは子供の頃から？」

「何時からお付き合いを？」

「／／／／／オルジュ様は王宮で人気？１なのよ」

「オルジュ様のプロポーズって、凄く文学的なのかしら？それとも情熱的に／／／／／」

「ミエルさんの初恋ってオルジュ様？」

メリザナとペスカは、矢継ぎ早にまくし立てた。自ら発した言葉でキヤーキヤー言えるなんて、面白い性格をしている。職務中は生真面目なのか、別人に思える変貌ぶりだった。今の彼女らは住む世界が違つとさえ思わせる。

ロマンスに飢えているようで、物語を手にして頬を染めるノーチエに何処か似て、懐かしいノリだった。

ミルティューは、微笑を浮かべると「窓が」と言つて逃げた。落ち着いたイメージだったのに、メリザナはスイッチが入ると、乙女モード全開になるらしい。

ルリが貴族の仮面を貼り付けているのと同じなのだろう。

「まあ、照れてるのね」と言つて追いかけられ、ルリの消えたドアが開かないかとジツと睨み付けたが、どうやら無理そうだ。唯一職

務熱心なアグウリに助けを求めても、無駄だった。直接的ではないが、間接的話に加わっているらしい。

こういうときはどうしたらいいだろう？

逃げながら思いついたのは、ノーチェに見せられた物語のヒロイン。

「それは秘密です！」

物語の主人公になったつもりで、花のように微笑んで言うてみるが意味がない。

余計、詰め寄る透きを与えたようだった。

「隠すなら毎日お尋ねしますよ」

こんな煩い方達に付きまとわれるなんて冗談じゃない。

上手い物語も浮かばず、渋々6年前のことを思い出す……しかなかった。

経験しなければ実感がこもらない。だから、仕方ないと。

最近是想い出しても紙芝居の一枚の絵程度に忘れていたのに、今日は随分と回想が多い。お陰で細部まで細かに記憶が蘇り始めていた。

でも、あの1週間は嫌いじゃない。むしろ楽しかった。

下町で現実を知って、酷く飯事のように感じられて、さも苦々しい思い出のように封じてしまったが……。

真っ白い花が一面に咲く、屋敷の庭。名を春夏秋冬と書いてひととせ。其処に湖よりも輝く太陽を頂く真っ青な空の様な蒼が降り立った。キラキラとビー玉のように輝く蒼穹がミルティールを見下ろす。

「お前の名は？」

「ミュ。貴方は？」

「私の名はラニーだ。ミュお前を迎えに来た」

ラニーがそう言うと、真っ白い花は花びらを舞わせ、気がつけば蒼に染まっていた。

「私の人生はずっとお前との出逢いを待っていた。どうか、私の花嫁として共に生きて欲しい」

甘い言葉を囁かれ、物語の王子様が迎えに来たと思った子供の頃。うっかり手を取ってしまったことを、本当は後悔したことはない。

「あれが初恋なのかしら？ 錯覚だと思うんだけど？」

つい、声に出してしまった。

漆黒の闇に浮かぶ星みたいな王子様は、慈愛に満ちていた。

慣れない古語を必至に話してくれていたように思う。

ミルティューが子供だからか、ラヴァニーユは皆が呼ぶ冷酷王なんて言葉が、何処から沸くのか分からないほど優しくかった。あの身長は威圧的だが……。

思い出に浸っていると、予期せぬ反応が返って来て肩すかしを食らった。

「仮にも婚約してる人間が言う台詞？」

「何か、犬も食わない話がするわ／＼／＼／＼マリッジブルーじゃないかしら？」

「で、プロポーズの言葉は？ 吐かないと尋問に掛けるわよ」

女官はそう言って後方から羽交い締めにすると、擽りの刑を申し渡す。

いやー！！バラバラと動く細い指は巧みに刺激を与えた。

ミルティューは我慢できず、オルジュのことも忘れ、必然とラヴァニーユだけが頭の中を閉める中、渋々あの日の言葉を小声で呟いた。

「お前を迎えに来た。……私の人生はずっとお前との出逢いを待っていた。どうか、私の花嫁として共に生きて欲しい」

あの日のラヴァニーユの言葉を紡ぐ。久しぶりの古語。

鳥籠から羽ばたいて一週間。ミルティーユは驚異的に現代語を覚え
た。

それまで、古語しか知らなかった。

「共に生きて欲しい……ねえ。あの方がそんなこと言うなんて」

「オルジュ様真剣！って。えっ、古語分かるの……って、アグウリさんて巫女だったのよね」

「又エよりは古語に明るいわよ。って言っても、拾えた言葉はそれ位なんだけどね」

「なあくんだ」

ミルティーユは女官長が言っていたアグウリが、皆と違うスカートなのは元巫女故なのだろうかと勝手に納得した。

巫女は純潔で無ければならない。故に露出が極端に少ない。

何時もベールに顔を隠し、肌を覆う鉄壁の皆のような巫女服に覆われている。

「本当に私が分かったのは“共に生きて欲しい”だけよ」

ミルティーユの視線に気がついて後退するアグウリ。その彼女をガシツと掴んだのはいつの間にか隣室から戻ったルリだった。

「面白い話してるわね。私だって聞いたこと無いのに。お兄さまったら陛下と共に近年真剣に古語を学ばれてると思ったら、プロポーズの為だったのね。素敵。私も学ぼうかしら？」

「ルリ様は“魔弾のトリガー”なんて素敵な異名がお有りなのだから、古語にも明るいのでしょうか？」

「詠唱系ではないから巫女様と同じで片言ぐらいしか分からないのよ」

「ルリ様の異名って“凍花の女王”じゃないの？」

「それは身内でのよ」

柔らかい物腰だが、初対面時の騎士様っぷりや副隊長さんを務めていた程の人物なのだから、それなりの力を持ち、恐れを持ち合わせ、ていても不思議ではない。

そう考えていると、ルリは哀しそうに微笑んだ。

「異名は勲章の様なものだけど、好きではないわ」

どっちの異名に対して言ったのか分からなかったが、場はどんよりと沈み込んだ。

周りは理解したみたいなのに、ミルティューだけは何も分からずキョロキョロしている。

閉鎖空間にいたミルティューは、“紅蓮の悲鳴”の真実を知らない。下町でその後過ごした6年間、古語は廃れた言葉との認識しかなかったが、この会話からしてごく一部の巫女や異名を持つ者の詠唱者しか知らないものだとして初めて知った。

そして、意味が理解出来ないまま……。

城に来た当初世話をしてくれた女性も古語を話していた。

彼女も巫女だったのだろうか？

それは、必要だから与えたのか。それとも、ラヴァニーユの優しさだったのか。

何も分かつとしないまま逃げ出したのだ。

“愚かにも私は無知である。何も知り得ないで生きてきたのだと改めて実感した。”

過去は甘く切なく薫る (後書き)

ラニーが”冷酷な魔王”等と呼ばれる原因の中に、ルリも絡んでいます。

あの若さで副隊長な理由です。

この後、その話を少しかいつまむか、ノワの話にするか悩んでいます。どっちもシリアスです。時々息抜きを含めつつ。

タイトルは、ルリ視点「過去は苦く切なく漂うもの」

ラニー視点「過去は甘く切なく留まるもの」なんてどうかな？

ますますラニー出番無し。可哀想。なので、本編ですが。

話が全然進みません。

ミュが何故古語を話せるのかという疑問に気付く前に、ルリ登場で異名の話に……。今回は急速展開です。

読んで下さり有り難う御座います。

ひっそりと夜中の更新ですが、偶にでも覗いて頂けると嬉しいです。

稚拙な話にお付き合い下さり、有り難う御座いました。

桜

実

小話：伯爵令嬢3分レッスン（前書き）

次話からやっとラヴァニーユが再登場なので、その前に再会の少し前をラヴァニーユ抜きでお届けしようかなと。

小話：伯爵令嬢3分レツスン

伯爵令嬢3分レツスン

ルリとルークは所謂お隣さんだ。

隣と言つても数代前の王弟ロイを婿養子にしたギウルレーク公爵家は広大な敷地を有しており、方やそれ以前にヒツツエシュライアー王兄が下ったエスピガ伯爵家は貴族の家にしてはこぢんまりとしているが、庭は広大だった。そんな両家は庭どうしが繋がったお隣さんだったりするのだ。

そんな2人の会話は唐突な事が多く、出会したら挨拶から始まるなんて事はまずない。

端から見れば険悪とも捉えかねないが、本人達は必要がないほど親密な間柄なのである。

家族のような……親戚よりは親密な。

遠くの親戚より近くの他人の良い例だと口外している。

「金木犀どうにかならないか？」

「良いじゃない。トイレの匂いがして」

出会い頭に始まる会話が今日も用件から始まる。

凄く不機嫌なルークが食って掛かった場合がこんな感じである。

「嫌いなんだよ」

「私は好きよ。あの花を摘んでお酒に漬けるのよ。きっと綺麗に違いないわ！」

「だって言ったじゃないか！トイレの匂いだって今。そんな酒飲んで美味しいか？」

「あら吃驚だったらどうするのよ？」

強い匂いが苦手なルークは、お酒を造る目的で移植された金木犀が大嫌いだった。花をとるためじゃ咲いた途端に伐採も出来やしないと、内心毒づく。

昔から事をなす中心人物は、一番幼いルリだった。紅一点。必然とみんなが甘やかすから、世の中の立ち回りが上手くなってしまったと嘆く。

「せめてオレの部屋の前は止めてくれれば良かっただろう？」

「境に色々植えてしまったから開いていたのは其処しかなかったのよ」

苺畑や観賞用のトマト畑を動かせばどうにでもなるのに……。

結局、食って掛かってもこんな風に、さらっと交わされるのが落ちだが……。

幸せが逃げるくらい盛大な溜息を吐く。

すると、本当に飛び出ていったみたいで、自らの頭の上で小躍りを始めたようだ。

それ位、唐突で意味不明な台詞が次の瞬間、控えめな口紅で彩られた場所から聞こえてきた。

「嫌い」

「はあ？」

「だって、買い置きのカステロール食べたからルリの食べ物の恨みは恐ろしい。」

両家の子供は顔パスで、行き来が可能な程親しい間柄。

ちよくちよく顔を出しては、ルリのお取り寄せを拝借してしまうルークである。

どうやら、これが原因で今回の樹が植えられたのだと悟った。

態々、花が咲く前に大がかりに土壌ごと……。

そんな一件から数日。経った数日の出来事だった。

呼び出されて浮かぬ顔で目指していると、またルリに出会した。だが、今回は少し了見が違ったようだ。

背後にオルジュを立たせたルリは最近では見慣れないドレス姿でルークの眼前に立っている。王宮の王の執務室前でだ。

所謂シュミーズ・ドレスのルリは大きく開いた胸元をレースで覆い隠し、体型の変化をもたらさないデザインの裾には満開の薔薇の刺繍が咲き誇っていた。

オルジュはこの手のドレスを好み、娘らしい服装には無頓着な妹に着せていた。

淑女らしくスカートを摘むとたくましい顔のまま、

「ごきげんようルーク」と発した。酷くドスの利いた声がルークの鼓膜を強く刺激する。

「はい、原点 - 100」

何処で手に入れたのかオルジュが指揮棒片手に無表情のまま、採点結果だけを告げる。

ルリは口元をひくつか、大きな深呼吸の後、吹き出しそうなくらい似合わない乙女顔で、今度はルークを様付けした。

「ごきげんようルーク様」

「原点 - 70。そんな角度で威圧しない。ほら笑って僕の可愛いお姫様……」

「ブツ！」

ルークは、吹き出すのを我慢していたが、毎回聴く溺愛台詞に弱いらしい。

「おひ…お姫様／／／／…誰が？／／／／」

「其処笑わない！！ルーク - 1000」

「はあ？」

何ですかと言う言葉は声にはならなかった。

しゃっくりに見舞われるほど未だ笑いが止まらない中、はき出せた言葉はそれ位だったからだ。

ルリは傍目から見ても分かるほど限界だった。ぴくぴくと震えた全身が怒りの度合いを増す。

「お兄さま！」

「ルリは怒っていても可愛いけど、笑ってる方がもっと可愛いよ」「相変わらず食えない顔して、にこにこ微笑みながら、可愛いを連発する。」

昔からエスピガ家はルリを溺愛してきた。

が、度合いが増したのは、“紅蓮の悲鳴”時、先王に攫われたのが原因だろう。

もしかしたら、庇護欲だけで一生手元に置いておきたいから結婚するかも知れない。

そう思わせるほど、オルジュはルリに対して素直だ。

ルリは怒りを抑えるように両腕を抱くと、可愛いとは言えない声でオルジュを見据える。

おやおやと肩の力を抜いたオルジュは、陛下の隣に立つ公式の顔をしていた。

「で、ルークまで呼んでご用件は？」

「まあ、中に入るうか」

「オレもですか？」

「勿論だよ。我々は兄弟だからね」

暗号の言葉が呟かれる。ラヴァニーユ派同胞は皆兄弟。

オルジュが右手を挙げると、執務室の扉が開かれた。

盗聴されることない室内は、もぬけの殻で冷酷と噂される陛下の姿はない。

勝手知ったる顔してツカツカと入室したルリが尋ねる。

「お兄さま、陛下は？」

「今、別室でドロース公爵と会ってるよ」

「珍しいですね陛下があの方々にお会いになるのは」

ルークが発したのを最後に沈黙が暫く続く。ドローズ公爵としか言われていないのに、うっかりとココ侯爵も一緒だと口を滑らせたのがビンゴのようだ。

何時ものによやかなオルジュは居なくなっていた。

険しい顔で、熱の籠もった息を吐き出しながら、思い悩む感じ。そんな姿は珍しいことだった。

「まあね。西日が落花したからね……で、呼んだわけだ。暫く嚴重注意を怠らないようにね」

オツと失言した口をルークは覆った。

これからは、何もかもが失脚の原因に繋がる恐れがある。落花ではなく毒殺ではないかと疑われるかも知れないからだ。

「取り敢えず、陛下より先に手は打つよ。陛下はノワ殿はお嫌いだからね。あのお方の意向もあることだし……」

「そう言えば、ランネからの定期報告が今日届きますよ」

「じゃあ、私が受け取りがてらお相手しましょうか？」

「駄目!!!!」

血相を変えたルークとオルジュに、鳩が豆鉄砲を喰らったみたいな顔して仰け反るルリ。

何でよと何時もなら突っかかるところが、勢いに負けたらしい。

小首を傾げて「変なの……」とぼやいているに留まった。

「ランネにはあのお方の密偵が忍び込んでるから、ルリは関われないんだよ。陛下さえ存じ上げないことなのだから」

子供のご機嫌取りみたいにポケットからあめ玉を取り出して与えながら、腰を折って話す。

ヒールの履いたルリがやや低いぐらいなのだが。

「有り難う」と言って、口に入れるには大きな子供用のデカ飴を頬

張りながら、すっかり忘れかけたルリを見てホツとした。

オルジユは話を変える気だと察し、さつき近衛の友達から聞いた情報を活用することにした。

「陛下は雨期の前に戦火で痛手を被った場所の治水工事を終えたい考えでしょうから」

「そうなんだよ。それでここ何日も詰めて居たからね」

「では、雨期までは……中々お屋敷には……お帰りにならないの？」
大きな飴を齒に当ててガラガラと回しながらルリが尋ねる。

オルジユは苦笑いを浮かべて、哀しそうにルリを見下ろした。

「ちよつと無理かな……」

「折角、金木犀でお酒造りにお兄さまの手をお借りしようと思ったのに」

「庭の金木犀咲いたの？可哀想だけど今年は諦めて貰うしかないかな」

とほほと明らかに大げさに残念がるオルジユに、ルークはマジですかと叫びたい想いを呑み込んだ。

「オルジユ兄が駄目ならオレ？」

人差し指を胸に当てて漏らす声は何とも情けない上擦った声。

オルジユはルークの肩に手を当ててフルフルと首を振った。

まあ、まさに政局。そんな暇はないだろう……。

来年もあの樹が部屋の前で強烈な香を放つのか！！！！

頭を抱えて苦悩していると、何時もの口調に戻ったオルジユが「まあまあ」と今度は肩をペシペシと叩く。

「我々は兄弟だからね。適材適所頑張ろうじゃないか！」

全てがオルジユの掌という盤上で繰り広げられて居たかのように繋がる。

オルジユのこの発言も、採点結果も後日へ繋がる序章だった。

小話：伯爵令嬢3分レッスン（後書き）

誕生花更新です。6月はピンク。美しい少女とか気品って言う意味があるとか。

つまらない話にお付き合い頂き有り難う御座います。

書いてるときは本人が楽しんでいるので、自己満足公開です。

王宮編の”陛下の恋愛事情”の重要なテーマを含んだ小話でした。

この3人の組み合わせもありかな？と思ったり。

相変わらず下手な文章で突き進んでおります。読み辛くて御免なさい。

実桜

閉鎖宣言(前書き)

ベースはミユ一人称です。

閉鎖宣言

閉鎖宣言

いつの間にか、西の空は色を変えていた。比重の違う液体を静かに注ぎ入れたような空は、蒼い残像と終焉の嘆きの紅、静寂を呼ぶ闇色を纏い、後宮8日目の夜を迎えようとしていた。

7日目の今頃ミルティエーユはココ侯爵領に居た。その年、初めての台風の影響で一日中雨が降っていた。雨が降っていることも知らずに、光に溢れた中から空間転移したミルティエーユは、姫でも妃でもなく、ただの人。民になった。

ココ侯爵領のお屋敷は、火が消えたように寒々しかった。

感じた孤独と同じく空は暗闇に覆われ、霞がかかった真っ白い月が、まるで穴のようにぽっかりと浮かんでいた。

あれから早い様で6年の月日が過ぎていた。

永きの空白を得て、戻った後宮。下町とは違い煌びやかな世界。

あの頃、禁断の扉だった、左の扉の向こうの侍女部屋に居る。

薄い色彩の簡素なベッドにルリとメリザナとペスカ。鏡台の椅子にアグウリ。小さなデスクの椅子にミルティエーユ。

皆の手にはブラックの珈琲。ミルティエユは何も持たずにただ空を眺めていた。

こんな狭い部屋ではなくて、せめて隣の居間ならば良かったのに。ミルティエユがこの部屋の主として名乗っていたら可能だったが、今はこの部屋の妃付きの侍女にしか過ぎないから、無理な訳で。

「異名は勲章の様なものだけど、好きではないわ」
先程のルリの発言以来、話が弾まない。

ただの情報交換程度を細切れに行う。

ミルティエユは空気は読めても、バックグラウンドを窺い知ること
は出来ない。

皆は其れを知っていて口をつぐんでいる。

“ 誰かこの重い沈黙を壊して ”

繰り返し心の中で叫んでいた。

“ これじゃ、聞きたいノワ様の事も無理じゃない！！！！ ”

リンリンリンリン！！！！

けたたましいベルの音が鳴り響く。ミルティエユはドキッとして爆
付く心臓ごと前のめりに倒れそうになった。

女官達はハツとして席を立つと、木で出来たドアを開けて居間へと
飛び出て行く。

「王妃様のお越しかしら？」

「早くしないと！ルリ様、ミエルさん！！！！」

女官達は色めき立ちながらも、慌ててミルティエユ達を呼びつけた。

“王妃様”は此処にいる……。じゃあ、誰が……。

急かす女官達を尻目に、ミルティューは閃いたとばかりに手を打ち、間延びした声で返した。

「新しいお妃様じゃないですか」

一縷の期待を込めて言えば、ギンと睨まれる。失言〓無礼なのだろう。

「馬鹿な事言っていないで、早く階下へ降りるわよ」

アグウリに怒られ引き摺られるようにして階段を降り、整列させられた。

よくよく考えれば、不敬だったと場の雰囲気を感じた。

気を許せるほど親しくもないのに……。

身支度を調えながら、こんなに居たのかと言うぐらい人が沸く。

思えば、後宮入りした際と成婚の儀を終えた後、このホールは人で埋め尽くされていた。

全てが女性だった。コックも下女も。異様なまま変わらず繰り返される。

「多分ルークが鳴らしたものよ」

新入りらしく辺りを見回して暈けていると、耳元でルリが囁いた。

バタバタと忙しない音が響き、時間外の女官達も制服を纏い整列に加わる。

あそこからなら、長い渡り廊下を歩けば、まだ若干の余裕がある。

何処かの隙間にも埋もれたいと身を引く。けれど、ただ今の肩書き王妃付き侍女。

押し出されるように場所は決まっていた。

唾を音立てて呑み込む。その時間すら長く感じられた。

その間はスローモーションを見ているようだった。

固唾をのんで一同見守る中、静寂は破られた。

もの凄く豪華で重厚な扉が大きく左右に開かれ、闇の中から姿を現したのは数時間前に逢った人物だった。

「陛下のお成りです」

女官長の声が響き、皆綺麗な角度で頭を垂れる。ミルティューも同じく客を出迎える時のように反射的にお辞儀した。ミルティューはその中で浮いていた事に全く気付いては居ない。何故ならば、最敬礼は45度の角度と決まっているからである。

傅く相手が居なかったミルティューのお辞儀は、見よう見まねで頭一つ分浮いていた。

辺りは沈黙に支配され衣擦れとカツカツと独特のリズムで歩く足音だけ。

軍人が打ち鳴らす革靴の音に似たそれは、ホールに重い空気をもたらしした。

心と比例するような重厚な扉が閉まる音がした直後、ヴァリトーンの声が女官長より大きく響き渡る。

「今日付で後宮の解散を申し渡す。10日の猶予ののち、この館は移築される。以上」

冷酷な王様は、冷酷非道だと言わんばかりに困惑の音が小さく囁かれた。

しかし、頭を上げることは叶わない。

「これが、詳細である。日がないのでただ今の時間を持って任を解く。各自速やかに支度が調い次第辞去するように」

「面を上げよ」

取り付く島もない程速やかに、オルジユは役人が街に触れを出すように、白い巻物を開く。ラヴァニーユの低い声が切り裂くように響き渡り、辺りは騒然とし出した。

彼方此方で上がる悲嘆の声の中で、ミルティューは取り残された見

たいに呆然と立ち尽くす。

「後宮解散……移築……この国ってそんなにお金がないのね。後宮の維持って確かにお金かかるのよね。」

何処かで王妃の自覚があるのか、他人事みたいに呟きながら、色のない瞳でヴァリトーンの声の主を捜した。

皆はラヴァニーユの隣に控えるオルジュの持つ紙を食い入る様に見つめている。

キヤーキヤー言いながら非番の女官達は、荷物を纏めに部屋へ帰り、ノワの侍女だった者は血相を変えて自室へ飛び込む。きつと雇い主に説明を求めるのだろう。

そして、多数の女官達は失業に愕然としていた。

「オルジュ様。私達後宮を辞去したら、行く当てが御座いません。どうかお慈悲を。」

「オルジュ様のお屋敷に募集は御座いませんか？」

「……御免ね。家は少数精鋭だから。代々仕える家が決まっているんだ。」

「ミエルさんのメイドでも何でもやりますから……。」

中には一致団結して、陛下にはなく傍らのオルジュに詰め寄り、泣き落とし作戦に出る者達まで居た。

ミエルと言う名に、ラヴァニーユとオルジュが反応したかのように、此方を向く。

さつき、侍女達に紛れてトンスラすれば良かったと嘆いてももう遅い。

何かが違うことに小首を傾げながらも、一新に見据えられては逃げようもない。

「ミユ。どうしたその格好は？部屋の服は気に入らなかったのか？魔王が手を伸ばす。クシャツと頭を撫でられ、ミルティューは首が痛くなるくらい頑張って見上げた。ラヴァニーユは童顔のくせに、やたらと背が高い。」

故に、冷酷な表情をすれば威圧感も相まって、相当怖いかも知れな

い。
温かい手から伝わる優しさ。淡々と告げた先程とは違って、口角が緩んでいるように思えた。ミルティューはラヴァニークを嫌いではない。その証拠に、嫌悪で鳥肌が立つことはない。ただ、心臓が驚きで悲鳴を上げてはいるが。

「ミユどうした？」

「……」

妙に整った顔が更に距離を縮め、アップになった。

ミルティューは、一歩下がって間合いを取ると、緊張で震える拳を強く握りしめた。

そして、真っ直ぐラヴァニークを見上げると、にこやかに言い聞かせて先程の懸念を解決する策を提案した。

「いいえ、陛下。私には此方が良いと思います。どうか、後宮を閉じられるなら、あの山を売り払って国庫の足しにでもして下さい」
につこりと微笑み返す。この国は終戦から6年ほどしか経っていない。

税は上がっていないらしいから、かなり国庫は疲弊しているだろう。だから売り払うのではないだろうか？

移築＝売り払うと決めつけたミルティューは、後宮の維持費も馬鹿にならないのだろうと色々計算し始めた。

そこに、ラヴァニークの感情は与されていない。

しかし、下町娘になる前は夢見るお姫様。レモンが幾つ買えるだろうか？等と、まだまだレベルが低い。

「まあ、採寸し直しだからな。処分というなら払い下げるが、今時あのような服を着るのは等身大のビスクドールぐらいだろうか？」

用意した本人がそんなこと言うの？っていうか、後宮解散なのに仕立てる？

確かにフランブエサに居た頃のミルティューは、時代遅れのお姫様だった。しかも、クリノリンの枷を毎日付けていた。枷とも知らずに。

「まさか6年間、フランブエサの私用にお作りになっていたと？」

「何時戻るとも分からぬツバメだからなお前は」

「戻らない選択肢をお与えになつて下されば良かったのに……」

ミルティューはラヴァニーユに悪態をつく。

「まあ、私は嫌いではない。フリーズなんていう襟巻蜥蜴も真つ青な飾り襟よりは良いからな。知っているか、あれは金属でガチガチで固いために、まるで歯ぎしりでもしているかのように不快な音をさせる。その上、食事もままならない」

「見たことがないので分かりませんが、食事は自らで食したいですわ。人に食べさせて貰うのは、不経済ですし、まどろっこしいと思いますけど」

ミルティューにはフリーズなどと言う貴族向けの服装など理解し得ない。

必然と棘を含んだ言い回しになる。

スターニスは元々広大な土地を有している。

それに加え、先の王が戦争に明け暮れたお陰で、国の面積は更に増え、他民族の風習や習慣、髪色肌色の外観や、服装など多岐にわたる結果となった。

ココ侯爵領の下町の女性は、襟付きのシュミーズに色のはつきりした胴着を着るのが一般的で、先程のミルティューみたいに一枚布のワンピースは最近流行りだしたタイプだ。

一般市民が貴族に近い格好をするようになってきた。生活水準は上がっていると言える。

それでも、働く者は動きやすさを求める。

貴族という者は、服装に制裁を科すのがよっぽど好きなのだろうか。それとも、生産性のない姿を見せびらかすのが、優位に立つ事を示すのに必要なのだろうか。

「私も肖像画で見たただけだがな。なんせ、件の義母上は私が生まれ

る疾うに前に亡くなって居られる……」

「……」

ラヴァニーユはそう言って、迂闊だとばかりに苦虫を噛み潰した様な顔をした。

「着ている本人がいなくとも、機会はあったからな……ミュ、今度は君の意見を聞いて仕立てよう。何か希望はあるか？」

肖像画は音を立てない。話を変えようとラヴァニーユは話の矛先を変えた。それによって、例え、着ている姿は間近で見たことが無くても、衣装には接していることが伺えた。

ミルティーユはフルフルと首を振る。

「私に華美な衣装は必要ありません……」

陛下と対等に話すミルティーユに気づき、散り散りになったはずの人々が振り返った。

それによつて、先が紡げないでいると、静かな怒りを含ませた声がホールを割いた。

「それは無理だろう。ミルティーユ・エクリップス・ドウ・リュヌ・モント・フィン・スターニス」

ラヴァニーユはミルティーユが憶えられないミルティーユの名前を意とも簡単に読み上げた。

それが悔しい。

本当は、あの時の王子様に惹かれ、恋い焦がれても隣にいる資格がないと考えているからだ。

未だ、自らの名前も覚えられず、政治は疎か世の中にも疎い。

今のスターニス王国には、そんな妃は在ってはならない。

なのに、神の誓いは消せない。6年間の努力は依然として徒勞に終わっている。

ミルティューユ・エクリップス・ドウ・リュヌ・モーント・フィン・
スターニス

今の枷は名前なのだと知った。

閉鎖宣言（後書き）

本編ですが、無理矢理ラニーを出しました。

ミユの性格はこんな感じですよ。

堅実家……これに向けて努力した人とか書ける日が来るのか？

全ては前振りのような長い再会編が終わってからですね。

後一話で再会編終わりだ。やったー！！！！

設定萌えという3日坊主なので、私にしては頑張ったと。

こんな話でも良ければお付き合い下さると嬉しいです。

実桜

開花宣言(前書き)

再会編のエピローグなので短いです。

開花宣言

開花宣言

その名前を聞き、女官達は一齐に頭を垂れる。

ねじ巻き式のブリキのおもちゃみたいな動作でも、巻立てと時間切れがあるように、三者三様の動きを見せた。

気持ちを押し隠すように、能面の様な無表情で最敬礼する女官達。彼女らは何時声がかかるとも分からぬまま、嵐が過ぎ去るのを待つ状態である。

シーンと凍り付いたかのような静けさが、豪奢な内装の中では異質だった。

「ラニーと呼べと言った。今後一切陛下と呼ぶことは許さぬ」

先程の閉鎖宣言の時のような強い口調での命令。少し、苛立ちが含まれた声が迫る。

それでも、嫌いではない。ミルティューは後退もせず、困惑の色を浮かべたまま、呼ぶことも頷きもしなかった。

すると、ラヴァニーユは強引に肩を引き寄せる。

大人と子供ほどの身長差があるから、迫り来るラヴァニーユを避ける事が叶わなかった。

いいえ、ミルティューは避けなかった。

屈んだラヴァニークの顔を捕らえた瞬間、生暖かいものが唇に触れる。
性急で荒々しく貪るそれは、夢焦がれていた触れるだけのモノでもなくて、シチュエーションも違う。

周りのざわめきが微かに耳に入る。
遮られた視界。熱い息。何故か高まる鼓動……。

これがキスなんだと実感した瞬間、ミルティークの心は温かくなつた。
ふわふわ浮遊感付きで、夢物語みたいな現実。

それが、抱きしめられて持ち上げられていたからだと知ったのは、
2度目の時だった。

目を閉じていた訳ではないのに、見えていない現実。
妄想することも願うことも許されなれなれと思っていた憧れが、もしもの？を繰り出してくる。
その処理も出来ないままに、茫然自失状態だったその唇を再度奪われた。
今度は態と音を立てて吸われる。

夢から覚めさせたのは憶えのある声。

「薔薇が開花致しました。おめでとう御座います」

「久方ぶりに王家の石は花を付けられました。お喜び申し上げます。スターニス王家に繁栄をもたらす王の女の真の誕生です」

ルリに続き凜とした女官長の声がホールに響き渡り、在りし日の巫女のように膝を折り祈りを捧げた。

いつの間にか巻いていた女官長の髪は解かれ、数時間前が嘘のように癖一つ無い。

ストレートの編み込まない長い髪は、巫女にとって大事な純潔の証。ドレープの利いたたつぷりしたスカートの裾は長く引き、脇に入ったスリットが動きやすくしているのか、動きに無駄は見られない。

ゆっくりと視線を彷徨わせると、其処には騎士と巫女が居た。

あの日の巫女は本当に女官長だったんだと納得し、やはり、特有の礼を取るルリ様は騎士様だと思った。

それは音のない世界で断片を見るようで……。

何が起きたか理解出来ない。

すると、一斉に練習したかのように「おめでとう御座います陛下、王妃様」揃った声に戸惑い、ミルティューは無意識に耳たぶを触る。

何時もと違う感触が指先を刺激する。

固く閉じていた筈の王家の石の蕾が綺麗な渦巻きの先を少し広げた瞬間だった。

開花宣言（後書き）

再会編のテーマは勘違いLOVE。

今後の2人の関係は、陛下の肩に掛かっているかも知れません。

このお話は、

逃れられないのならば王妃を全うしようとするであろうミルティール
こと、

特殊環境でお育ちのため、ずれた恋愛観のラヴァニールユの話だから
です。

基本陛下の設定は出来上がっているのですが、ミユが掴めないまま。
なので、書き直したい!!!!

次話は「下町娘の後宮帰還」の続きを直したのになります。

これから直します。ピグ イフに嵌った所為で時間がありません。

本当は、文章を書き直したいのですが……。

再会編はノンプロットで書いているので、辻褄が合わなくなってきました。
夏の間修正をかけるか、短く書き直すかしたいです。

1回サイトに格納するって言う手もあるのか……。

確かに説明が多すぎて読みにくいし、登場人物が予定より増えちゃ
ったので憶えられない!!! 虎の子なしでは……。

そんな文章を公開して御免なさい。

次回から更新日時が変わります。

予定の他にもUPしたいとは考えております。

これまで、お付き合い頂き有り難う御座いました。

実桜

王妃の部屋の秘密（前書き）

一度没った話を書き直しました。このままじゃ話が進まないの
で。再会編と後宮編がダブっていたのですが、まあ、この話は後宮編工
ンドにあたります。

王妃の部屋の秘密

王妃の部屋の秘密

後宮終編

「ミュ、行くぞ。今宵からの住まいは王宮に設けた。何か必要な者があれば女官長にでも運ばせるが……」

「陛下お待ち下さい。ミルティール様をお連れになるのならお支度を致します」

「王宮に居を移されるなら、それなりに致しませんと、今後に差し支えるかと」

「ならば、晚餐に合わせてお迎えしたらどうでしょうか？」

「……分かった。今宵の晚餐は遅らせよう。その席へ間に合うように」

「御意」

「かしこまりました」

「ミュ、臨時に近衛2名を派遣しよう。迎えに来る迄の用心だ」
ラヴァニールはそう告げると、踵を返して去っていく。

訪れた際を逆戻りしたかのように、それは過ぎ去り、息をのんでいた女官達は、一斉に盛大な呼吸を再開した。

部屋に引っ込んだ女官への報告や何やらで、てんやわんやになる前に硬直したままの女官を置き去りに、ルリに引っ張られるようにして自室へと再帰還。

10分程前、後にした部屋はガランとして2人を出迎えた。

ミルティールが白昼夢基、初キスの余韻に浸っている隙に、ルリは

部屋の明かりを増やしていた。

「ミルティーユ様、此方へ」

促されて入り込んだのは、時代遅れの衣装部屋。

そこで、先程試着した衣装を引つ張り出す。

空色のワンピースは袖口が長く、腰元の白いリボンと同じく床まで垂れていたあれである。

ルリは手際よく用意を済ませると、ミルティーユを伴って部屋を出た。

当然だが、まだ近衛兵の姿はなく、後宮の女兵がミルティーユの部屋を守っていた。

「湯殿へ参ります」

ルリが告げると兵は頭を下げ、周りにいた女官達も深々と頭を下げる。

異様な空気の中、湯殿へと向かったミルティーユは、まだ迷いの縁にいた。

湯殿は豪奢で広がった。お店が何軒も入りそうな程の湯船は乳白色で、肌を撫でる度滑らかさを増す。

恥ずかしさを通り越すほど磨き上げられた肌は、紅く火照っていた。出たくないような迷いを絞り上げるように、喉の渇きに促されて上がる。

肌触りの良いタオルで何回も水気を拭き取り、ルリと同じく三つ編みに編み上げた髪を簡易に巻くと、花飾りを一周させて華やかさを増す。

香油をたっぷり塗った肌からは甘い匂いが漂い、うっすらと化粧を

施した顔立ちは美しく、先程の下町娘だとは思わない程に綺麗だった。侍女のメイクより艶やかさを増したそれは、更に自分ではないような錯覚を与えた。

「十分に見せつけてやって下さい!!!」

シヤラシヤラと耳飾りを鳴らし通り過ぎる廊下には、相変わらず忙しそうに侍女達が行き交い、ミルティエユを見ると足を止めて深々とお辞儀をする。

その中にはハツとした顔をする者達もあり、連れだつて歩くルリはしてやつたりとほくそ笑んだ。

また、先程の部屋にたどり着く。

変わらずに女性の騎士が守っており、微妙な笑みを浮かべて通り過ぎるほかない。

監視されているようで窮屈に感じられた。

重厚な扉を開いて貰い中へ入ると、肌を乾かすような冷やかな風とパリツと音がした。

扉はゆっくりと閉まる。

其れを確認して、ルリはミルティエユの耳元に囁いた。

「ミルティエユ様はこの6年間もその前もご存じないでしょう？この戦いを乗り切るためには、全てを知らなければなりません。少々の隣の寝室をお借りして昔話を聴いて下さいますか？」

ルリは一方的に告げると、「お妃様お疲れで御座いましょう。今、寝室のご用意致しますわ。女性は支度に時間がかかるモノですわ。夕餉の前に半刻ほど……」

と大声で宣言すると、芝居がかった動きで流れを作り上げた。戦いなどと大げさな……と思っっている間の出来事だった。

最後に自室のドアを開けて入らずに閉め、抜き足差し足で寝室へ引き返すと、そつと音も出さずに閉めた。

「もう、大丈夫です。ここは褥の音が漏れない作りに先王がなさつ

て御出ですから」

「まあ、可愛らしい／＼／＼／＼」

その言葉に、まだ生娘のミルティール頬を紅くして俯く他ない。花が綻ぶようなクスクス笑いをルリは漏らす。

大きなキングサイズのベッドがどーんと置かれた室内には可愛らしい鏡台と同じ作りの物書き用のデスクが置かれていた。

ミルティールを鏡台の椅子に、ルリはデスクの椅子に腰を下ろすと、寝物語のように紙芝居みたいに。演技がかった声で語られる。

「まず、初めに。多分陛下はノワ・ド・ココ様については多くは語られなかったでしょうからそこから参ります」

鬼気迫るような表情で言われると、ミルティールは椅子の背に凭れずには居られなかった。

「ミルティール様とのご結婚を陛下が口になさったのは6年前で御座いました。当時、公爵家には陛下に釣り合うような歳の娘はおるか、二桁になった歳の結婚可能な娘は居りませんでした。何故ならば、3人居た公爵家の娘は皆前王へと嫁いでいたからです」

前王は約15年前即位したスターニスの王、ラヴァニーユの長兄ダテイル。母の母国すら手に入れて、母方の従兄弟に弓を射られて無様な死に方をした人物である。

この情報は、下町にも届いているぐらい出兵した兵士の間では有名な話だった。

「これより暫しミルティール様を姫様とお呼びしても宜しいでしょうか？」

「……………」

何と呼んで良いのか迷ったのだろう。王妃様と呼ばれるよりは馴染んだ懐かしい呼び名の方が良い。返事をする、安堵の色を浮かべた。

「では…………。コホン…………陛下が即位するにあたり、問題は伴侶が居ないことでした。我が国では王に万が一が生じた場合、政治的空白や思想を違える者に政治を執られないために、伴侶たる正妃が代

行を行うのです。その為には思慮深い正妃を得なくてはなりません。故に代々の王の中には公爵家以外から正妃を迎え、この部屋を宛がうことも御座いました。ここは襦の音が漏れないのと同時に他での睦言の声も聞こえないので御座います」

ミルティールは試しに壁を叩いてみると特殊な吸収素材が入っているのか、微かにくぐもった音がする程度だった。

「先王は崩御なさって御出で御座いましたし、ポーネ・ダティール様は戦死。慣例を破り面倒だと正妃は娶らず、側妃たる公爵令嬢との間に子を儲ける事も出来ず。当時、実質的な皇太子であった陛下がすぐに即位なさったのです。ところが、公爵家に年頃の娘が居ないと知っていたココ侯爵は公爵の孫娘である愛娘にも権利があると主張したのです。公爵達は一桁の孫娘を差し出すことはなさらず、古の王族である姫様を正妃に認める代わりに、面子のためにノワ様もとごり押しなさったのです」

古の王族……。血筋的には申し分ないと言うことだろうか？

ルリは怒りを顕わにしながら、憤りを手元近くにあった小さな熊のおでこに向けた。

デコピンされた熊は、面白いくらいに背を反った。

「陛下は裏で色々画策しようとなさいましたが、短い間に其れも叶わず、あの成婚の儀に至った訳です」

王だから後宮に何人もの女を抱え込むようなタイプではなかったよ
うだ。

自分の中で描いている陛下像をミルティールは聴きながら塗り替える。

「陛下はノワ様を終いの部屋へ押し込みました。一度も陛下がお渡りになることはなく生涯を終えました」

声には出さなかったが意外なことだった。

男とはやりたいモノだと、常連客が酔ったとき絡んできてガハガハと大笑いしながらくどくどと語られたモノだ。

「……陛下は男の人ですよ。」

その時な卑猥な語りを想い出していると、するりと口から何時の考えが抜け落ちた。

とてもばかげた言葉だった。

「最初から食指が動かないだけです。まあ、あの背丈の割に無駄に童顔ですから、女装させたら、案外見られた顔になるかも知れませんが、それは置いておいて陛下は男色家では無いと思いますよ。」

「そうですか……」

「ええ！ただ単に趣味でもないから外れの部屋を宛がったのですよ。政治的には不味いのですけど……」

コの字型に作られた後宮の中央の2階に、あの日のままミルティールコの部屋はあった。

5部屋もある大層な部屋で、片やつい先頃まで唯一の住人だったノワの部屋は、1階の西の角部屋が与えられていた。通称終いの部屋と呼ばれているようだ。

「それでもへこたれないのがプライドの権化なのでしょうね……」
ルリの溜息に6年のことが想像できた。

何年も後宮の事実上の主だったノワは此処の使用人を全て我が物の様に扱い、喻え専用の侍女（小間使い）の部屋1つに、リビングと寝室だけであろうと唯一という言葉は彼女を守ったことだろう。一度も渡りがなく、名すら与えられないただ置かれただけの存在でも。

「姫様がご存じの通りその事を知った侯爵様は自らの息のかかった侍女を通じて姫様にとんでも無い話を持ちかけたのです。そこは当事者ですので割愛しましょう。」

「……」

6年前の下町娘の話のことですね。

ミルティールは納得を表すように頷く。ハハハ……乾いた笑いが機械仕掛けのように口から漏れた。

ルリは、苦笑いを浮かべると、更に声を低くして話し出す。

「話は戻って、陛下の兄上ボーネ・ダティルは咎人故、歴史から抹殺されたのです。この世で一番してはいけないことは聖霊を手にかけることなのですよ……」

ルリは哀しげな感情を隠しもせず、ミルティエの手をそつと握った。

言い聞かせるように何度も小刻みに力を込める。

尋ねて良いことなのか思索して糊を纏ったように張り付いた唇を開く。

しかし、すでに時は遅かった。

ルリは先程良くは見なかったのか、寝室を見回すと細部にまで細やかな細工が施された家具や小物に目を奪われていた。

宝石箱を手にとると、鍵穴の上部を指さした。

「此処に時期に素敵な薔薇の細工が加わりますわ。姫様の王の女の証のような真つ赤な薔薇が。楽しみですね」

ルリは目を細める。

何かの沸いた感情を押し込めるように、散漫な様子で、「あら此方も素敵ですね」と四方八方手にして気を紛らわせているかのようだった。

そんな姿を見守りながら、根っこが生えたように座っていると、切り替え完了の合図のように手を打ち鳴らされる。

「では、王宮へ戻りましょうか王妃様」

ルリはシャキッと騎士様面して入り口に立っていた。

重たいドレスを引き摺りながらドアに近づくと、少し背をかがめたルリがミルティエの耳元に囁く。

「私達が咎人にならずに済んだのは、全て陛下のお陰なのですよ……」

硬い表情をしたルリが、ミルティエの疑問に1つだけ答えてくれたようだった。

全ては“紅蓮の悲鳴”にある。
しかし、それを知ることが重く深いと身にしみた瞬間だった。

王妃の部屋の秘密（後書き）

完璧にストック0になりました。期日に迫られながら直しました。だって、TDL行きたいから……。どうでも良いことですが。この夏は、ゆっくり続きを妄想しながら（笑）やっちゃった……。な文章を少しはマシになるだろうかにチャレンジする予定です。

ちなみに、設定的に寝室が一番防音。例え雷台風でも気付かないくらいに防音です。なので、陛下がお渡りになっても気付きません。で、隣の書斎は微かに聞こえる位です。居間は薄壁一枚よりはマシですが聞こえます。侍女部屋は薄壁一枚です。

だから、ルリちゃんは態と話していたのですよ。

ルリちゃんは、恩人陛下のために奮闘するのですが、空回り？
だって陛下は温室培養の新品種だから……。

設定萌えだけはしている次の話までには、何か出来ていることを祈って。

2章 プロローグ 紅蓮の悲鳴(前書き)

「真面目に書け」と言われてしまいました。
不真面目だったのかなあ、やっぱりとちょっとだけ反省。

2章 プロローグ 紅蓮の悲鳴

呉藍の薔薇〜陛下の恋愛事情〜

プロローグ 「紅蓮の悲鳴」

大きな漆黒の闇が、紅蓮の大地の上に現れた。

頭上の遙か上。小さな黒点であったそれは、まるで皆既日食の様に太陽を覆い尽くす。

必然、大地は光を失った。

黒点は腕の中でわら半紙を握りつぶし遅かったと嘆いた。

突然の闇に怯み後退する兵士は、グシャリと踏みつぶす不快な感覚と音に、極限状態だった精神の均衡を崩した。

ワアアア。引き裂くような悲鳴と同時に、子供の泣き声がかかる。

この場所に不自然な幼声が幾つも幾つも重なり、攣られるようにして引き金が引かれようとする瞬間、頭上の闇に紅い閃光が2つ煌めく。

地上の紅を閉じ込めたような強烈な色。

「聖霊を殺してはいけない!!!」

遙か真上からの悲痛な叫び声が異様な大地に轟いた。

それに、恐れを成して声は切羽詰まったモノへと変わる。

「殺せ」

満身創痍の指揮官の怒号が飛ぶ。

狂気に満ちた幾つもの幽鬼が大国の陣へと襲いかかった。

黒点は尚も闇を抱いたまま、苛立ちながらも事態の把握に目を凝らした。

数多くの聖霊が入り乱れている。

真っ赤な血の海の中で、自らが流す血に悲鳴を上げる聖霊が居た。

荒れ狂う莫大な力……。共鳴すれば世界の終わりがやってくる。

青白い方陣を重ねて描き、呪文を唱える。

「どうか保ってください……」

声にならない声は、心を鷲掴みにした。

しかし、時は遅く聖霊は呪いの悲鳴を上げて力尽きた。

聖霊は痛みにも弱い。本来なら1度足りとして血を流す事なき神だからだ。

ギヤアアアア。

耳を劈くような高音が辺りを支配した。キーンと耳鳴りが凄い。

一歩で遅れて方陣が完成する。

次の瞬間、闇の中に真っ白い光が生まれ、大地を凍結させた。

絶望が駆け巡る。

それをたつた一人の人間が受け止めた。頭上の黒点は真っ赤な双眸をさせ、歯を噛みしめて耐えた。

地上のスターニス王国の最前線に配置された聖霊の陣。

その格にいた騎士は、自らの金糸に混じる赤毛の様に、象牙色の肌に紅い瞳を紛れさせて前へと駆け寄りながら、自らを依り代に別なる聖霊を呼び出す。

幾度か子供達を守る為に繰り出した紅い閃光は一際輝き、命を喰らうようにまだ若い騎士を疲弊させていく。

「誰か助けて！」と少女は騎士の垂れ下がる腕に齧り付いた。
「もう良いよ……。」と。

それでも、止めることなく攻撃にも使用した力を持って、子供達を守った。

先程まで味方だった筈の聖霊が共鳴し藻掻く。

聖霊を殺さないようバランスを量りながらも、自らも力を繰り出した。

「ひつく……ひつく……」

フィルター越しに太陽の光が覆う大地に、まだ少女と呼ぶべき子供が立っていた。

いつの間にか守るようにしがみついていた騎士の姿も無い。
強制的に戻された陣の中。感覚に刻まれた恐怖に取り付かれていた。何者も見ないように、覆い尽くす手は小刻みに震え、膝は立っているのが不思議なほどだった。

「もう、震えなくて良い。戦争は終わりだ」
聞き慣れた声に少女が恐る恐る指の隙間から、外を窺うと何か立ちただかっていた。

見上げれば、身長に似つかわしくない少年のような顔。

「様？」

少女は見知った名前を呟いた。

漆黒の青年は数ある子供の中から、少女を抱き上げる。

その瞬間、聖霊を閉じ込めていた陣は崩れ去り、聖霊は遙か彼方へと飛び去った。

真っ赤な血を吹き出しながら。

少女は腕から藻掻き飛び降りると、先程の青年を捜した。近くの一角だけ人々が恐れるように逃げ出していく。青年は度が過ぎた使い方に自らを喰われようとしていた。少女は走った。ピンクのドレスを翻しながら。飛びついてしがみつくと、荒れ狂い始めた聖霊は温和しく使役されるモノへと変わる。

青年は安堵にその場に崩れ落ちた。

明るい大地には、血の雨が降る。

その中で、再度終結宣言を告げたのが、次代の王であった。王聖霊をも凌駕する人たる者。

人々は、程なくしてこの王を冷酷王。もしくは冷酷な魔王と呼ぶ。

それは、帰り着いた兵士の戯言が起因だった。

2章 プロローグ 紅蓮の悲鳴（後書き）

悩んだのですが、予定変更して書き直しではなく極力真面目に「陛下の恋愛事情」を書こうかになって……。けっしてピライフで西瓜や向日葵に現を抜かした所為ではないですよ。

エアコンが壊れた所為です。嘘です。直りました。

真面目というのはシリアスなんですかね？

ダテイルの話が抜けてます。なので、もう1回は必ずシリアスが来るのか？

それを言ったらノワも居るんですけど？

良く分からない状態ですが、次回はシリアスではないです。

全然改善がみられないじゃないかとお思いの方。私には文才がないだけです……。御免なさい!!!

ミユも憶えられないラニーの名前講座

ラヴァニーユ・エクリップス・ドウ・ソレイユ・ゾネン・フィン・スターニス

エクリップスドウソレイユ（フランス語）

ゾネンフィンスターニス（ドイツ語）

両方とも日食から付けました。

では、ラヴァニーユは何か。ヒーローなだけあってマシです。だって、フランス語でバニラだから……。

玉葱から取った人も居ますしね……。

プチ講座終了

まあ、そろそろシリアス傾向でも良いかなとか。
この話、馬鹿っぽいので。

次回の更新は、8月5日午前0時です。
良かったらお付き合い下さい。

実桜

陛下の恋愛事情〜発覚〜（前書き）

注意：小話「バジがラニーを慈しむ訳」を知らない場合は？と思われるかも知れません。再掲載予定は10月です。御免なさい！！！！
最後、ちよっぴりシリアス風味です。

陛下の恋愛事情〜発覚〜

2章 陛下の恋愛事情 1

それから6年半。

今や中つ大陸の3分の2を占める大国、スターニス王国。

その枢である王城は首都にドーンと構えられており、厳重な警備の敷かれた王の私室内では……。

暢気な会話が繰り広げられていた。

「……陛下つたら、事もあろうに妃殿下を腰抱きしたんですよ。お姫様抱っこならいざ知らず……まあ、ビスクドール並の小柄な方なので、違和感ないと言えは無いんですけどね。」

「それは残念。父親としては、是非見てみたかったな。ラビはちょっとずれてるからな／＼／＼／＼。」

一人だけ異色な栗毛が、熱血モードで傍らの青年に事後報告している。

同い年に見える青年は、どっしりと構えた風情で聴きながら、最後にクツクツと笑った。

青年は酷く残念そうに、ちらりと息子になり損ねた弟を見上げる。

「ですよね？」

同意を得られて、太陽に向かって咲く向日葵のように目を輝かせた。手元のライトより明るそうな様が見なくても想像でき、1人だけ重厚な椅子に腰掛けている一見少年風の青年は、面白くなさげに持つ

ていたペン先をデスクに打ち付けた。

私室内では、主たる陛下……ラヴァニーユとその側近オルジユ、王兄のカバジートがこれからの対策を至極真面目に検討している筈だった。

先程までは。

今は陛下一人城内の方陣強化のために、複雑な術式を書き込中。

一見文系のカバジートの方が得意そうだが、武系の筈のラヴァニーユは複雑に入り組めば入り組むほど燃える傾向にあり、意外や意外王国1の使い手かも知れない。

「文武両道文句なしに育ってくれた」と育ての親であるカバジートは絶賛だが、天は二物を与えず……二物与えた代わりに最大の欠点それも致命的な欠陥をもたらしていた。

それを肴に二人は琥珀色の液体やら赤黒い液体やらを思い思いにつき、好き勝手に放題である。

煌々と照らされたデスクには黒い頭の影が差し、暗闇の一角で幾つかのキャンドル片手に呑んでいるカバジート達は、肌を照らされてオレンジ色に輝いていた。

ラヴァニーユは溜息一つ吐くと、頬杖を突く。

「別に……逃げようとしたあいつが悪い。それに、あれはお前もやっていたではないか？」

「はあ〜？何時、何処ですか〜？」

いざ王宮へと向かう一行を視界に捉えた貴族達の訝しげな視線の中にココ侯爵縁の者を見つけたミルティエユが、逃げだそうとしたの

である。それをむんずと捕まえ、軽々と手中に収めたラヴァニークは上機嫌で相手を睨め付けていた。その時の腰抱きは“まね”だと言われ、馬鹿にするような言い方でオルジユは反論した。幼馴染みに不敬罪は適用されない。話し上戸なうちは良い。これが絡み上戸に進化するまでに仕上げなければ。

ざるの二人は青ざめても尚、飲み続けるだろう。久々のネタ。それも、ラヴァニークの恋愛事情……。朝まで呑む 仮眠 仕事コースかも知れない。

ラヴァニークは、ちょっとした休憩を諦めて規則正しい図形を幾重にも重ねて書く。

「酔っ払いは質が悪い……。何時って……。ついこの間まで。お前がルリをだ」

「それって、もう6年も前ですよ!!!今やったら身も心もスタブタにされますよ」

「流石に腰抱きは無理があるな。お姫様抱っこにしないで。とは言え、ラビの価値観はオレらとお前らと後宮だけだから……。こんな事なら12の誕生日に追い出し儀式やっとしてやれば良かったか？」

「そうですね……。そうしたら、此処には居ないですよね？」
酔っ払いは勝手に盛り上がる。

熱気に満ちた室内にラヴァニークの冷やかな声が響き渡った。

「……何が言いたい？」

「不敬罪だからとても言えません!!!」

「……大体想像がつくがな……」

本気ではない絶対零度の微笑みでも、怖いときは怖い。オルジユは肩をすぼめて失言に後悔していた。

姿勢を正したオルジユは助けを求めるように、向かいを見上げた。カバジートは弟達の話にケラケラと笑っている。

「ノノノノノとところで、姫さんは続き部屋か？」

そう言つて、ラヴァニーユのデスクの横にある暖炉を指さした。どうやら、この話に置いてはオルジュの味方らしい。

ラヴァニーユの視線はが、オレンジ色の一角から現在は未使用の暖炉に移った。

この城は一筋縄では攻略出来ない。

例えば偏に続き部屋と称しても仕掛けがある。

戸棚の向こうに扉が……なんて仕掛けは古い。

何の変哲もない暖炉の内側。ラヴァニーユが左側の壁に手を当てれば、王聖霊がロックを解除し隣室の暖炉に繋がる。

皆の視線は暖炉に向いていた。その中でも、ある種、この城を攻略することは“男のロマン”だと言い切るオルジュは、熱視線を送っていた。

「ああ。彼処はもとからあれのための部屋だしな」

「後宮が作られてから妃が使うのは初めてだろう？」

「確か建国して何代も経たないうちに後宮つて出来たんじゃないですか？」

現在は新暦516年。つまり建国から516年スターニス王国はある。

その歴史の中で後宮はゆうに、400年以上存在しているという訳だ。

ラヴァニーユは胸を張って、オルジュには思いも寄らなかった爆弾発言を投下した。

「まあな。とは言え、リノベーションは完璧だ」

「はあ？リフォームじゃなくて6年前のはリノベーション？400年以上経っているとは言え、王宮ツすよ。歴代の王の中には趣味部屋やあれな部屋にしてたかも知れないじゃないですか？……なのに、

不自然な空白……尚更、どっちも気になるんですよ。オレ入ったこと無いんですよ。公爵はありますか？」

「嫌いな。父王ですら知っていたかどうか……。なあ、オルジユ」カバジートはそう言っただけのトーンを落とすと、向かいで呑む驚愕の事実を目を見開いたままのオルジユの肩を抱き耳打ちした。

「まさかと思うが、ドルハウスみたいじゃないよな？」

「ルリにはそんなおもちゃ持たせなかったから大丈夫だと思いますが……夫人の部屋はどうなってますか？」

「モナか？あれは花が好きで、ポプリやらドライフラワーにして迄も楽しむ質だ。」

確かラビの12歳の誕生日にプレゼントした兎の縫いぐるみの中身は略ポプリだそうだ。

よく眠れるようにラベンダーの」

酔ったのではないが頬を赤らめながら妻を語るカバジートは異質に思えた。

何時も余裕綽々の瞳は熱っぽさを孕んでいる。流石愛妻家。

しかし、顔だけ見れば微妙な気持ちにオルジユは囚われた。

力を有する王族は皆童顔である。

故に大きな兎の縫いぐるみを抱えてもさして違和感がない。

ただ、背が高いアンバランス差に見舞われるだけだ。

「定期的にリフォームに里帰りする不思議な縫いぐるみの中身はポプリなんですか……！」

オルジユは酔いもすつ飛ぶほどの叫びを上げた。

それもそのはず。

12歳になったラヴァニークがエスピガ家に預けられた際、片手に持参していたのが話題の真っ白な兎の縫いぐるみだったのである。もう片手には分厚い聖霊大辞典……。

「あれはな、モナのお手製だ。効果が薄れないようにと口実を作っては詰め替えている」

定期的に里帰りしては、また違う洋服を着て帰ってくる。

偶に書簡を携えて……。

オルジュはてつきり着せ替えのために出戻っているとばかり思っていたが、意外や意外ポプリ交換とは……。

「あれの中では初めて逢ったときのラビのままなのだろう。その原因の1つは……」

「やつぱり、6年前ツすよね……」

一番戦況の不利な西の砦に送られて、多くの仲間を失い、自らの手で奪ったこと。

ずっと、並外れた力を使うべきか否か。

それに葛藤し続け、無駄に過ぎた時間、無駄に消えた命。

一瞬で終わる力を持ち得て……。

でも、それを行使したら敵国の王聖霊が嗾けてくる。

それは、大陸の崩壊……世界の崩壊に繋がると。

尻込みしていたら、力有る双子の片割れが投入された。

ルリがダテイルに拉致され、最前線で聖霊の陣に組み込まれたとエスピガ家から、傍らのオルジュに知らせが行ったときにはすでに遅く。

慌てて前線に飛べば、敵国の王聖霊は虫の息で。

凄惨な戦場に行使した力は、予想以上の効力も持って、使わなかったことを後悔した。

戦争は一瞬で終結したのだ。

陛下の恋愛事情〜発覚〜（後書き）

陛下の恋愛事情編は、ラニーの恋愛事情が丸裸になるだけではなく、バジの愛妻家ぶりやオルジュのシスコンぶりが良く分かる話となっております。

オルジュの行き過ぎた愛の犠牲になるミュ……とか書ければいいなあ〜と。

オルジュ×ミルティューではありません（念のため）
短編集的ですね。

予定狂いまくりです。

本当に御免なさい！！！！

ちなみにこの話、前話と同じ日にUPをしようかと思ったのですが、ネットでは5に似ていると言う記述を見つけてまして……。

短いですが、お届けできてホッとしております。

少しでも楽しんで頂けたら、幸いです。

実桜

陛下の恋愛事情〜オルジユ的偏愛犠牲〜1（前書き）

タイムアップです。

短くて御免なさい！！！！

陛下の恋愛事情〜オルジユ的偏愛犠牲〜1

2話 陛下の恋愛事情「オルジユ的偏愛犠牲」1

新暦509年初冬。

何代も契約者に恵まれず、衰弱した敵国の王聖霊はダティルの手にかかって永きの眠りへつく。

記載上も葬られた先王ダティルが、力有る者達の中でも子供を誘拐し、戦争の最前線に配置。

目の前で幾千もの人々が死する様を見てしまった珠玉の宝石を、あれから殊更エスピガ家は可愛がった。

オルジユは一時期、片時もルリを離さなかった程の溺愛ぶりを目にしたラヴァニーユは、それが当然とばかりにすり込まれた様である。

その後、運が悪いことに腰に剣を差し騎士となったラヴァニーユは、男所帯の中にあり女の“お”の字の欠片も周りにはなかった。

育ってきた中で身近な異性と言えば、母とアネーモナ、エスピガ夫人とギユルレーク夫人。そして、ルリだけである。

主従関係にある侍女や女官、メイドは異性と呼ぶには少し遠く違う存在だった。

よって、母親達を覗けば、必然とアネーモナとルリの2人に絞られる。

よって、かなりラヴァニーユは特殊に育ってしまったようだ。

「姫様お目覚めですか？」

凜とした声が臆気な意識の覚醒を促す。何処か懐かしい呼び名に身体が染みついていったのか、「お早う……」と返すとむっくりと起き上がった。

視界の端にコーラルレッドのドレスが見える。

同じ赤系統でも、乳母が好んだのは落ち着いたオールドローズやワインレッドだったはず……。

反対に乳母はベビーピンクやサーモンピンクをミルティューユに着せたがった。

幼い時分、傍らに何時も居た侍女は、ミッドナイトブルーの制服姿だった。

『では、この人は誰だろうか？』

「昨日は色々とありましたからお疲れでしょうが、温かいうちに召し上がった方が美味しいですから」

ミルティューユは、話しながらカーテンを開ける姿をようやっと捉えた。

乳母より随分と若い。スターニスでは珍しいストロベリーブロンドを昨日とは打って変わって、結い上げお団子にしている。

その様は、凜々しい騎士様のようで。

「……ルリ様？」

「ルリです！ル・リ！！」

ようやっと出た言葉がそれだった。

ピンと張った背中を捻ってルリは口元で人差し指を振った。髪を上げただけで、大人びてみえたルリ。

其処にうらやまさを少しだけ憶えた。ミルティューユは、朝露を中で輝かせながらするりと紐解くかのように咲く花のごとく、笑いかける。

「ルリさん。お早う御座います……」

「本日から、私のことはルリとお呼び下さい。敬語も不要です。昨日付で騎士からお妃様の侍女に転職しましたので」

ルリは大まかな説明のつもりなのか、昨日を振り返っていた。そう言えば、出逢ってすぐにそんな話をしていたなと想い出す。

騎士だったとは思えないほど、朗らかで人なつっこい笑顔を向けている。

流石は貴族の令嬢とミルティューが感心していると、すたすたと部屋中を歩き回っていたルリがリボンのかかった箱を持参して戻ってくる。

「今朝方、陛下が御出になり、ミルティュー様へと」

「陛下から？ 有り難う御座います」

ミルティューはベッドから足を出すと腰掛け、受け取った包に手をかけた。

受け取る際には感じなかった緊張で手元が定まらない。指を操るように動かし、恐る恐る紐解く。

チェリーピンクの大きなリボンがはらりと膝に垂れた。

高級そうな和紙をどけ、固まった指を伸ばす。

中にはドレスらしき物が入っていた。

あの頃良く好んでできていたドレスに近い色の。

箱をベッドの上に置き、ドレスと共に起き上がる。

シエルピンクがふわっと揺れる。その様は焦がれた物語の姫のようで、うっとりとしてしまう。南瓜の馬車に乗って舞踏会に行くお姫様の話。

ミルティューは数ある中でもあの話がお気に入りだった。

下町娘が王宮に召される。ある種自分は同じ体験をしているのではないだろうか、二次元少女になっていた。

傍らで目を細めてみていたルリの眉間に皺が寄り、米神がひくつくのも知らずに、ミルティューは夢心地である。

「お兄さま!!!」

ドスの利いた声が部屋中に響き渡り、ノックが鳴るやいなや、数名の女官がなだれ込んできた。

それは、ミルティエユの昨日の掃除仲間?だった。

ペスカは慌てて足の指をぶつけたようで、戸口で凭れて足を気にしているが、メリザナはズカズカと中へ駆け込んできていた。

ルリの咆吼は、主人への挨拶すら忘れ去るほどの凄まじさだった。

「どうかしたのルリさん?」

「見て下さいよ、この悪趣味なドレス!」

「「あらま〜」」

ミルティエユが身体に当てているドレスを指さす。

ペスカとメリザナ目を丸くし、アングリ-と大口を開けたまま固まっていた。

後方から控えめにお辞儀をして入ってきたアグウリとヌエースは、他人事のように微笑を浮かべている。

「良いですか、ミルティエユ様。このドレスは全部リボンで出来ます!」

「ええええ!!!」

「そうでしょうとも。分かりますその反応。それを着てはいけません。鋼鉄の鎧なんかではなく、殿方を喜ばせる物ですから!!!」

「どうして?」

「一本を引いても解けるような物では御座いませんが、全身リボンで包んだ状態 即ち、ミルティエユ様自身が陛下へのプレゼン

トと言うことです!!!」

「でも、ルリ様。別に構わないのでは?」

「此処では、他の殿方の目に触れる心配も御座いませんし……きつと、今夜こそお役目初日に御座いましょう」

7年前の悪夢を想い出し苦虫を噛み潰した歪んだ表情のルリを擁護する物は誰一人いなかった。

此処は後宮では無い。しかし、後宮以上に後宮たる場所だ。

結婚6年目。そろそろ世継ぎを待望される歳になっている。
王を如何にその気にさせるか。主人を着飾る側が本来なら考えなく
てはならないのに、王自ら与えたのだ。使える側にとってこれほど
喜ばしいことはない。

陛下の恋愛事情〜オルジユ的偏愛犠牲〜1（後書き）

中途半端ですが、他に区切りようがないぐらいにしか続きを書けてません。

期間空いてるのにこの態です。

ずっと忙しい状態が続いていて、精神が崩壊寸前の為お許し下さい。

続きが早めにアップ出来るよう努力したいと思います。

この話で、ミルティューユの核心に入らないと、ラヴァニーユとの絡みが！！！！ないので。

お付き合い下さり有り難う御座いました。

ちょっと未来なコ話「薔薇が咲いた後 1」（前書き）

ネタばれしています。

濁しもありますが、未来なのだから仕方ないです。

本編の更新が短かったので、Blog用に用意していたものをUPしました。

もう1本は、陛下が出ますがこっちは「天上の呉藍」な話です。

ちよつと未来なコ話「薔薇が咲いた後」 1

ちよつと未来なコ話

「薔薇が咲いた後」

おとぎ話を語るのが趣味だった元侍女が鼻歌を歌っている。

スターニスの世継ぎの乳母にとやってきた女性は、幻の庭からやってきた。

正しく、ハイデルベールの怪事である。

「お久しぶりです。我が愛しの御姫様」

そう言つてにっこりと微笑むマダム腕には幼子が寝ていた。

見ても分かる程に小さい乳飲み子だ。

「私は再び姫様に使えるべく派遣されて参りました。我が子同様永久にお仕え致します」

カタツ苦しい挨拶の後、朗らかに微笑んだ元侍女はビシツと背を但し、行き成り詠唱を始める。幾重にも描かれた魔方陣。進む蒼い光。あの頃と変わりなくミッドナイトブルーの制服を身に纏っている。頭部の真つ白いシニヨンキャップからは同色の細いリボンが垂れ下がっていた。

懐かしいままの姿。

幾分か大人びて母となった顔の目の前に光が集まる。

初めに現れたのは揺りかご。

其処へ腕の中の赤ん坊を寝かしつける。

重力に反してゆらゆらふわふわ漂う。

そして、右手を高らかに掲げると指を打ち鳴らした。

周りは何が起きたのか分からないまま、警戒だけはしている状態だ

った。

そんな周囲に意表を突くように、ドサドサと革表紙の本が降ってくる。

けっして、凶器ではないことに、その中の一冊がふわっとミルティユーの前に飛んできた。

ぱらぱらと紙が風に捲られ、一枚のしおりがひらりと舞い落ちた。とっさに手を伸ばす。

「あれから探したのですよ」

掌の中では、一万分の一の奇跡。四つ葉のクローバーが押し花にされていった。

手元で留まったままの本を手取る。

「世界の姫巫女が呼ばれた先は、王子様の結婚式
その一文が目飛び込んできた。」

あの日途中で逃げた物語の本のようだ。

「ハッピーエンドですから、姫君が誕生したら今度こそお聞かせ致しますわ／＼／＼／＼」

元侍女は、苦笑混じりにミルティユーを見る。

幼子を呵るような愛しさを込めた眼差しが向けられる。

大きなお腹を抱えたミルティユーは、言われてそれを見た。

「残念ながらすぐにお聞かせできないようです／＼／＼／＼」

元侍女は爆弾発言を放った。

「えええ!!!」

「ハイデルベールの名にかけて」

茶目つ気たつぷりに囁かれた予言を冷静に受け止めた元女官長が伝令に走った。

ミルティユーはようやくと懐かしさに涙を零す。

大粒の涙がぼろぼろとポップコーンが弾けるみたいに溢れだした。

その涙を指先で拭くと、「姫様は相変わらず泣き虫ですね」と目を細められた。

程なくして、世継ぎ誕生の知らせが国中に轟く。

そして、元侍女は乳母になった。

ちょっと未来な「話」薔薇が咲いた後 1 (後書き)

めっちゃ短い話ですが。
続きます……。

ちよつと未来なコ話「薔薇が咲いた後 2」(前書き)

本編の更新より長くなった気がする……。取り敢えず、需要はないと思いますので、次の更新までの期間限定でUPしておく予定です。

ちよつと未来なコ話「薔薇が咲いた後 2」

蒼穹の瞳をしまい、希望と夢を握りしめた赤子に、“バラが咲いた”というらしい歌を口ずさむ。

その鼻歌が皆に伝染した頃のこと。

薔薇は蔦を伸ばし更に1つ艶やかな呉藍を咲かせていた。だから歌は替え歌。遠い昔からその歌はそうだった。

ミルティエーユが子守歌代わりに“バラが咲いた”を歌い、我が子を寝かしつける。

その傍らでは、まだ慣れない幼子の存在に、おっかなびつくり触れるラヴァニーユの姿があった。

一見長閑な情景だが、隣室では戦争が繰り広げられている。すやすやと眠りについた我が子を慈愛の眼差しで見つめる。

「そろそろミユの茶が飲みたいのだが……」

「うん、どうでしょう？」

持て余したラヴァニーユが、子供みたいな瞳を向けて甘えた声を出す。

相変わらず初々しく頬を薔薇色に染めながら、凱旋門たる扉に視線を移した。

未だ勝利報告も勝ち鬨もあがっては居ない。

「ずっと、このまま居たいのは山々なのだが、そろそろ戻らぬとオルジユに永延泣かれる」

「そうですね。あまり押し付けては可哀想だわ」

「ミユは私の心配はしてくれないのか？」

「いいえ、私は第一にラニーユの心配をしてるわ／＼／＼／＼」

『子より夫です』と常日頃から囁かれている（洗脳）ミルティエーユ

は、口にしてから恥ずかしさに鼻歌を歌い誤魔化す。

こんな時にとっさに出たのがバラが咲いたなんて馬鹿だ！と更に穴があつたら入りたい状態に陥ったミルティーユは完熟林檎そのものだった。

一番という言葉に嬉しくなったラヴァニーユは手慣れたようにミユの手を取ると、意とも簡単に引き寄せ軽々と抱き上げてデーヴァの唇を奪う。

色恋なんて1回箍が外れれば、憶えるのなんて早いしすぐに慣れてしまう。

まるで林檎の芯の蜜を味わうかのように求める。

それは、深く深く混ざり合うようなキス。

間で揺れる揺りかごは数ヶ月前の位置のように、ミルティーユのお腹のあたりで揺れた。

魔法の揺りかごはふわふわゆるらゆるら夢見心地。

当初の持ち主は、並んで置かれたベビーベッドの中ですよすや。

2人はこれ以上はどうにもならないというところで離れる。

互いを繋ぐ名残がすつと伸びた。

その残骸を互いに恥じらいながら拭くと、どちらとも無く扉に抜き足差し足で近づく。

甘い世界は現実には引き戻されると居心地が悪い。

完全防音ではない重厚な扉の向こうはやはり白熱している。

「ラニー。他でお茶しましょうか？」

「逃げたって最終的には……だろう？」

「……やっぱり行かないと駄目？」

地に足を付けた状態では遠いが、肯定とばかりに頷くのが分かる。そっとそっと気付かれないように扉を開ける。

「ミルティール様には此方のパール・オーキッドで仕立てた方がお似合いですわ」

「いいえ、ライラックですわ」

「私はラベンダーが良いかと……」

女官達が世継ぎの公式なお披露目の用のドレスを仕立てるのに燃えていた。

揉めていたと言う方が正解かも知れない。

常の赤系統ではなく、落ち着いた色をと言うことで紫系統に決まったのだが、色とは無数にある物だと言う事を、ミルティールは今日初めて知った。

「では、リラは如何かしら？」

「パウダーパープル、好きですよ」

「断然、マロウですわ!!!」

「いいえ、姫様には若紫ですわ!!!ねえ陛下？」

覗く程度にしか空いてなかった扉に向かって、現世継ぎの乳母が声を掛ける。

並の騎士より鋭い。

観念したように2人は戦場へと足を踏み込んだ。

「私はミユにはシエルピンクが一番似合うと思うぞ」

「それでは、常と代わり御座いません。王妃様の薔薇が栄える様に、淡い感じでシックで、清楚で控えめな」

「そんな色在るのだろうか？」

ミルティールは苦笑いしか浮かべられない。

もしも、どれがと選ばされても詳しくないので答えようもないだろう。

「では、アイル・トーン・ブルーだな。それ以外認めない。以上だ」
陛下の一言で、紫系から青系にシフトした。

紫系しか頭になかった女官達は、いきなりの趣旨替えにポカンと口を開けた。

中には一拍遅れてポンと手を打つ者も。

何故だか、皆一様に頷く。それは、魔王と呼ばれている所為ではないらしい。

「陛下も成長なさいましたよね」

「あの頃の事を想い出すと……」

どうやらラヴァニーユの成長ぶりに親心を見出したようだ。

ラヴァニーユの方が年上だったりするのに……。

「では、デザインは如何致しましょうか？」

「マーメイドライン」

「髪型と飾りは？」

「お前達に任せる。華やかにしても良いぞ。但し、ティアアラを忘れるなよ」

「かしこまりました」

まるで、常の執務のような遣り取りによって、戦争は終結した。

数々のサンプルは戻され、簡素な室内へと戻る。

ラヴァニーユは片付いたテーブルセットへ移動すると、溜息を零しながら定位置に腰を下ろした。

ミルティーユの淹れたお茶を楽しむために。

当のミルティーユは、話しについて行けないまま、終結したことに不服なようで、幼子のように乳母に尋ねる。

「ペール・オーキッドってどんな色？濃いそれとも淡い？……紅いのかしら蒼いのかしら？　ねえ、／／／／／私にアイル・ト

ーン・ブルーは似合うかしら？知らないからとても心配だわ。恥を掻かせるわけには行かないもの……」

未だに学習心は衰えない。

そんなミルティーユと乳母の会話を目を細めて眺めていた。

ずっと、幼子の頃から見守っていた光景そのものに幸せを感じながら

ちよつと未来なコ話「薔薇が咲いた後 2」(後書き)

元侍女が乳母に転身したシリーズとも言ったのか？
久しぶりに書き始めたら、書き方忘れました。
意味不明な文章しか書けない。

過去編「バジがラニーを慈しむ訳」(前書き)

この話は、6月の間、あとがきに小話として分割掲載したものの再録です。

加筆修正はしてあります。

すっかり11日設定にするの忘れてました……。

過去編「バジがラニーを慈しむ訳」

過去編「バジがラニーを慈しむ訳」

“男女七歳にして席を同じうせず”ではなく、“男女12歳で床を同じうせず”が後宮でのルールだった。

ラヴァニーユは後宮を11の歳に出た。

本来は12の歳、後宮で褥を覗き見させられてから追い出されるのが慣例だが、主たる父王がその前に亡くなったのだ。

必然先王の後宮は閉じられる。

「いいか、ラビ。父王崩御の知らせがまずはお前にいく。そうしたら、俺の所へ空間転移してくるんだ分かったな！」

第3王子にして、今はマール公爵次期当主となった兄がラヴァニーユの11の歳の誕生日祝いの際、囁いた。

この頃、先王（先々王）は一年の殆どを床で過ごしており、実質政務をになつていたのは、臣下に下ったカバジートであった。

長兄は極端に言えば、実直か放蕩かどちらかと言えば後者であり、隣国の姫を母に持つ故にプライドが高く、姑息で
劣等感の塊
でしかなかった。

と言うのも、誰もが口に出さないが詰まりは漢字2文字が当てはまると言うことなのだ。

臣下に下っても、父王が健在な限り王子の身分は剥奪されない。それがスターニス王家の決まり。

故に、先王は数居る息子の中から第3王子を指名したのである。

「まさか、お前がそんな選択をするとは想わなかったよ……」
「父上は何がお望みで？私とてこんなに早いとは想っておりませんでしたよ」

ベッドに縫い付けられたままの先王は、不意に弱音を吐いた。

11の歳に危篤となった身ではあるが、傍らに付き従っていた王聖霊はまだ迎えは来ないとカバジートに告げてから11年あまり。

後1年は生きると言っていたではないか。

「そうと分かっていたれば望まなかった　　いや、運命は望まざるともやってくるものか……」

「歯車が違った原因ですか」

「……どの子も私にとっては愛おしい……からね」

自らの余命に気付かぬまま、命のひとしずくを分けてしまった愚かな王。

息子は苦笑いを浮かべるしかできない。

自らとて、アネーモナと離婚できるわけでもなく、かといって妃に迎える事も出来ない。

例え国が荒れても……。

幾民の命を奪う結果になっても……。

17の歳にはもう戻れない　　。

即位できる条件は、穢れていない王家の血を引く血から有る者。

何をもって汚れと成すかは分からないが、カバジートの妻は穢れという種類の毒持ち。

今は契約して一心同体に等しい身。

「あの時、王聖霊が今の結果を告げていたのならば、現状は変わっていたかも知れませんが　　」

カバジートはそう答える事しかできなかった。

誰よりもあれを王に据えることを望んでいなかったのは、国を想うカバジートその人。

「貴方の思いを踏みにじることをお許し下さい。私は遠くない未来あれを殺すでしょう。幾民の血を流した後に。私はその前に片付け

ることは出来ない。ラビを見守る。それは、生まれる前からの約束ですから」

「……お前に一番辛い役目を担わせるのだな私は」

「……」

「私がお前の分も詫びよう。罪深いのは私一人。自らの夢のために妃達に酷いことをした。そして、私は運命をも狂わせる……」

「ラビは私の命に代えても守ります。立派な貴方の世継ぎとして」
淡々と最期の遣り取りを交わす。

カバジートは王が泣くその前に辞した。

何も知らない温室育ちのお王子様と真綿で包む王子様。

後宮を出てしまったカバジートとは頻繁に逢うことは叶わなかったが、兄弟の中で異質なほど仲が良かった。

先王の代わりを務めだしてから、後宮に出入りが可能になり、そつと人目を盗んで末の弟の成長を見守っていたからだ。

異国の御菓子や書物を土産に近づき、何時しか深く入り込んだ。存在は大きくなり、ラヴァニーユはカバジートに憧れた。

「兄上、大きくなったら私は兄上の役に立つ人になりたいんです。

方陣の勉強も母上に褒められたんですよ」

「そうか頑張ってるな。王家の者には力がある者が王位を継ぐ。また、支えるのだ。そうして、国を民を守るんだよ」

「はい！精進します」

小さな頭をわしゃわしゃと自らが与えられたのと同じ様に大きな手で褒めた。

末の弟は大人の中で育った所為か賢かった。

賢すぎて何か欠けていくと気がついたカバジートは、ご学友にと公爵の3男を父に持つオルジユを招いた。逢うのは後宮ではなく王宮で。

それからは、ラヴァニーユの勉強は王宮の一室で執り行われた。

その部屋からは花の宮が見えた。

王子は小さな宮を与えられる。

カバジートが5年過ごした花の宮を12になったら与えられることになっていた。

その事が嬉しくって、父王が予定より長生きしてくれればとラヴァニーユは願っていた。

しかしそれは、成就することはなかった。

夜中暑苦しさで目が覚めた。

季節は夏へと移り変わる雨期の終わりだった。

聖霊が労るようにラヴァニーユの額に触れる。

心地よい冷たさは、すぐに身体の芯までを冷やした。

「……崩御されたのか？」

声変わりする前のハスキーな声が、問いかける。

聖霊は、黙って頷いた。

ラヴァニーユはガバツと起き上がると、寝間着のまま空間転移を実行に移した。

後宮は汚される事を許されない聖域。故に妃が何人居ようと、血で血を洗う醜い争いも起きない場所だった。

しかし、主が崩御した。
聖霊は風のように去った。

男子禁制の後宮に何者かが近寄る気配がする。

その気配を察知したのか、隣室からラヴァニーユの母フルトが血相を変えて飛び出してきた。侍女が慌ただしく結界を張っている。

「早くお逃げなさい！」

「母様は？」

「私は陛下を送る役目があります。命の心配はありません。しかし、貴方は違う。貴方は唯一の希望よ。どうか生き延びて、愛する子！
！！」

何故、カバジートが崩御の知らせが先にラヴァニーユに行くと言っていたのか、理解した。

王聖霊は次代をラヴァニーユに定めた。それは、父王の意志による物だろう。

まだ不慣れな轉移の方陣がぐるぐる回り出す。幾つもの呪文が混ぜ合い、解け合い……大きな円を描く。

蒼い光は、部屋一杯に溢れ一瞬で王城近くに構えるマール公爵邸へと飛んだ。

消える間際、フルトが泣いていた。

声を掛けることも出来ないまま、一瞬の閃光に飲まれる。

移転先は、カバジートとアネーモナの寝室だった。

カーテンは閉められて居らず、月明かりが闇を追い払っていた。

「……誰だ？」

咎める声とは違う尋ねる声が聞こえる。気配で敵味方を判別したの
だろう。ラヴァニーユ程ではないが、カバジートは王子の中でラヴ
アニーユに次いで力を有する者である。

他はカスでしかない。

ラヴァニーユは声のする方を見た。そこは大きな天蓋付きのベッド
だった。

ゴクツと唾を飲み込む。誰かの寝室に入るのは初めてで、緊張して
動けない。

ラヴァニーユは母が賜っている一番良い部屋の侍女用の部屋を長年
自室として使用していた。それは異例のことだった。

バサリとカーテンを払い中から夜着に身を包んだカバジートが顔を
覗かせた。

「何だ、ラビか……」

カバジートが付けた愛称を掠れた声で呼び、そして、事態に気付い
て顔を硬直させる。

兄弟の中で一番賢いのだ。

恐れていた現実が、予定と変わらない時期にやってきたのだと悟っ
た。

ぐちゃぐちゃと顔を顰めて泣く子供は、十分に現実を理解していた。

「兄上……」

「……」

「……」

「まあ、中へ入れ」

カバジートは、事態を察すると、生欠伸をかみ殺しながら、夫婦の
ベッドへ思春期の子供を誘った。

そういう面に疎いラヴァニーユでも、女性の仄かな甘い香りに戸惑
いを見せる。

母と侍女、女官に囲まれての生活だったが、男を求めるような環境
ではなかった。

ただのテントの中へ入るのではないのだから、気が引けて動けないでいると、カバジートは仕方ないなとばかりにベッドから降りる。其れを追いかけてか、プラチナブロンドの長い髪が天涯の隙間からチヨロチヨロと揺れた。

「本番後とかじゃないから安心しろ。父上の知らせは明日の昼過ぎないと来ないだろう。明日の朝の儀でアールドウ様に問いかけて、身を清め全て整えてからでないと公表されないからな。そして、送るときはエーアデ様に祈りを捧げる夕刻でないと。お前の母上は大丈夫だ。墓守になる使命があるからな」

「うつ……ひいく……」

カバジートはカ一杯ラヴァニーユを抱きしめた。時折慰めるようにポンポンと背中を叩く。

しゃくり上げる苦しさが次第に和らいでいくのを感じていた。

伝わる熱は温かく優しい。ちらりと涙を溜めた瞳で見上げると、夜着から覗く肌は引き締まっていて固く、少し花の香りがした。

「可愛い小鳥さん。真の闇はこれからよ。一緒に寝ましょう?」

鈴を転がしたような愛らしい声が天涯から漏れてきた。ラヴァニー

ユの義姉アネーモナの声だ。

巻き毛の成れの果てのような髪がうねるように誘う。

「ほら、子供は寝る時間だ」

そう言っ頭を撫でると、カバジートは抱き上げてするりとベッドへ運び込んだ。

初めてのことにガチガチに固まったまま真ん中に寝かされた。

誰かと寝るのは凄く久しぶりで、挟まれるのは初めての体験だった。

父王の崩御後命を狙われると理解していたが、真っ先に狙われる対象だとは思っても居なかった。末子だからと。一番弱い雛なのに……。

守られる安心に満たされると、冷静に事が見えてきて、先を見通せなかった子供な自分に嫌気が差した。

「何固まってるんだ？……お前、追い出しの儀式の前か／＼／＼／

／
「……………」

クククと楽しそうにカバジートは笑う。

「俺なんか父上に11になるや否や呼び出されて、早くにやらされたのにな……まあ、仕方ないか。あれから、床に伏したからな……つて、他はどうしたんだろうか？」

先王（先々王）は、ラヴァニーユが産声を上げたときにはすでに病床の人だった。

それから、11年長く持ったと言っても過言ではない。

と言う事は、第4王子から第6王子までは、儀式が行えたのかと今頃になって疑問を持つ。

其程までに他の兄弟に関しては無関心だった。

「バジ様つたら／＼／＼／＼」

反対側に寝そべっているアネーモナは真っ赤に染め上げた顔を覆う。ラヴァニーユは何のことか分からないまま、涙をびたつと止めてカバジートの話を聞いていた。

「まあ、もう時効だから、思い出話に話してやろう……」
今夜の寝物語は、儀式の話になるようだった。
小さい頃、カバジートに守られていた頃は、良く寝物語を聞かされた。
懐かしくて嬉しくて、父王の死を忘れてしまっぐらいだった。

でも、それは王家の真実を暴く恐ろしい話だった。

『俺が10歳の終わり、男爵家から巫女が嫁いできた。それがラビの母上。』

父王は7人目の妃を迎えたのだ。』

そう言うと、カバジートはラヴァニーユの頭を撫でた。

両親の馴れ初めなど聴いたことがなかったのでポカンと押し黙っている。

撫でながら、カバジートは話を続けた。

『今までの6人全て一人ずつ子を成していたが、2人目が産まれることはなかった。』

それ以前に、生存者は一人しか居らず、皆早世している。

1つの原因は、力ない王族の王の子でさえ産むのにはそれなりのリスクが伴う。十月十日胎内で慈しむ命に、全て持つて行かれたのだ。第5王子の母親は庶民で、孕んでいるときはずっと床に伏していた。大きな悲鳴が聞こえて部屋の前を通りかかっていた為開ければ、がりがりに痩せて腹だけが突き出ている幽鬼な状態で出産を迎えたようだった。豪華なドレスからはみ出た手は、枯れ枝のように噎れて細い。

断末魔は大きく木霊し、鼓膜に張り付かせた。』

そういう話題から遠ざけられて育ったラヴァニーユでさえ、怪談話

のようなカバジートの語りに背筋を凍らせた。

後宮の醜い争いを封じられたとは言え、嫉妬に塗れていた時代を知らない少年は何処まで理解出来るのだろうか？

カバジートはラヴァニーユを伺うこともなく喉を潤すようにゴクツと唾を飲み干した。

『結局難産で、辛うじて取り上げると同時にこの世を去った。

非情に美しかったが最期は枯れた花みたいだった。

長兄の母親も美しい人だったらしい。出産と共に亡くなったのはこの2名だと後に聞かされた。

産後の肥立ちが悪く亡くなった妃も一人居り、当時、俺の母上だけが辛うじて生存している現実には、奇跡のように思えていた。

その母も、ラビが知るとおり今は他界している』

自らも呪いに悩まされるアネーモナは、可愛らしい顔を歪めて聴いていた。

子供には早い話だが、ラヴァニーユは正当な王位継承者。王が死した今、この話を語れるのは、一時期皇太子と見込まれていたカバジートしかできない。

ラヴァニーユは拳を強く握りしめて、聴いていた。その瞳を瞑ることなく、蒼穹の瞳を見開いていた。

何も知らない子供に語るのは酷だったかと、微笑を浮かべてその大きな腕に抱き、背中をポンポンと叩いた。

『第2の原因は、父王が姫の誕生を望んだ事にある。

長年、力ない父王は、姫の誕生を夢見ていた。公爵家に産まれて王家に産まれないのはおかしいと。

それは、俺の母上の死因の原因でも在るのだが。

妃達が懐妊に気付かない内に流れてしまう。その全てが姫だった。繰り返した妃達は、幼い子を残して死んでいった。

母は数度それがあつたようだが、公爵家の娘だったため助かったよ
うだ。

しかし、身体は弱り、成人前に逢えぬ人になつた』

カバジートが16の秋、2人しか居なかった妃の1人カバジートの母は地下の礼拝堂に祀られた。

やせ細った王が見送り、それが公式の場に出た最期になった。

『父王は、何かを悟ったように、12の歳に行われる儀式を前倒しして俺を連れ出した。』

寝ていた俺を無言で迎えに来た父王に手を引いていった。

「身体は大人になっているんだから問題無い」と言っつてな。

今にして思えば、皇太子には正式な儀式を自ら行っつもりだったんだらう。』

幼い瞳は間近で大人びた瞳へと変わった。

哀しみを含んだ瞳……。

「兄上はどうして、皇太子の座を棄てたんですか？」

「それはね、私が毒持ちの公爵令嬢だったからよ」

「……」

ずっと聴きたかったことを尋ねたことを後悔して絶句した。

カバジートは聞き流し、話を続ける。

一昔と言える様な年月を経たが、未だ記憶は鮮明。

脳裏にこびりつくような強烈な場面を幾つも見させられたからかも知れない。

それとも、淡い想いを閉じ込めた心のパンドラ故だらうか？

『たどり着いたのは、後宮の中央の部屋。先までラビお前が居た部屋だ。』

寝室のバルコニーに繋がれ、夜風に晒されながら、清楚で気丈なフルト殿が自らと二回りも離れた父王に初めてを捧げるところを一部始終具に……見させられた』

カバジートは、言いようのない表情を浮かべて当時を振り返る。

この時、フルトは17を迎えたばかりだった。

『「この者はお前の母だ。かつての名はフルト・デ・ヒンコ。ヒンコ男爵家は代々巫女を輩出する不思議な家系だお前も知っているだろう?」

父王は薄く透ける天涯の中の寝台に居るフルト殿を見せ、発した言葉がそれだった。

知っている馬鹿にするなど少々反抗的な目で、俺はフルト殿を見ると、少し強張ったように肩が揺れた。

隣国では初夜が公開だとか、契って散った純潔の証を掲げるとか馬鹿らしい風習がある国もある。しかし、スターニスにはそんなことはなく、かなりシヨックだっただろう。』

目を瞑れば初めて後宮入りした時の、線の細い可憐な少女だったフルトが思い出せる。

カバジートが6歳年上の父の妃に恋をした瞬間だった。

幼き頃より巫女として神殿に上がっていたフルトは、耳年増ではなく世間知らずな箱入りだった。

『身体を壊していた父王はそんなフルト殿を一晩中抱き続けた。

外は満月で、薄い天涯すら邪魔だとばかりに開け放たれたベッドはよく見えた。

交わる度にきしむ音が、初心者が奏でる弦楽器にも似て聞こえ、不快に感じられた。俺の憧れは音を立てて崩れていく。その度に何かを手放すかのように、涙を零すフルト殿とシンクロしているようで、無意識のうちに必至で手を差し伸べていた。

切なさが伝わる涙ですら救い取ることも拭うことも出来なかったが……。

普段はのらりくらりとした性格の良い意味で言えば、温厚な父王は正しく獣で、俺はその瞬間夢も憧れも無くなった気がした……。』

少し刺激が強かったのか、カバジートの胸元をラヴァニーユの涙が濡らした。

音を立てて崩れたのは初めて経験する甘酸っぱい想いではなく、父

王への憧れや信頼感だった。父上としか呼ばなかった存在は、偶に遠くを見る様に父王へと変わった。

きっと、ラヴァニーユはそんな物は持ち合わせていないだろうと思っていたが、ベッドに寝たきりでも王たる威厳だけは最期まで失うことはなかったのだろうか？

「泣くな……」と、優しい声で諭す。今語っていることとは反比例して、身体は何も聴くなと言わんばかりにラヴァニーユを包む。すると、隙間からフルフルと首を振った。

泣いていないと言いたいらしい。

そんな背中を背後から優しく撫でるのはアネーモナだ。

出来ればこの話はアネーモナには聞かせたくなかったが、仕方がないことだ。

「彼は恐ろしさに泣いているのではないわ。きっと、貴方の心が傷ついていると思ったからよ」

「俺は傷ついていないよ。それが、儀式だと今では割り切れているからね。……そして、ここからが本題なんだ」

カバジートは苦笑し、ラヴァニーユを放す。

温かさに薄桃色になった顔がひんやりとした空気で冷えていく。

『確かに欲望・興奮・快感……繰り返し見せる波に、嫌悪を抱き、やがて見ている自分にも罪悪感が芽生えた。』

すべてが終わった後、白けた空に父王の言葉が現実へ引き戻した。

「儀式は終わった。お前は特別だ」

その意味が理解出来ないまま取り残され、羞恥に頬を染めるフルト殿と2人きりになった。

「貴方は味方？」と尋ねられ無意識に首を縦に振っていた。

多分、俺の初恋はフルト殿だったと思う』

ラヴァニーユ越しにアネーモナの反応を伺いながら、カバジートは片手で自らの顔を覆った。

知ってか知らずか、初めての行為を義理の息子の儀式として見世物

にされたのだ。

泣き伏せるか、罵倒するか、癩癩を起こすか……数ある選択肢の中から、フルトは気丈にも背を但し、にこやかに微笑んでカバジートに問いかけた。

その姿は凜と咲く花のようであった。

『巫女の家系に産まれたフルト殿は予感していつたのだと、悟つたのはそれから随分しての事だ。あの日の晩から父王は王宮の自室で床に伏せつたから断言できる。父上はその時唯一力在る俺を、皇太子にすると決めていたのだと思う。』

俺も幼心に、当時はあれを王位に付けたくは無かつたから、漠然とだかなる気ではいたんだ……』

「……………」

しかし、時は残酷だ。儀式を済ませることもなく継承権もないままにラヴァニーユを放り出す。

12歳にならなければ、王たる資格はない。つまり継承権を得られないのだ。

其処にカバジートの計算の誤差が生じた。

『あの日、フルト殿はお前をラビを授かつた。再びお逢いしたのは、父上が危篤状態になった時だった。すぐに持ち直したがな。腹がドレス越しにでも分かるくらいには、ふくよかになっていた。それを悟った瞬間、あの日の問いかけを想い出した……』

カバジートは儀式開けの朝、気丈に放つた言葉の意味を知った。

そして、永遠に断ち切れない初恋の呪縛の始まりでもある。

「お前の愛称はな、俺が付けたんだ。で、誕生祝いは引っかけて兎を選択してただろう？」

場の空気を変えようと、ケラケラと笑いながらカバジートは爆弾発言。

「ラビって兎なんですか？」

「月にはな、兎が住んでるらしいんだよ。満月でよく見えたからな

……」
月のクレーターなどの陰影が、スターニス王国からは兎の餅つきのように見えると昔から言われている。

カバジートは目を細めてラヴァニーユを見下ろした。酷く真剣な面持ちである。

『フルト殿もけてお前が王位に就くことを望んでいたわけではないと思う。何故ならば、お前を私の元に来るようにと導いたと言ったとき、安堵した様子で肩の力を抜かれたからだ。なあ、ラビ。俺達の養子にならないか？』

「……………」
突然の申し出に何と答えたらいいのか分からない。大好きな兄の息子になれるのは嬉しい。

けれど、何故こんなことを言い出すのか腑に落ちなかった。

カバジートはラヴァニーユを追い越して、その先のアネーモナを見る。

満面の笑みを讃えたアネーモナがコクツと頷いた。

ラヴァニーユにはシーツの擦れる音しか聞こえない。

新婚なカバジートが何故と言う疑問が堂々巡りを繰り返すだけだった。

『多分、俺達には子供は出来ないと思うんだ。でも、マール公爵家には跡継ぎが必要だ。』

お前なら納得するし、公爵家なら何れ王聖霊が呵るべき場所に帰ることも可能だろう』

「……………」

「私ね……毒持ちなの。マール公爵家の娘は時々呪われるのよ」

「！？」

吃驚して振り返ると、アネーモナは唇に手を当てて秘密よと。

ごく自然なことのようにすました顔で言うから、担がれているのかと思った。

“毒持ち”とは、双子の呪いの一部だ。胎内にいる内に片割れを吸

収してしまう恐ろしい行為。これが二卵性なら大した問題ではない。聖霊の血を引く王族の濃い流れの一卵性の女兒だったから問題なのだ。

しかし、事実だと次の言葉が語る。

「貴方が領いてくれると、私はバジに妾を薦めなくても良くなるの。鈴のような高い声は、掠れた声になってラヴァニーユの耳に届く。毒持ちは、聖霊に感化されやすく、傀儡になることもあり、聖霊との繋がり故に子をなす機能はない。

花が萎れるような錯覚に囚われた。愛とか恋とか知らない世界で育つたが、漠然と脳裏に浮かんだのは“義姉上は兄上を愛している”と言う直感。

「ラビ領いてくれるか？」

その言葉に、再度寝返りを打ち、元のカバジートの腕に返る。

何時も余裕綽々なカバジートの切羽詰まった顔が迫って来た。

カバジートも今ではマールの珠玉の花を愛しているのだろう。

養子が王弟なら誰も文句が言えない。

本当に実現するなら、デがバジかラビになる日が来るのだろうか？
ラヴァニーユ・バジ・マールとかラヴァニーユ・ラビ・マール。想像してくすぐつたい想いに胸が囚われた。

「……僕でも良いのですか？」

「一番の選択肢だよ。ラビが生まれたときから、導く者でありたいと願っていたからね」

夢のような気がして恐る恐る尋ねる。

カバジートはくしゃくしゃに緩んだ顔をして、カ一杯抱きしめた。

「さっそく、朝一で手続きしましょう。明日は色々な意味で忙しいわ。寝られたら寝ましょう」

弾む声がラヴァニーユの背を温める。

大好きなカバジートを“父上”と呼び、同じ屋敷で生活が出来る。多くを学び、期待に応えなければと思いを馳せて寝られなかった。

しかし、この夢は12歳迄しか続かなかった。
王にダテイル3世が即位し、王子達の運命が変わったからである。

過去編「バジがラニーを慈しむ訳」（後書き）

中途半端な感じもしますが、こんな感じですよ。

今回の更新は間に合えば、この話のカバジート視点？です。

”あの日”から端を発した話です。

だいぶそれた番外編が続いて申し訳ありません。

しかし、加筆部分で汚れ役な部分もだ出たかなと。

次話は改訂するなら加えたかった部分を盛り込めたらなと想っております。

ラブラブにはまだほど遠いのですが……。

王子様が迎えにきてもすぐにはハッピーエンドにはなれないけど、ハッピーエンドなの。な話が書きたかったので。

王宮に移ったミュに次の波が押し寄せてくれば、やっと落花にたどり着けるのかな？でもその前に、天上でネタ晴らしてしまうのか。それとも波はカロートなのか。

今のところ不明ですが。

年内に少しでも天界が進めばいいなとは想っております。

ここまで、長々とお付き合い下さり有り難う御座いました。

実桜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5382s/>

呉藍の薔薇

2011年10月13日12時50分発行